
蛇と土精と悪魔とか？

10 ^ -24

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

蛇と土精と悪魔とか？

【Nコード】

N9052S

【作者名】

10^-24

【あらすじ】

作者が好きな微マイナー作品群のキャラがハイスクールD×Dの世界にいたら、という妄想オリ主転生系作文です。原作キャラはしばらくは出ない予定。拙い文章ですが、暇つぶしにどうぞ。

スタート画面

目が覚めた。

周囲の明るさから新しい朝、あるいは電灯のつけっぱと判断。現状を把握すべく、僕は横臥姿勢のまま枕もとの目覚まし時計へ手を伸ばす。すかる。寝起きなせいかな。昨晚のことはよく思い出せない。仕方なく上体を起こし身の回りを視認せんところみる。

そこでやっと、自分以外の人がいることに気づく。見れば、数瞬前まで僕が横たわっていた寝台の数センチ横に置かれたパイプ椅子に、一人の女性が腰掛けていた。再来月にハタチとなる僕よりいくらかお姉さんといった年頃。その、なんとというか、無能な部下を煙草ふかしながら始末するのが似合いそうな、そんな印象。

「おはようさん」

と、声をかけられたので、何もわからぬまま

「あ、はい…おはようございます」

と、間抜けに返してしまう。

見知らぬ女性のことにはひとまず置いておき、再度視線をさまよわせ、現状の把握に努める。

まず、目覚まし時計…は無かった。というか、今僕が長座している寝台は僕のものではない。加えて、この部屋も僕のものではない。この部屋は寝台と椅子以外になにもない。床も壁も天井も真っ白だ。

僕がはじめに明るいと感じたのも、そのせいだ。

では誰のものか？おそらくは目の前の見知らぬ女性のものだろう。ここに来てようやく理解が追いついてきたようだ。つまり、

昨晚僕は意識も記憶も吹き飛ばすほど飲んだ。そしてそこで知り合ったお姉さんと情交。朝チユン。

ということだろう。まさに論理的帰結。惜しむらくは情事の記憶もまったく無いということだが、とにかく無事に卒業できてよかった。真面目に心配していたのだ。童貞のまま死んでいくのではと。

「死んでいるぞ」

「…は？」

何？今、口に出してたか？というか死んでいる？誰が？

「君はおよそ30分前に死亡し、ここは死後の世界で、私は…神、のようなもので読心術がつかえる」

混乱する僕の疑問を先回りされる。そんなこと、簡単に信じられるわけが…

「周りをよく見てみなさい」

また先回りされた。そう思いつつ、素直に周囲をもう一度見回してみる。

「…あ」

見えたものは先ほどと変わらない何も無い白い部屋だった。そう、扉も窓も明かりも無い白い部屋。

出入り口が無いのなら、どうやって僕はここにいるのか？光源が無いのなら、どうして白が白に見えるのか？

今度こそ理解した。この現状は僕には把握できないものだ。

「理解したようだね。私と君は情交になど及んでいないよ」

「少し残念ですけど、そんなことはどうでもいいんです。もっと大切なことがあるでしょう！」

「何かな？」

「解っているくせに……。これから僕がどうなるのかということですよ」

「冷静だね。普通、もつと横道にそれるものなのだが。まあいい、これから君には転生してもらおう。天

国でも地獄でも消滅でもなく、ね。」

「輪廻転生……。だったら僕の記憶や自我はじきに死んでしまうということがあるか。」

「いや、君の場合は記憶も精神も継続した転生になる。」

「それは、特殊なことなのでは？ いったい何故？」

「偶然」

「偶然っすか」

「どんな規則にも例外がある。たまたま君がそうだっただけさ。」

「それで？」

「何かな？」

わかっているくせに。

「この対話に何の意味が？」

例外とはいえただの人間の前に神が姿を現したのだ。何らかの意図があると見るべきだろう。

ひよつとすると僕のこれからに僕の意思を反映させてくれる可能性もある。

「読み通りだよ。実は、君のような例外は転生後の人生が波乱万丈になる傾向にあつてね。その救済措置と言うのは傲慢だが、何らかの特典をつけることになっている。つまりは、なんでも願いを叶えてあげようということさ」

「なんでも？本当に？だったら…」

「あー、言い忘れていたが、転生する先は元の世界とは限らない。無限に存在する可能性の世界のひとつということになる。そして特典を豪華にすると等比級数に難儀な転生になるぞ。神の力を一部とはいえ貸与するのだから当然だが」

「転生先は選べないのか」

となると、どうする？どんな願いも裏目に出てしまつかもしれない。何せ、無限の可能性なのだから。

かといって全能を願えば一秒先に熱的死の迫った宇宙になりかねない。ならば、

「あなたの良識に期待して、お任せします。」

これがベストだろう。

「ふうん、それでいいのかな？」

「ええ、僕の手に残る判断ですから。」

「あいわかった。常識的な転生を約束しようじゃないか。因みに、君、名前は？」

「青井 射央あらいです。ギラよりは使える名前と自負しています。」

しかし、どうしてそんなことを聞くのだろうか？

その疑問は先回りして答えられることはなかった。

始まり未満(前書き)

すっごく短いです。

始まり未満

どうも、僕です。

記憶を保持したまま転生することとなった元・青井　イオです。1歳になりました。

神の良識に任せるといふ判断が功を奏したのか、転生先の世界は、以前自分がいた世界とほとんどかわらないようです。転生してから集めた情報によると、僕がいるのは、太陽系第三惑星地球の日本国で、西暦も生活水準もかつていた世界の日本と同じである、ということ。まだ詳しくは知りませんが、歴史もおおよそ似たり寄ったりなのでしょう。

つまり、僕は当たりを引いたということですよ！

論理的思考や記憶の一部を取り戻したのが生後3ヶ月ほどだったのですが、そのときは周囲の環境を確認して歓喜にうちふるえましたよ！ええ、本当に。

突然死んだとか聞かされてわけのわからない異世界に逝ってこいとか言われたときは絶望しかかりましたが、この状況はそう悪くないと思えるのです。何故かって、家は比較的裕福だし、家族仲は良好だし、母は綺麗だし、ぶっちゃけて言うと転生前よりずっと幸福な家庭というわけです。

これはもう、普通に人生をやり直したと言えるのでは？特に2歳年上の姉が可愛くって、もう。

そうそう、あの時神様が僕の名前を尋ねた理由がわかりました。なんのことはない、転生後も同じ名前にしてくれるためでした。名前が二つあると混乱するからという粹な計らいといったところでしょうか。まあ、性は変わりましたが。

なんだか気分が乗って誰かに聞かせるような独白をしてしまいましたが、この辺にしておきましようか。

以上、青井 イ才改め蘭乱爛崎 伊緒1歳でした。

何故だか、その名前に、ゾクリと小さな寒気。

出所のわからないそれを、僕はいつしか忘れていた。

始まり未満（後書き）

魔女カリ知らない人にはイミフだろうなあ・・・

金髪ロリ！！金髪ロリ！！（前書き）

一話一話の量が少ないですね…。

金髪ロリ！！金髪ロリ！！

僕こと蘭乱爛崎 伊緒は姉の寝々ねねと一緒にソファの上でテレビ番組を見ている。特撮ヒーローが画面の中を駆けずり回っている。

転生からさらに幾ばくかの月日が流れ、僕は3歳に、寝々は5歳になっていた。

因みに、僕らの家族には、父と母、僕、寝々の他に10歳の兄がいる。母の先祖に西欧の人がいたらしく、その金髪は、僕と寝々にも遺伝した。生粋の日本人である父の形質を色濃く受け継いだためか、兄は黒髪だったが。

「わしわし」

と、寝々がヒーロー番組をみて興奮しているのか、両手をぐっばぐっばしている。一方僕は、特撮ヒーローよりもそれをみて燃えている幼い姉の姿に感じ入っていたのだけだ。

僕は前世でも、当然現在も幼女偏愛嗜好ペドフィリアではないけれど、端正な金髪の童女が無邪気に振舞っているさまは、母性でも父性でも、ほぼ全ての人の庇護欲を刺激するはずだ。つまるところ、ようじよ可愛いようじよ。

爆発音に我に返ってみると、どうやらヒーローが勝利したようだ。僕は、この番組の敵役が気に入っている。どこと無く愛嬌があるのだ。よって倒されてしまって少しさびしい。まあ、倒される瞬間もどこかユーモラスなのだけだ。

いまだ熱気冷めやらぬといった様子の寝々がぐるりとこちらを向

き、

「わたし、せいぎのみかたになる！それで、イオのことまもってあげる！」

そう言った寝々の瞳には、幼いながらもなにか真摯で尊いものが宿っていた。

「ありがとう！お姉ちゃんはぼくのヒーローだよ！」

ハナマル付き健康優良児である寝々に対して、僕はやや病気がちだった。そんな弟を気遣う言葉も寝々のよいこを裏付ける微笑ましい事実のひとつであるはずなのに、何故だろう、僕はどこか空寒いものを感じていた。

「そう、わたしはせいぎのみかた！イオのヒーロー！だれよりもつよくなるの！だったら『わたし』のことも『わたし』なんてよわそうないいかたはやめなければね！ええと、『せつしゃ』？いや、もっとつよい……………『せつしゃさま』！ええ、せつしゃさまはせいぎのみかた！」

……………え？

あれ、僕はどうしてこんなに動揺しているんだ？何かおかしなところがあったか？

確かに日本語としては変だけど、幼児の言語感覚ならばそう不可

解なことでもない。というか、僕が戦慄する理由にならない。奇妙だ。そして似ている。

この感覚は、姉の名前が蘭乱爛崎 寝々で、僕が伊緒であると知ったときに似ている。どこが似ている？

この感情にふさわしい要因が現状に全く無いところだ。つまり、

この感覚は前世の記憶に根ざしている。

これは20年弱の前世の記憶のうち、いまだ思い出せていない部分が無意識に点す危険信号^{キイロ}だ。未熟な脳には早すぎる情報なのかもしれない。

だが、思い出せ。そうしなければならぬことだと思い出が訴える。同時に、本当に思い出しているの？と、本能がささやく。わかっている。きっとこれは絶望の種。知れば安穩はもう訪れない。

それでも恐怖を、好奇心が、焦燥が、使命感が、自傷が凌駕する。過去の経験から鍵となる条件を絞り込む。

キーワードは、おそらく《蘭乱爛崎 寝々》《正義の味方》《拙者様》
.....

寝々は自身がなるべき正義の味方に集中しているのか、僕の様子がおかしいことに気づかない。それをいいことに僕は脳神経を軋ませながら記憶を復旧していく。痛い。痒い。怖い。むかつく。

そして、

「……………あ」

ついに、目的の記憶を探り当てた。

そして僕は知った。それは暗赤色の未来。

この世界は……………僕たちは……………

《ぼくと魔女式アポカリプス》という作品があった。あった、というのは僕の前世でという意味だが。それは所謂ライトノベルであり、詳しくは語らないが、ある意味王道な学園伝奇小説だった。ここで重要となるのは、その作中に蘭乱爛崎 寝々と伊緒という人物

が登場することだ。

そう、ここは、僕の前世における物語の世界だった。無限の可能性の世界と神に言われたとき、物語のような世界を僕は想像したのだけれど、まさか物語の世界そのものに自分が入り込むことになるとは、盲点だった。

あの時神が僕の名を尋ねた真の理由が今はわかる。僕の名前と一致する人物が登場する作品を逆指名するためだったのだろう。

あの冷たく整ったサディスマイルが目に浮かぶ。あの女ア…、二度と会うことは無いだろうが今度遭ったら刺してやろう。

そして、だ。本題に戻るが、この寝々と伊緒という姉弟は、作中では悲惨なことになっている。この作品自体が、ライトノベルというジャンルの中では比較的重く、暗いテーマを扱っているのもあるが、とにかく救いの無い末路である。感じた寒気も、それが理由であろう。

よって、原作通りにシナリオが進行することは切実に避けなくてはならない。前世の記憶を持つ僕というイレギュラーがいる以上、ここは本当の原作の世界ではないはずだ。ならば、おそらくあんな未来を変えることは可能だろう。

無邪気な姉のはじける笑顔を思い浮かべ、僕は密やかに決意した。

金髪ロリ！！金髪ロリ！！（後書き）

最初こそシリアス風味ですけど、最初だけです。

実姉フリグはアリですか？（前書き）

蘭乱爛崎語の再現がむずい…
違和感あつたらすいません。

実姉フラグはアリですか？

あの日、この世界を《魔女カリ》原作から乖離させ、僕と寝々の未来を救うと決意してから、僕はまず、曖昧な前世の記憶、とりわけ《魔女カリ》の知識を思い出し、今後の対策を練ることから取り組んだ。

思い出せる限りの情報すべてから考察し、原作での姉弟の悲劇の最大の原因は、僕ら姉弟の犯した《間違い》にある、とぼくは結論した。

よって、最善なのは、僕らがそうだった関係にならないこと。次善として、もしそういった関係になっても、《間違い》を犯さないこと。

このあたりを目標に、あの日から行動を開始しているのだが、具体的には、己を磨いているのだ。ただひたすらに。

どうしてこうなったかという点、原作の僕らは共依存関係にあったのではないかと仮説を立てたためだ。体の弱い弟を姉が守ろうとした。それが、どこかで間違えたのではないかと。

即ち、互いが自立しつつ、支えあうような対等な姉弟関係を築くことができれば、問題は解決するはずだ。そのためには、僕が寝々に頼らないくらいに強くなることが重要である。

そして今に至るといっわけだ。

しかしこれがなかなか簡単ではない。何故か？燃えているからだ、寝々も。

どうやらあの日、正義の味方になって僕を守ると誓ったことが本気だったようで（予想していたが）、そりゃもう熱心に特訓（特殊訓練の略）に励んでるし、両親も英才教育施しちゃうし、そのうえ本人に天賦の才がありやがるしで、ちよっとしたセガール状態である。

元々ハンディキャップを抱えていて、才能もない僕では、どうやっても追いつけない高みに寝々はいつてしまった、というわけだ。

まあ、それでも、体を動かすうちに病気は克服したし、寝々ほどではないけれど、僕自身、そこらの凡俗には遅れをとらないくらいには強くなった。

少なくとも、寝々に依存する心配は無くなったことになる。しかし、

「姉さん、僕はもう平気だから無理して僕を守ってくれなくていいんだよ？」

と言ってみるも、

「イオは本当に優しい子なのだわ。正義的に実に優良よ。けれども心配御無用。姉が弟を守るのは、正義の味方がよいこを守るのは、当然自然に正当至極な物理法則であるのだから。」

と、全く改めるつもりは無いようだ。

僕の努力では、寝々のブラコンと正義を治療することはできなかつたらしい。

まあ、原作よりは遥かに健全な姉弟関係ではあるけれど。でも、このままでは少し悔しいので……

「だったら、そのサンバイザーはずした方がいいよ。」

「どうしてかしら？正義の味方にとって顔を隠すアイテムは必要条件のだけれども？」

「勿論、姉さんの可愛い顔が隠れるのが勿体無いからだよ！」

というと、何故だか寝々は紅潮して、

「っ！！そ、それなら仕方ないのだわね！ええ、可愛い弟の頼みだもの！そもそも、こそこそと顔を隠す義務は本来劣悪にこそ課されるべきだということは宇宙開闢以来の不変の真理であって、正義の味方である拙者様としては、こんな正義的に良くできた弟を授かったことを因果律に感謝しなければならず、つまり、…優良だわ！優良至極！最良通り越してもはやウル良！！！」

なにやら理解不能な言葉を連ねて、寸前まで身に着けていたサンバイザーを、ぽーいと放り投げた。

因みに、ウル良＝ウルトラ優良だ。たぶんだけど。

このように、小さな改変ならば、容易く成功するようだ。さらば、サンバイザー。

というか、むしろ大きく失敗しているような気も、………まさか、ね。

少し話が変わるが、《魔女カリ》原作には、当然ながら、蘭乱爛崎姉弟とは別に主人公やヒロインたちがいる。彼らも彼らでなかなか悲劇である。

どうせなら、僕は彼らも助けたいと思っている。当然、自分たちのことが最優先だけど。

しかし、だ。助けようにも、僕には彼らに会う手段が無い。彼らについて知っているのは顔と名前と家族構成くらいが精々で、どこにいるのかもわからないのだ。

原作の舞台となった都市の名前など最初から覚えていないし、学校の名前もつろ覚えだ。確か、…ナント力宮だった、ような…？

原作知識では、寝々と主人公たちは同じ高校だったはず。彼らと接点をもてるのは、少なくとも寝々の進学する高校が決まってからとなる。

そして、僕が中1、寝々が中3になった。

「姉さんは、どこの高校を受けるの？」

「駒王よ。お父様の勧めでね。特に拒否する理由もないし、正義

の味方的には親孝行も職務の一環なのだわ。」

………そんな名前だったか？

思い出せそうで出せない、そういったものを解消した爽快感がまるでない。いや、そもそも忘れてしまっているのだから、そんなあやふやな感覚をあてにするべきでないことは分かっている。

それでも無意識が告げている。これは、違つと。

僕の行動が影響して受験校が変更されてしまったのか？寝々は原作どおり英才教育を施された完璧超人（人格を除く）であり、学力において差異はない。ならば僕が、「お父様の勧めを拒否する理由」を無くさせてしまったのだろうか？

こちらは十分にありえそうだ。何故なら寝々が父の勧めを拒否する理由など、僕が正義かに決まっているのだから。

なににせよ、不味いぞ。このままでは主人公たちに接触できない。前世で僕は、あのはっぴーとはとても言い難い難しいストーリーに、惹かれると同時に憎悪していたのだ。現実に起こることならば、なるべく回避したいところだ。

しかし、なんだ？

先刻からどうにも、かえって疑問が増したような、違和感がある。ただ記憶と現実と隔たりがある、というだけでない、別種の不快感。そしてこれとよく似た感覚を、僕は知っている。考えるまでも無い。3歳のときに感じた思い出せない記憶の警鐘。つまり、

《駒王》という名前を僕は知っている？

そしておそらく、《駒王》という言葉に、正史との食い違い以外の、何か重要な意味があるのだろう。《蘭乱爛崎》や《拙者様》と同様に。

両者の類似点は、思い出さなければいけないのに思い出せない、というもどかしさだ。

だが、異なっている部分もある。今回は、以前感じた戦慄や焦燥とは無縁だ。ただ気になる、という感じ。

思い出せ。この言葉にどんな意味がある？

キーワードは《駒王》……………駄目だ、思い出せない。
どうやら、まだ足りないようだ。

今のところは保留しておくしかないか。主人公たちのことは気になるが、今は手のうちようがない。

引き続き寝々を警戒しよう。

この後、僕の予想など大きく裏切って、物語は僕たちを困り始めるのだが、このときの僕は、やはり、それを知らない。

実姉フリグはアリですか？（後書き）

やっとD×D要素が出せた。

魔女カリの要素が強いのは序章だけで、本編入ってからは、ちゃんとD×Dらしくする予定なので、どうぞよろしく。ちゃん

はじめての……（前書き）

ホント短いですよね……

自分の文章力の無さを実感した。

はじめての……

中学1年生の1月、冬休み明け、僕は昼休みを教室で友人たちと過ごしていた。

「それでよー、…イオ？聞いてんのか？」

「え、ああ。何だっけ？」

「だーかーらー、明日の日曜日、また一緒にナンパしにでかけよーぜーって話」

「そーそー、お前、中身はともかく見た目だけは女ウケいいじゃん」

「砂村、お前、後でちょっと話があるから」

佐伊藤と砂村、中学に入って出来た悪友^{バカ}だ。何かにつけてセクシヤルな言動が目立つ、典型的な中学生男子といったところか。当然、モテない。理由は、

「蘭乱爛崎くん、その二人と一緒にいるとバカが伝染^{うつ}るよ？」

「るっせークソビッチ！！私生児でも孕んでそれを苦しめて自殺しろ……！」

「そーだそーだ！女顔が好みならレズセックスでもやってるーい
！」

「アンタ達ってほんつとうに最低ね！！」

理由は、……まあ、聞いてのとおりだ。というかコイツら、ホント最低……。

「で！？どーするんだ、女顔野郎。つーかもう、参加決定な！なんかムカついたから！」

「てゆーか姉ちゃん寄越せ、シスコン野郎！DVD！DVD！」

コイツら……。確かに寝々にそういう人ができるのは望むところだが、だからといってこんなクス共に可愛い姉をくれてやる道理は無い。

というか、もうじき高校生になるというのに、あの姉には浮ついた話のひとつも無い。才色兼備な完璧超人だというのに、だ。

どうやら、そういう話を片っ端から跳ね除けているらしい。

………僕、関係ないよな？健全な姉弟関係だよな？

ガラリ、と教室の扉が開いた。

何気なくそちらに視線を向けると、一人の女生徒が立っていた。

見ない顔だ。クラスメイトではない。スカーフの色から、同年代と分かる。長い黒髪を後ろで二つにくくっている。なにやら緊張している様子だが……

「誰だ？あんな可愛い子なら、俺がすでに告白しているはずなんだが……」

と佐伊藤。

「ていつかあの子、こっち来るぞ」と砂村。

砂村の言うとおり、彼女はぎこちなく僕らのほうへ歩いてくる。そして、僕の前で止まった。きよろきよろと視線をさまよわせたり、すーはーと深呼吸を繰り返したりしつつ、

「蘭乱爛崎くんっ！」

「はい……」

これは……もしかして……まさかの……

「わたし…、ずっと前から貴方のことが好きでした！明日の日曜日、午後4時に原々公園に来てください！」

愛の告白というやつなのではないだろうか？

彼女（そういえば名前聞いてない）が顔をまっかつかにして走り去っていった後、僕の悪友含め教室中が息を吹き返し、騒然となった。中でも悪友二人が最悪で、

「テメエ、イオっ！！あんなのどこに隠してやがったあ！！」
と叫んで僕にヘッドロックをきめる佐伊藤と、

「いつどこで知り合ったんだ！？抜け駆け許さない、絶対にだ！！このっこのっ！！」
と言いつつボディブローを繰り返す砂村。

「覚えてない…ゴフツ…、ってか、たぶん初対面」

「ンだとゴラァ！！！！」

「初対面でっ！お前はっ！あんな可愛いこをっ！顔か！？やはり男は顔だというのか、キシヤアアアアアアアア！！！！」

「この腐れシスコン女顔野郎！！お前は俺たちの心を裏切った！！お前が！死ぬまで！殴るのをやめないっ！！！！」

激化したバカ二人の攻めが鬱陶しかったので、軽く気絶させてお

いた。忘れがちだが、僕だって一般人よりは強いのだ。

ところ変わって、我が家。

僕はとある目的のため、姉の部屋の前にいる。4度ノックする。

「姉さん、入っていい？」

「イオならいつでもおっけなのだよ。」

許可が下りたので、進入。勉強机に向かっていた寝々は、手を止めて、体ごとこちらへ向き直る。親しき仲にも礼儀ありな態度に、危うく惚れそうだ。いや、冗談ですよ？

「それで、何の用かしら。ひよっとして夜這」

「話したいことがあるんだ。姉さんに。」

言わせてたまるか。何度でも言うが、健全な師弟関係なのだから。

「そう……。で、話って？」

何故少し落胆したような……いや、気のせいだ。きっと。そう思え。

「実は……女の子に告白され「グシャ」……っ！さ、されたって
言ったら、姉さんはどうする……？」

いきなり日和る僕。仕方が無いだろうが。

「告白」と発した瞬間、姉さんの乗った椅子が床にめり込んだの
だから。

「まずその雌の経歴を、最後におねしょした年齢から自慰経験の
有無まで徹底的に調べ上げ、イオに見合う正義存在かどうか査定す
るのだわ。初期値は、……劣悪暫定九割からでいいわね。これは、
おまけしてこれよ？」

想像通りの過保護……。だが、僕の口から言ったことで、大分ま
しには成っている。沈黙と不干涉をクラスメイトたちにお願ひ（物
言わぬバカ二人を有効活用して）して本当に良かった。

僕はこれを、寝々に弟離れさせる絶好の機会としてみているのだ。
これを機になんとしても、健全な姉弟関係を実現させて見せる！

初対面の彼女のことは、当然好きでもなんでもないが、可愛い子
だったし、悪い子でもなさそうだったし、これから好きになれるだ

ろっ。

だからここは、もう少し話すべきだ。

「その女の子のこと、僕が好きだって言ったら？」

より深くめり込む椅子。拡張魔術か？質量増移なのか？

「それなら……仕方ないのだわ。劣悪暫定九割から八割に軽減」

僕の意味は一割分ですかそうですか。

これは良くないな。想像以上に良くない。生まれてからずっと一緒だった相手に、こんなことをするのは、とても気が咎めるのだけど、これは必要なことだ、と自分に言い訳して、僕は、

「僕が誰を好きになるのが、姉さんに口出しされることじゃない。僕の好きな人が劣悪だなんて、姉さんに言われる筋合いは無いよ！」

と、突然怒った振りをして、部屋から出て行く。

「イ、イオ!？」

背後から聞こえる戸惑い慌てる声に、腹の中の黒いものをこらえて、更に嘘を重ねる。

「小さい頃からずっと、姉さんは自分の考えを僕に押し付けてばかりだった!僕は、姉さんのそういうところが、大嫌いだった!」

そう言って、扉を閉める。

「イオ!今のは、お姉ちゃん少し言い過ぎたのだわ!というか、仮定の話では無かったの!?!だから、だから……………」

追いつがる姉の声も、僕は、

「今日はもう、顔も見たくない」

と無情に切り捨てる。

扉越しに、かすかに嗚咽のようなものが聞こえた気がするが、それさえ無視して、僕は立ち去る。

考えてみれば、僕が寝々を拒絶したのも、これが初めてだった気

がする。

「は

短く自嘲する。

一体どこが健全な姉弟関係なんだか。

これが正しいのだと自分に言い聞かせ、その日は眠りに着いた。

はじめての……（後書き）

次からやつと本編に入ります。

やっぱ会話パートがあると書きやすいなあ。

序章終了、本編開始（前書き）

非常に痛々しい内容になっております。
自分の文章力の無さが恨めしい……
きつと後で死ぬほど恥ずかしくなる。

序章終了、本編開始

翌日、つまり約束の日曜日・午後3時38分。

僕は約束どおり原々公園へと向かっている。このまま何事も無ければ、待ち合わせ時刻のおよそ10分前に到着するだろう。

昨夜のことを思い出す。今でも、苦々しいものがこみ上げてくる。

あれから、寝々とは一度も顔を合わせていない。きっと傷ついて
いるだろう。こうしている今も涙を流しているかもしれない。

それでも、あれで良かったのだ、と思う。たとえ一時深く傷ついたのだとしても、このまま行けば破滅が待っていた公算が高いのだから、それよりはマシだろう。

まあ、後でフォローを入れておく必要はあるだろうけど。ヤンデ
シ化されたり、自殺されたりしたら元も子もない。

重要なのは、僕たちは家族で、そういう関係には成り得ないのだ、
と認識してもらおうことだ。

と、考え込んでいるうちに目的地に着いたようだ。彼女はもう来
ているだろうか。

「あ、来てくれた！蘭乱爛崎くん！」

10分早く着いた僕より先にいた彼女は、僕の姿を見つけると、ぶんぶん手を振って顔をほころばせた。

「呼ばれたからね。普通は来るさ」

「それでもわたしは、来てくれるかどうかすっごく不安だったんだよ！ありがとう、来てくれて」

「それで……早速なんだけど、きつ昨日の返事、聞かせてもらえないかな……？」

昨日と同じくらい緊張した面持ちで催促する彼女。だが僕は、その前に聞くことがある。

「その前に、さ。今更なんだけど、僕たち、どこかで会ったかな？会ってたなら、本当申し訳ありませんなんだけど、君の名前も思い出せなくて……」

「あつ！そうだよな。いけない、わたしったら！あのね、蘭乱爛崎くんが忘れてるんじゃない、蘭乱爛崎くんはわたしのこと知らないの！わたしが一方的に蘭乱爛崎くんのこと知ってるだけで！だから、蘭乱爛崎くんは謝らなくていいの！」

と、凄く慌てた様子で僕の謝罪を打ち消してくる。その必死さに、思わず僕は微笑んでしまった。

「そつか。それなら良かった。それで？名前を覚えてくれると嬉しいんだけど？」

すると彼女は、しばし躊躇ってから、

「……ピスキス」

と呟いた。

「カッコいい名前だね。実は海外の人とか？」

と褒めるついでに疑問も解消しようとして試みるも、

「ありがとう。でも、早く答えを聞かせてくれないかな？じれったくて、わたし、気が変になりそう」

と急かすので、

僕は、言う。

最低最悪の、目の前の少女の純粋な心を壊滅的に汚辱する嘘を。

強姦魔の垂らす精液よりなお汚らわしい、粗悪な打算に満ちた言葉を。

「僕も、君のことが、好きです。」

或いは、この後起こる事柄は、あの加虐趣味な神ライターがこんなにも劣悪な僕に施した、
正義なのかもしれない。正裁なかもしれなかった。

「ありがとう！本当にありがとう！わたしたち、恋人同士なんだよね！うれしいな……」

ぼろぼろと涙までこぼして笑うピスキスの姿に、僕は当然ながら強い罪悪感を抱いてしまい、その引け目からか、気づけなかったのだ。

普段の僕なら決して見逃すはずの無い、彼女の微笑みに混じった

凄惨な色を。

そうして、満面の笑みを浮かべて駆け寄ってくる恋人を、僕は拒めない。疑えない。

そんな僕の救いがたい愚かさ故に、運命の時は、物語の本当の始まりは、目前へと迫る。

僕に目掛けて走る彼女の、右手が異様な光を放ち、そして

「殺す必要があったの！！誤解があるようだけでも、何かしやうとしてたつて言うのはね、イオを害そうとしてたつてことなり！！」

「どついつことだよ！？そ
そんな僕らの言い争いは、」

「いったーい」

という、口無しになつたはずの存在の気の抜けた言葉に切断された。

「素人ではないと聞いていたけど、ただの人間があんなに動けるなんて！」

僕と姉さんは絶句して動けない。目の前の異常な光景は、僕たちの理解を超えている。

「気配も全然感じなかったし、そもそも覚醒もしてないのに人払いの結果をぬけるなんて、どういうこと？」

有り得ない。かわしたのでもなく、受け流したのでもなく、まとも当たったのを僕も姉さんも見ている。ならば彼女は、頭蓋が碎けて脳細胞を撒き散らしているか、首の骨が折れて血と唾液を垂らしているかのどちらかであるはずなのだ。それが自明であるから寝々も、手応えの確認をしなかった。

「まあ、こうなってしまった以上、片方は諦めるしかないか」

だというのに彼女は、ほぼ無傷でなんてことの無い風に立っている。それが有り得ない。

通常なら。

僕は知っている。異常超常に類する存在を。

しかし、知らない。原作にこんな代替魔術師はいなかった。ポステリオルマキス

ならばこいつは何？何故こんなやつが現れてしまった？

僕、か？

ピスキスの右手が、再び光を帯びる。

愚かな僕は、いまだ無益な思考に囚われている。

ピスキスが僕を見る。その瞳に確かな嗜虐の光が宿る。

僕は動かない。

ピスキスの右手から光の槍が放たれる。

僕は動けない！

ピスキスの放った槍が、僕の心臓目掛けて奔る。

僕は

結論から言うと、最悪の末路と成った。しかし、最悪というのは、
えてしてそれを後悔できる自分がいるから、最悪だったと批評でき
るのだ。

つまり、僕は死ななかつた。それどころか無傷だった。にもか
わらず、結果は最悪だった。それは、

「イオっ！……！」

と叫んで僕を突き飛ばす寝々であり、

ぞぶっ

という致命的な喪失の産声であり、

僕の見ている前で爆散する姉の右脇腹であり、

胴体の三割を失い、僕の腕の中で血と熱を尽き果たしていく家族
であり、

「ぶっしっ……」

などと問う間抜けな僕であり、

あいしているから

の形を描いて、そのまま動かなくなる彼女の唇であり、

正義の味方だから、ではなく、

姉弟だから、でもなく、

僕が見ない振りをしていたソレを理由に、僕をかばって×んだ姉さんであり、

姉さんを×なせた、バカでクズでマヌケで救いようが無く愚かな僕であった。

姉さんの死体を抱えて、僕は呆けている。

「残念よ」

僕のやってきたことは、結局、全てマイナスだった。

「こんなことになってしまった」

姉さんは、少なくとも今は、まだ死ぬはずではなかった。

「神器保持者は、なるべく生け捕りにしたかったのだけど」
セイクリッドキア

僕の迂闊な行動が、姉さんの死期を早めてしまった。

「悪魔の駒、馬鹿げたシステムよね、本当」
イーヴィルピース

僕の決意など、傲慢な思い上がりも甚だしかったのだ。

「神器保持者も、墮天使も、天使も、それ以外の何もかも、死者
ニンゲン
さえも悪魔として転生させる？何よ、そのズルは」

原作でだって、ひどい末路だった。

「こっちは真っ当に生殖するか、人間を洗脳するか神器を奪うか
しないと戦力を拡大できないのに」

だけど、あと4年は生きられるはずだった。

「アザゼル様ならなんとかしてくれると思うけど、現状は地道に
頑張るしかないのよね」

僕のせいだ。

「二人とも無傷で連れて帰って、洗脳を施すのがベストだったん
だけどなあ」

僕なんかを助けて、姉さんが死ぬんじゃないか。まるで意味が無いじゃないか。

「そのために、弱そうな弟を先に洗脳して、人質にするはずだったのになあ」

こんなの、あんまりだ。

「再起不能にならない程度に痛めつけてから拉致しようとしたら、姉が出てきちゃうんだもんなあ」

僕は、こうならないために、頑張ってきたはずなのに。

「未覚醒とはいえ、保持者二人をわたし一人で相手取るのは危険だから、弱いほうだけでも戦闘不能にしようとしたんだけどなあ」

強くて、賢くて、可愛くて、とても優しい姉さん。

「姉が庇って死んじゃうとは……もつと手加減すれば良かったよー」

僕は、貴女を助けたかったのに。

「だからせめて、君だけでも一緒に来てもらおうよ？強い神器だったら良いんだけどなー」

もう、終わった。

「抵抗の意志は無さそうだね。重畳、重畳」

僕なんか、生まれてこなければよかった……………

「あ、でもその前に、悪魔に転生できないように姉の体を跡形も無くしちやわなきや」

僕はこのとき、姉さんの死以外について、何も考えられなかった。

ゆえに、この直後に耳にする第四の人物の声も、心に届くことは無かった。

「面白そいなもの、みつけたー」

僕の意識は、ここで途切れる。

序章終了、本編開始（後書き）

そろそろ話が明るくなってくる…はず、なので、次に期待…してください。

最後の新キャラも版權キャラです。

ヒントは、やっぱりややマイナーで、名のある悪魔です。

というか、ピスキスが書いてるうちになんか可愛くなった。
こんなはずでは……

よつごと、裏の世界へ（前書き）

キャラ崩壊ひどいな。

ようこそ、裏の世界へ

気がつくと、天井と蛍光灯が視界に在った。

まあ、ここはお約束として、あの言葉が適切だろうな。

「知らない、天井だ」

いやあ、こつちの世界にも彼の名作が存在していることを知ったときは、まるで旧友と再会したような気持ちだったなあ。何せ、住む人がまるで違う世界なのだ。前世との繋がりを、創作物に求めても仕方の無い境遇だとおもっ。

そのため、前世より更にオタク化したとしても、誰が僕を責められよう。

そんなよしなしごとを考えていると、

「あら、起きたのね。イオ」

と、ベッドに寝かされている僕の耳元で、生まれ変わってから毎日聞き続けていた声がした。

とりあえず抱きつく。

「むえ!？」

ああ、姉さんは可愛い声で鳴くなあ。あは。

そういえば、何故だか姉さんは下着姿で僕のベッドに潜り込んでいた。

まあいいか。

「ちゃんとツツコミをいれて欲しいのだから!いや、突っ込んで、とか入れて、とかいうのではなく!！」

混乱している姉さんも可愛いなあ。頼ずり。

「ひあっ!そ、そもそも、どうして拙者様が生きているのか、とか
」

理由なぞどうでも良い!そんなことよりスキんシップだ!!!くんかくんか。

「やあっ!息が!息が!!!」

一度喪いかけたという事実が僕を暴走させ、姉含有物質の過剰な摂取という凶行に及んでいる。

ぺろぺろ。

「らめえ!!」

きつと、家族愛が暴走していたからなのだろう。

「禁断の近親相姦、キヤー」

第三者の存在に気づけなかったのも。

小一時間かけて誤解を解き（姉さんにその姿勢は全く見られなかったが）、

「いいかしら？確かに拙者様は、イオが相手ならいつでももおっけなのだけでも、突然襲うのは劣悪なのだよ。そりゃ、強引にされるのも嫌じゃないけども……じゃない!!とにかく、手順というものが正義的に存在するのだよ！」

といった、姉さんのお説教？を拝聴し（下着姿でベッドに潜り込んだのは姉さんですよ、とは言わなかった）、

現在僕たちは、僕たちを助けてくれたという二人と、テーブルを挟んで向かい合っている。

「場所はなんと駒王学園高等部の第二カウンセリング室だ。」

「まずは、自己紹介を済ませよっか」

最初に口を開いたのは、先ほど僕の暴走を誤解した女性。

小学生といっても通用しそうな、小柄で幼い容姿。

髪は長く、輝く乳白色で、瞳は金。

常に一秒先の遊びについて考えているような、にこにこ顔。

「私は、クローセル。悪魔だよ。人間としては黒瀬 誅歌^{ルイカ}って名乗ってる。ここで教師をやってるから、黒瀬先生か誅歌^{ルイカ}って呼んでね。好きなものは温泉」

……………はいい？

僕をおいてけぼりにして、自己紹介は進み、

「で、こつちが……………」

黒瀬先生は、隣にたたずむもう一人の女性に視線を向ける。

年は姉さんと同じくらいと推測。

しかし、非常に大人びていて、きりりとした印象。

艶のある黒髪を首元で切りそろえている。

「フロレット・ハーベンハイトです。クローセル様の従者をさせて頂いています。」

主人の視線に答え、よどみなく簡潔に自己紹介。

雰囲気どおりのできる女性って感じの対応だ。

ただ、この人……俗に言うメイド服を着てるんだよね……

いや、それだけならまだ良い。従者という発言が本当なら、西洋の人だしおかしなことではない。

だが、首輪をチョーカーにする感性はどうだろう？

本人の趣味なのか、主人に強要されているのか、黒瀬先生に視線で問いかける。

『OKよ』のジェスチャーが返ってきた。違う！『今夜どう？』の視線じゃない！

さっさと質問に入りたいので、手早く自己紹介を済ませます。

「危ないところを助けて頂いたようで、ありがとうございます。」

僕は、蘭乱爛崎 伊緒です。」

因みに、姉さんは僕が寝ている間に自己紹介も現状の説明も済ましているらしく、無言で僕の隣に座っている。まだ少し顔が赤い。

「いきなりで失礼かもしれませんが、あなた方にいくつか聞きたいことがあるのです。よろしいでしょうか？」

「うん、私から説明させてもらおうよ。わたしたち悪魔について、君たち姉弟を襲ったものについて」

「そして、今の蘭乱爛崎 寝々について」

黒瀬先生が語った内容は、ざっとまとめるところだ。

・この世には、天使・堕天使・悪魔がいて、三つ巴の争いを繰り

広げている。

・人間には、稀に「神器」という異能力を先天的に宿したものがいて、寝々とイオがそうであり、ソレを狙って、墮天使・ピスキスは僕たちを襲った。

・上級悪魔は、「悪魔の駒」というものをチェスになぞらえて1セット持っており、ソレを消費することで、異種族を、死者さえも眷属悪魔として転生させることができる。

・そして黒瀬先生は上級悪魔（しかも公爵！）であり、墮天使に襲われていた僕たちを偶然発見し、すでに死亡していた姉さんを「悪魔の駒」で悪魔として復活させた。

「大体こんなところなんだけど、信じられる？」

「ええ、まあ」

隣にいる姉さんを見る。悪魔として転生、のくだりから若干表情が硬い。

「こうして奇跡を目の当たりにすれば、信じざるを得ませんね」

僕がこの話をあっさり信じたのは、ソレだけが理由ではない。

思...
思い出したのだ。

『ハイスクールD×D』というライトノベル作品を。

そう、この世界は『魔女カリ』の世界ではなかった。

……良かつたあ〜〜。

そうかー、ここはあの殺伐鬱々エログロで絶望しかない黒水瀬ワールドじゃなかったんだあ〜。

まあ、『ハイスクールD×D』にもバトルや人死にはあるのだけれど、ノリが熱血でバカだからな。

少なくとも、未来に希望は持てる。

いやあ、ここが『魔女カリ』に似ているだけの平行世界なのでは？って考えたことは当然あったのだけど、わざわざ僕の知っている作品の要素を含んだ世界に転生させておいて、原作知識が無駄になるようなことをするだろうか？いや、しない、と判断したのだ。

まさか複数の作品をかけあわせるとは思わなかった。

僕には発想力というものが欠けているのかもしれない。

「そう。じゃ、これからの話をしようか」

「と、いいいますと？」

「これから君がどう生きていくのか、という話。お姉さんには、私の眷属として生きてもらうけど、君はどうするの？君も悪魔になっってみる？それとも元の日常に戻る？」

「悪魔になります」

と即答するも、

「駄目なのだわ！よく考えなければ！」

と姉さんが嘔み付く。

「考えたさ。その上での選択だよ」

「もう人間には戻れないのよ？イオがそんなことをする必要は絶無なのだわ！！」

「必要なことだよ。まだ僕もあの墮天使に狙われてるだろうから」

「そんな問題ない！イオは拙者様が守るのだから！！」

「それじゃ駄目なんだよ！！！！」

姉さんの言葉があの時のことを想起させ、僕はつい怒鳴ってしまう。

ぼんぽん、と

熱くなりかけた僕たちを、黒瀬先生が手を撃って制止する。

「とりあえず今日は家に帰って休みなさいな。返事は今すぐじゃなくていいから」

で、帰り道。重い空気を背負って僕たちは歩く。

無言が続く。

「姉さん」

「っ！…何かしら？」

見え透いて挙動不審になる姉さん。あれからずっと、どこか不安そうだ。

理由は、推測可能だけど。

「あのね、何があっても僕たちは姉弟だし、姉さんの本質が変わらない限り、僕が姉さんを嫌いになるなんて、有り得ないよ」

「あ……………」

こんな分かりきったことにも、姉さんは怯えていたのだろう。

驚いたような目で僕を見て、あわてて顔をそらす。

今、姉さんはどんな顔をしているのか。

「……………ズルいのだわ、イオは」

「ずっと姉さんを見てきたからね。考えていることくらいお見通しだよ」

空気もいくらか弛緩した。だから、言つべきことを言つておく。

「ごめん。僕のせいでこんなことになって。謝って済む事じゃないけど、ごめんなさい。なにより、助けてくれてありがとう」

すると、姉さんは顔をそらしたまま、

「いいのだわ。拙者様はちつとも後悔していないし、むしろ正義の味方として当然のことをしたと思つてる」

そして、

「だから、拙者様が悪魔になったことに責任を感じてイオもなろうと考えているのだつたら、それは間違いよ？イオはイオの好きに生きていいのだもの」

そう言つて、

僕にとても優しげに微笑みかけた。

駄目だ。それじゃ駄目だ。僕は言わなければならない。だけどその言葉は、

「また逢つたね。蘭乱爛崎くん」

最も聞きたくない声に遮られた。

「ピスキス……!!」

「そう、蘭乱爛崎くんの可愛い可愛いカノジョさんのピスキスですよー！」

とはしゃいだ素振り。不覚にも少し可愛いと思ってしまった。でも僕は自分のこと可愛いとか言っちゃう女性は苦手なんだ。

「劣悪がつ!!よくも拙者様の前に顔を出せたのだわ!そしてイオとの交際は認めない!!!」

当然敵意をむき出しにする姉さん。ていうか、ツッコむところそこなの!?

「大事なのは本人の意思ですよ、お義姉さん」

「悪いが、僕からも君みたいな嫁はお断りだ!」

目の前の墮天使に対抗するため、初めて『神器』を発動させる。

予想通り姉さんは、身長168cmの長身が140cmくらいに縮んだ。

一方僕はというと、右手の肘から先が金属質な装甲に覆われた。爬虫類の頭部を象った形状で、直線が一切使われていないことから

も生物的な印象が窺える。

「冷たいなあ。僕も好きだーって言うてくれたのは嘘だったの？
まあ、それはそれとして」

ピスキスの目が値踏みするものへと変わる。

「蘭乱爛崎くんの方は、『息吹』系……色合いから『竜の火』かな？白黒だね。お義姉さんの方は……うん、見たことないや。銀灰か、もしかすると金かも！あーっ、もったくないことしたーっ！」

などと独り言を呟く。

そして、今にも飛び掛っていきそうな姉さんを、

「周りを見てみて」

と牽制する。

いつの間にか、僕たちは囲まれていた。黒い翼を生やし、光の槍を携えた男女数十人に。

「使うの、初めてなんでしょ？どんな力でも流石にこの状況ではどうしようもないと思うよ？」

言うとおりに、僕たちはまだ『神器』の能力さえ把握していない。増してこの数に囲まれては………詰みだ。

だが、ピスキスは意外なことを言う。

「蘭乱爛崎くん。貴方さえ来てくれれば、お義姉さんは見逃すよ？」

「何故……？」

思い出すのは、先ほどの言葉。確かに聞いた。もつたいないことをした、と。

「彼女はもうクローセルの眷属悪魔だから。配下を拉致した、なんてことになったら、あのクローセル軍団と戦争する羽目になっちゃうじゃない。だからまだ誰のものでもない貴方だけで今回は手打ち。」

「イオっ！！駄目よ！？お姉ちゃんのことはいいいから！！」

やはり、止めようとする姉さん。でも、

「このままじゃ、どの道僕は逃げられない。だから、言つとおりにするしかない」

そう言つて、泣き出しそうになっている姉さんを尻目に、

「じゃあね」

結局、言いかけた言葉を言えないまま

僕は敵の手に落ちてしまった。

ようこそ、裏の世界へ（後書き）

はい、というわけで、新キャラは

「足洗邸の住人たち。」からクロールセル

「クロノクルセイド」からフィオレでした。

分かったかな？っていうか知ってる人いるかな？

黒瀬先生はキャラの再現が難しいです。

原作でも良く分からんキャラなうえに

最近一人暮らしはじめまして、原作を実家に置いて来ちゃってるんですよ。

このキャラに限らず、版權キャラは半オリキャラ化すると思うので、どうかご容赦を。

あと、コモンだののくだりはMTGネタです。

この解説も知ってる人にしか伝わらないよな……

正義の味方の到着（前書き）

ああ、どんどんオリキャラ化してゆく

今回やや短いです。

正義の味方の到着

「それで、どうして欲しいの？」

駒王学園高等部第二カウンセリング室にて、

「イオを助けるために力を貸してほしいのだわ」

転生悪魔・蘭乱爛崎寝々と、その主人・クローセルが向かい合って座っている。

「その堕天使が言っていたとおり、ただの人間を助ける義理は無いわ。堕天使との戦争を招いてまで、ね」

「お願いします!!」

気位の高い彼女は、恥も外聞も無く、土下座の姿勢をとる。

「理に合わないことを言っていることは承知しているのだわ。それでも、それでもイオを助けてたい！」

「だから」

寝々の尋常ならざる気迫を感じて、悪魔クローセルは、

「面白いね」

と笑みを深くした。

すると、第二カウンセリング室の扉が開き、フロレットが入ってきた。

「クローセル様。調査の結果が出ました」

「いつもながら仕事が速いねー。で、どこ？」

「M市の西はずれにある廃教会です」

「……何の話をしているのですか？今はそれどころでは

自分の嘆願の最中に割り込まれた寝々は、当然不服の声を漏らす
が、

「弟君の居所だよ」

「……………は？」

意外な言葉に戸惑う。

「だからさー、イオ君が連れ去られたことは、君に言われるまでもなく知ってたの。んで、面白そうな彼をほっとくわけがない私は、こっそり調べてたわけ。OK？」

「ありがとうございます……！」

やっと思考が追いついた寝々。

「お礼を言われることじゃないけどにゃー？そっちのが面白いっ

「ただけだし。」

「それでも助かったのだわ。じゃー！」　ダツと。

「待てい」　グイツと。

「何を！？」

「そのまま行っても勝ち目無いでしょーが。『神器』だけでも使えるようにしてから行きなさい」

「でも、こうしてる間にもイオが……！！」

「ダイジョーブ。少なくともあと3日はイオ君がどうこうされる恐れは無いわ。何故なら」

イオ視点

あ、どうも。拉致られました、蘭乱爛崎イオです。

今、どこかの教会の地下室で、友達未満・恋人未満、つまりは仇敵の墮天使ピスキスと二人つきりでお話してます。全然ときめかね
！。

「で、僕をどうするのさ？洗脳？」

「やーねー、振られたとは言ってもいちゅーのトノガタにそんな酷いことするわけないじゃない。ただちよーっと無理やり『神器』を切り離してその結果死んでもらうだけだよ」

そっちのがひどいと思うな。

「それはどうして？」

「それはね？そっちのほうが出世できるからだよ！」

「……もうちょっと詳しくお願い」

「えっとねー、『神器』ってのは、普通、使用者の魔力が生命力

か分からない。

3日のうちになんとかしなければ……

再び、駒王学園高等部第二カウンセリング室にて。

現在、ここにはクローセルとフロレットしかいない。

「行っちゃったねー。フィーちゃん」

「ええ、行かれましたね」

「ドゥシヨット僧侶とナイト騎士はどうしてる？」

「別件で現在は香港とLAです。召集は不可能かと」

「じゃあ、しょうがないな」

「またですか。私に留守を押し付けて」

「さつすがフィーちゃん分かってるう！ーのーの、そもそも私の領地じゃないし。ネネちゃんもイオ君も心配だし？」

「面白そうだから、でしょう？はあ……気を付けるんですよ？」

「了解〜」

M市西はずれ、廃教会にて。

ピスキスの配下たち15名の下級墮天使が周辺の警護を任されていた。

一人の墮天使が、接近する不審な人物を発見した。

奇妙な格好をした女性だった。

長く艶やかな金髪をポニーテールにしている。

ミニスカートのように丈の短い赤いチャイナドレスに白いニーソックス。

足元には動きやすい編み上げサンダル。

手には指ぬきグローブをはめ、手首から二の腕までをリボン巻きつけて覆っている。

天使か、墮天使か、悪魔か、或いは人間なのかはわからない。

とにかく、自分たちにあだなす存在ならば排除するしかない。

「お前、何者だ！何をしにきた！！」

「拙者様は正義の味方！正義ネームは『ドウオーフ』！わが最愛の弟を救うため、神的姉弟愛と狂信的正義に基づいて、ここに劣悪を
正殺するッ！！！」

正義の味方の到着（後書き）

次回、拡張無双

闘いの中で（前書き）

今回もちよっと短い。

戦闘描写もつとなんとかならなかったものか………

闘いの中で

「……【拡張設定：外力の槌】……」

ぶつぶつと何事かを呟く侵入者に、光の槍を構える墮天使。

「……【イクエインジョン支配式設定：三要素独立】……」

パラメータフリー

身構える彼の下に、異常を察知した仲間が駆けつける。

「……【イクエインジョン体積：増移】……【密度：増移】」

なおも呟き続ける侵入者に、集まった3人の墮天使が攻撃に移ろうとしたその瞬間、

一筋の剣閃が彼らの胴を輪切りにした。

遅れて断末魔の悲鳴を上げる上半身。

そして、彼は見た。

侵入者の右手につい一瞬前まではどこにも無かつた大剣が握られているのを。

奇妙な形状をしたその大剣は、カッターナイフに似ていた。

『フォーゼンゲハンマードウオーフ
土精の槌』

それが蘭乱爛崎寝々に宿った『神器』の名称である。

その性質はいたってシンプル。

自分自身、あるいは自分が触れた無生物の、密度方程式の三要素をそれぞれ独立して変化させる。

例えば、質量をそのままに密度と体積を増大させる。

例えば、質量と体積と密度の全てを増大させる。

その名のとおり、武器を鍛えるドワーフの玄翁なのだ。

その能力は、二つに分けられる。

ひとつは、自身の肉体に作用する『内力の槌』。

例を挙げると、『神器』発動時に土精の如く寝々の肉体の体積が減少すること。

もうひとつは、自身以外の無生物に作用する『外力の槌』。

例を挙げると、先ほど大剣へと打ち鍛えられたカッターナイフ。

正直、派手で分かりやすい強さの『神器』ではない。

扱いやすさの点では、他の『神器』に大きく劣る。

だが、蘭乱爛崎 寝々はわずか3日の修行でこれを我が物とした。

警備をしていた墮天使が3人殺害されたことで、侵入者を打倒するため周囲の警備を任されたほぼ全ての墮天使が教会の敷地内に集まっていた。

寝々はそこへ突撃する。

まず、カッターナイフの拡張を初期化。

次に【内力の槌】で自身の質量を減移。

目にも留まらぬ速度で敵に接近。

間合いに入ったところで、自身の拡張を初期化。

相手は反応できない。

そして右手のカッターナイフの密度と体積を【外力の槌】で瞬時に増移させ、神速で斬りかかる！

さらに【外力の槌】で、大剣となったカッターナイフの質量を、敵に命中する寸前に増移。

こうして墮天使は、たかだか数百円の刃に両断される結果となった。

少し話は変わるが、蘭乱爛崎 寝々は正義の味方である。

幼少の頃より武術の英才教育を受けており、修めた武術は、素手のものに限定しても、

空手、柔道、合気道、形意拳、八極拳、少林拳、ボクシング、ムエタイ、システマ、ソバット、テコンドー、ブラジリアン柔術、波紋、骨子術、セクシーコマンドー等、多岐に渡り、

武器を使うものなら、剣術や槍術のようなメジャーなものから、サイヤンチャクのようなマイナーなもの、暗器の類、果ては対戦車ミサイルのような近代兵器までつかいこなす。

言ってみれば戦闘の天才である。

もとより人間離れしていた身体能力は、転生したことにより、悪魔離れした身体能力へと昇華された。

しかも割り振られた駒はパワーに秀でた戦車。

そんな者が武器を鍛える力にした。

これを知って悪魔クローセルは、面白いことになる、と確信した。

至極簡単な考えだ。

軽ければ速く動け、重ければ破壊力は増す。

ならば絶妙のタイミングで質量の増減を切り換えれば、速くて重い攻撃を繰り出せる。

つまりは、武器を軽いままに寝々のパワーで最速に振るい、当たる瞬間に質量を大幅に増移させる。

運動エネルギーは質量と速度の二乗に比例するため、爆発的な破壊を生む。

土精の槌と超人の武力により、カッターナイフは長大で強固で重厚で高速な、神性も魔性もまとめて屠れる一振りの剣となった。

ひゅっ、と

蘭乱爛崎 寝々が敵陣を駆ける。

手当たり次第に墮天使を切り刻みながら。

墮天使たちは彼女の速さについて行けず、その竜巻のような暴力に圧倒されるばかり。

複数の墮天使が空に舞い、包囲して光の槍を放つ。が、

「正義の味方には通じない!!」

次の瞬間、墮天使たちは自分の胸に巨大な釘が生えていることに気づく。

寝々は、自身の体積を減移させて槍袂をくぐり抜けていた。

更に、

「羽虫のように燃え尽きなさい!!」

空中にいる墮天使たちを、ライターの炎の体積と密度を増移させて焼き落とす。

一人の墮天使が、寝々の背後から殺気を絶って光の槍を投擲する。
仕留めた、と誰もが思った。しかし、

「まさに劣悪占有アタックだね。不意打ちなんて」
槍はほんの1mmも刺さらなかった。

肉体の密度を増移させて、防御性能を跳ね上げたのだ。

「ならばこちらは正義らしく、正面から叩き潰します」

【拡張設定：外力の槌】

錐が、彫刻刀が、果物ナイフが、金槌が、剃刀が、ピザカッター
が、スパナが、鉋が、

彼女の両手で、巨大化する。

正義の味方は、その八刀流で劣悪たちを蹂躪した。

本来、それは有り得ないことだった。

ほんの3日前に悪魔に転生したばかりの元人間が、ただ一人で数十の堕天使を圧倒するなど。

決して彼らが弱かったわけではない。

下級堕天使とはいえ、拠点の警備を任される戦闘要員だ。弱いはずがない。

だが蘭乱爛崎 寝々は、ずっと以前からこの戦いに備えていた。

自分より遙かに大きな力を持つ悪の手から、弟を救い出す。

まさにこの状況をこそ、彼女は想定していたのだった。

そんな一念無量の想いが結実し、この有り得ない逆転構造を成立させた。

そう、真実この瞬間に、彼女は己の目指した正義の味方に成った。

廃教会、地下室にて

「なによこれ」

「姉さんは自重という言葉を感じるべき」

監視カメラの映像を見た僕とピスキスは、そろって開いた口を塞げられないでいた。

闘いの中で（後書き）

やっと書きたかったものが書けた。

まだまだ不満が残るけど。

次も読んでくれるととても嬉しいです。

緊張感がナンボのもんじゃい！（前書き）

今回も短いです。

というか更新ペース落ちたな…

みんな今期アニメが豊作過ぎるのがいけない

緊張感がナンボのもんじゃい！

「うん。やっぱり『プレスオブファイア竜の火』か。」

姉さんの襲撃と時間は前後するが、僕とピスキスは地下室で僕の『神器』を確認していた。

因みに僕の手足には枷。ちくしょうめ！

「それってどんなの？」

気になって聞いてみる。

「手から火が出るの。メラって」

「なんか弱そうなおノマトペだな」

「実際強くはないよ？ゴクゴクありふれてるし」

「そんなの移植しても仕方ないのでは？」

「言ったでしょ？人間と墮天使とじゃ地力が違うの。それに『竜の火』だって、使いこなせれば結構いいものよ？」

「そうなんだ？」

「そうなの。名前のとおり、ドラゴンの火の息だもの。本来なら最高クラスの火力をもってる。まあ、ただの人間には耐えられない出力だけだ」

「ほほう、どんな道具も使い手しだいというところですか」

「ですかですか」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「なんかしゃべれ!!」 げしっ

「いたい！唐突に何をする!？」

墮天使の腕力で殴りやがった。

「何をする、じゃないし！わかってるの!?!明日の夜には蘭乱爛
崎くん、世界にサヨナラなんだよ？
もっとお話しよーよー!!」

という誘拐犯のことばに、

「……何を考えてる？」

当然ながら疑問を投げかける僕。

「なんにも？」

それでいいのか？

「だったら、どうして僕と話なんかしたがる？昨日からの態度だつてそうだ。僕は明日殺す人間なんだろう？」

すると彼女は、はあー、と盛大にため息をついて、

「蘭乱爛崎くんってさー、いやもう遠慮なくイオくんって呼んじやうけどさー」

別にいいけど。

「イオくん、にぶチンでしょ？つーか遅漏でしょ？」

はあ？

「君は突然何を言っているのかな？」

「言葉にしてもわからないとか鈍感ってレベルじゃねーぞーハー

レムラノベの主人公かアンタは！！」

前触れ無くキレだした。

いや、主人公はイツセーだろ。

「はあああー………だからさー

好きだからだよ。イオくんのこと」

そしていつに無くしおらしげなピスキス。っていうか、

「え！？あれ、本気だったの？」

「もー、ちょお本気だったよ！！だからなるべく死なせないようにしたし、こうして未成年者の略取および誘拐してるのだって、半分くらいストックホルム症候群狙ってのことだしね！！」

この女正気か？あと墮天使のわりに日本の法律にくわしいな。

「えーと、好きなのに殺すの？」

「駄目もとで説得を試みる。が、

「それはあれだよ。愛する人を永遠に独り占めしたいっていう、乙女的な思考？ほら、実際『神器』たましいは私の中で生き続けるわけだし」
やはり駄目か。ヤンデレはノーセンキューだよ。

と、ピスキスはなにやら豆電球が点灯したって感じの表情を浮かべたかと思うと、

僕ににじり寄ってきた。じりじり。

「……………何だよ？」ザッザッザッ

自然と後ずさる僕。そんな僕に、彼女はなんでもない風に

「いえね？どうせなら心だけじゃなく体も……………と思ひまして」

この女正気じゃなかった！予想はしてたが！

「ま、待て！冷静Be coolになるんだ！！」

「拉致監禁した美少年を手籠めにするとか、燃えるシチュ

しかし、こんな言葉では暴走する青春は止められないのであった。

そう言って更に距離が縮み……………縮み……………じりじり

オレのそばに近寄るなああ————ツッ……！！

右手『神器』に意識を集中。

一秒未来の破壊を幻視。

そして超常現象を励起する。

右手の爬虫類の顎から猛火が噴出す。

「「おおー！出た出た！」」

昨日に引き続き、僕の『神器』の力を確認した。本当に火が出て、僕は少し興奮してしまう。

しかし、ピスキスも驚いているのはおかしくないか？

始めて見るわけでもあるまいに。僕に合わせたのか？

綺麗にハモったことに、皮肉にも相性の良さを感じざるを得ない。

などと思案に耽っていると、彼女はなんだか物憂げな表情で、

「ついに今夜だね……」

とつぶやく。

何のことを言っているか、は考えるまでも無いな。

「嫌ならやめてくれ。是非やめてくれ」

と提案してみる。

「そういうわけにもいかないよ。部下たちをつき合わせちゃってるし。それに、イオくんをわたしのものにするって言ったのも割と本気だし」

「ただ、名残惜しいだけなんだよ。こうしてお話するのもこれつきりになると思うとね」

「本当は、イオくんが自分の意思でわたしについてくれれば良いんだけど、イオくん、わたしのことすぎじゃないんでしょう?」

僕は無言で肯定した。

「だったら駄目だよ。殺しちゃう。好きな人が自分のものにならないなら死んでくれたほうがマシ。わたし、ヤンデレさんですから」

そう言っ て彼女は微笑む。

いつも冗談めかした態度なのに、このときだけは、本当に悲しそうに……

少なくとも僕には、そう見えた。

「まあ、最後に思い出も作れたから、満足かな。ふふっ、昨晩はお楽しみでしたね!」

シリアスな雰囲気を一気に台無しにしてくれるな、この女。

誤解の無いように言っておくが、やましいことは一切無かった。貞操だけは死守したのだ。偉いぞ僕。

と、そこへ、

『侵入者です!!!』

飛び込んでくる声。

「なによもう……」

露骨に不機嫌な応対をするピスキス。

『モニターに表示します！』

墮天使がハイテクな機材を使っていることに少なからず幻滅した僕もその映像を見る。

「なによね」

「姉さんは自重という言葉を感じるべき」

僕とピスキスは揃って開いた口を不塞げないでいた。

来るだろうとは思ってたけど、無謀すぎるだろう……いや、無双すぎるだろうというべきか。

僕の考えが無駄になってしまいそうな活躍振りではないか。

ひょっとして原作の彼女より強い？

などと考えていると、

「……ただの人間のためにクローセルが墮天使と戦争？義姉さんの独断専行とみるべき？それとも……こちらに後ろ盾が無いことに気づいた？だとしても……もう、最悪……こうなったら」

ピスキスはえらくお悩みのようだ。

頭を抱えたいのは僕もだが。

「決めた。今すぐ『儀式』を開始。それ以外の人員は侵入者の撃退に当たりなさい。最悪の場合、わたしも出撃するわ」

『了解』

対策をまとめたようだ。

「どつするつもり？」

「とりあえず煩い小姑を排除するわ。多分だけとお義姉さんの暴走だろうし、クローセルは何も言わない…と思う。無理だったら、イオくんの『神器』だけでも持って逃げる。仲間に保護してもらえれば、おいそれと手を出せないはず」

なるほど、つまり制限時間内に姉さんがここにたどり着けなければ、どの道ぼくは試合終了というわけだ。

「その『儀式』ってどれくらいかかるか、聞いても良かったり？」

「まあ、準備は万端だから……1時間弱？」

うん、改造してあるとは言っても元がただの教会だから、time upでgame overということは無さそうだ。

たった今、姉さんが屋外の墮天使たちを殲滅して内部に押し入ったし。

「渡さない……絶対に……。イオくんはわたしのモノ……」

なんか燃え上がってる墮天使の人をよそに僕は

(もし生きて帰れたら、今度こそ姉さんにあのことを言わなくっちゃな……)

なんて考えて、その直後、あまりに分かりやすい死亡フラグに酷く後悔した。

緊張感がナンボのもんじゃい！（後書き）

話し進んでねえ……

主人公がピーチ姫になってる…

力への意志（前書き）

またみじけえw

今回、もつちよっとどろにかならなかったものか…

力への意志

蘭乱爛崎 寝々は思う。

廃教会の中を駆けながら、墮天使たちをなぎ払いながら。

今の自分のあり方を。それに至る過程と、その平凡なくだらなさ
を。

拙者様は正義の味方、劣悪を正殺する者

実に、馬鹿馬鹿しい。

結局、私が拙者様になったのは、イオを独占したかったからだ。

まだ幼かった当時から、イオは優しい子供だったし、かわいらしい顔をしていた。

もっとも、顔は私とよく似ているから、これはナルシシズムに分

類されてしまうのかもしれないが。

そんなイオを、体が弱いことに付け込んで、私は自分に依存させようとしたのだ。

本当にくだらない。

『正義の味方』などと口にしてはいたが、私はただ、イオの気を引きたかっただけ。

確かに私はそのために本気で体を鍛え、武術を修めた。

だけど、イオを守るためというのは方便で、単にそれ以外ではイオに勝てるものが無く、イオの尊敬を勝ち得るためには武術しかないと思っただけのこと。

イオが私から離れていってしまうことが怖かった。ただそれだけ。

私は強くてイオを守って戦う存在で無ければならなかった。

今ならば分かる。

本当に戦うということとは、お父様のように働いてお金を稼ぐことだ。

本当に守るといふことは、お母様のように家庭の和を保つことだ。

本当に強いということは、イオのように己の弱さを見つめて、その上で自分にできることを精一杯できることだ。

いや、こんなこと、本当はずっと前から分かっていた。

分かっている、分からない振りをしていただけで。

私には、平凡な人間としての才能がない。

平凡な人間では、イオに頼ってもらえない。

だから、武術なんて本当は何の役にも立たない得意分野に逃げ込んで、特別である振りをしていた。

平凡に耐えられなかった私は、結局、どこにでもいる平凡な子供に過ぎなかった。

イオを守ると口にしておきながら、私は何から守るつもりだったのだろうか？

そうだ、私がイオを守っていた瞬間なんて、存在しない。

むしろ、守られていたのは、私。

イオは、イオが離れるという恐怖から、いつだって私の心を守ってくれていた。

イオは、私の弱い心が招く破滅から、いつだって私の未来を守ってくれていた。

私がイオに向ける感情が、依存から恋慕に変わったのは、それに気づいた瞬間ではなかったか。

うふふ、そういう意味では、私を弟離れさせよとするイオの努力は、完全に裏目に出てるのね。

イオが私のために身をすり減らしているのを知りながら、それでも私は自分と向き合おうとしなかった。

いや、それどころか、イオが私のために自分を犠牲にしていることが、嬉しかった。

全く本当にどうしようもない、劣悪だ。

だけど、それでも、今回イオが目の前で連れ去られ、分かったことがあった。それは

私は、イオを守りたいと思っている。

とつぶやいた。

私の心は自己中心的に腐りきっているけれど、

この想いだけは、真実だ。

決して、お為ごかしの嘘じゃない。

私はとても弱くて、今まで間違い続けてきたけれど、

その弱さを、間違いを、心の底から認めて噛み締めた、その上で
なら、

自身の考えを、意志と呼ぶことができる。

自身の姿勢を、自律と呼ぶことができる。

私は、私を、私だけの矜持で以って、『正義の味方』と定義する。ソレがどんなに歪な在り方だとしても、どんなに穢れた思想だとしても、

それこそが私という存在なのだから。

逃避と失敗の過程で手に入れた、私のたった一つのスタイルなのだから。

それに、何の因果か、私の武術が必要なときが来たらしい。

嘘が真になって、私の逃避が肯定されてしまった。

神だか世界だかは、私の道化振りが気に入ったようだ。

ならば私は今度こそ、『正義の味方』になってやる。

だから

「退きなさい劣悪ッ！！」

私は、おそらくイオが監禁されているだろう地下に続く階段を守っている墮天使たちを駆逐するべく、

ポシエットに手を突っ込んで、縮小された武器をつかむ。

「【拡張設定：

外力の槌】！！！！！！」

取り出されたのは

ネイルガン
釘打ち機！

「　　ブツ散れ　　」

吐き出された側から小さな釘は大きな杭となって墮天使たちの身体を砕く。

墮天使たちがひとしきり過去形に加工されると、

周囲が光に包まれた。

仰々しくて複雑な所謂魔方陣の中心で、僕は磔にされていた。

その周囲では、ピスキスが中心になって墮天使たちが儀式を行っている。

具体的には、何語かは分からないがしきりに呪文を唱えたり、剣だの杖だのを振り回したり、杯みたいなものや円盤をかざしたりしている。

正直、退屈だ。

儀式を始めてからもう30分経過しているが、目立った変化はないし、

僕の考えのほうも、姉さんがこの部屋に乗り込んでくるまではすることがない。

つまんねー！

「侵入者、地下への階段に接近中！ここに到着するのも時間の問

題です！！」

と、こっちに移した管制部が報告。ついに来たか。

「階段の警備が破られ次第、地上部分を爆破しなさい」

「了解！」

おお！？姉さんピンチ？

というか思い切ったな、ピスキス。まだ生存している部下もいるだろうに。

120

どごおん、ぐらぐら。

その数秒後、激しい爆裂音と共に地下室が大きく揺れた。

それでも慌てず儀式を続ける墮天使たちの姿にプロ意識を見た。

「やったかな？」

あ、それフラグ…

「イオッツ!!」

予想通りというか、地下室のドアを蹴破って、僕の『正義の味方』
がやってきた。

カへの意志（後書き）

つぎでやっと主人公が活躍します。

ほどほどに期待してね！

あと、地味にトライガンネタ使っちゃった。
クリームゾンネイルはカッコいいオカマ。

発動編（前書き）

一週間も空いてしまった。

一気に書きたかったって言うのもありますが。

例によって短いです。

発動編

3日ぶりの再開を果たす僕と姉さん。

僕らはお互いに、相手に言わなければいけないことがあった。だから

「イオ、貞操は無事かしら!？」

「なんて格好してるのさ姉さん!？」

同時に叫ぶ羽目になったのであった。

「……………」

ああっ!?! 墮天使の皆さんが絶句してる!?! シリアスな場面なのに!

ここは手早く済ませるか……

「……姉さん、そのミニミニなチャイナドレスは何? スリット深すぎでしょ。パンツの紐見えてるよ!」

努めて冷静に、まずは僕の話の切り出す。

「これは正義の味方のユニフォームなのだわ」

「正義！？どのへんが？むしろ著しく風紀乱してるでしょ！」

「女性ヒーローの衣装がほんの少し扇情的なのは決まりごとなの。そんなことよりイオ？お姉ちゃんの質問に答えなさい。お姉ちゃんに言えないような事はあつたの？なかつたの？」

言えないような事なら答えられないだろう。

「そりゃ当然「有りましたよ？」ってちよつと！」

普通に否定しようとする僕の言葉に、会話においてかれていたピスキスが被せて言う。

「昨日の夜、イオくんの初めてをもらっちゃいました」

まあ、確かに初めて翼の手入れをさせられたな。昨晚性欲をこじらせたピスキスをなだめるために譲歩案として行ったのだが、その言い方だと誤解を招くよね？

「劣悪許すマジ！！簡単に正殺するとは思わないことだわ！！」

ほらあ…やっぱり誤解してるし…

「拙者様とイオの仲を引き裂こうとする劣悪至極の罪業には、完全懲悪の正殺でもって応報する！！！！よってここに槌を振る！鉄を

鍊する槌を振る！そして悪を滅ぼす武器を鍛つ！さあ、工房に火を入れましょう、仕事始めの合言葉は
【拡張設定：
外力の槌】！！！！」

テーブルナイフを拡大して高速で斬りかかる。

「だったらわたしはわたしの勝利で、愛の力を証明して見せますよ、お義姉さん！！」

それに対してピスキスは、光を剣の形にしてテーブルナイフの大剣を受ける。

「貴女にお義姉さんと呼ばれる筋合いは無いのかわ！！」

時に蹴りや突きを交えて暴風のような殺陣を演じる二人。

人外じみた戦闘もズレた会話のせいで台無しだ。

その間も儀式の手を休めない堕天使さん達には、マジでリスペクト。

さて、一見互角に渡り合っているように見える姉さんとピスキスだが、このままでは明らかに姉さんが不利だ。

理由は明白、姉さんはこれまでの戦いで負傷し、消耗している。負傷は、姉さんのような近接格闘を主な戦術とする者には、致命傷でなくとも致命的な障害を生じる。事実、姉さんはその得意なはずのレンジでピスキスに互角に渡り合われてしまっている。動きが鈍っているのだ。

それだけでなく、魔力も尽きかけていると判断したほうが良いだろう。恒常的に『内力の槌』で自身の密度を増移させているにもかかわらず、姉さんの全身は傷だらけだ。

対するに、ピスキスは万全な状態であり、墮天使の光は悪魔にとって最悪の武器となる。その上姉さんが今まで戦ってきた相手とは格が違う。なにか隠し玉があるかもしれない。

となれば、僕が何とかしなければいけないか。

そして僕は自分の心の深い部分にもぐっていった。

ギーン！

刃と刃が打ち合わされる。

もうこれで何合目の打ち合いなのか、二人のどちらも知らない。かれこれ数分間はこうしている。

一方的に攻めているのは寝々で、ピスキスは光の剣で寝々の斬撃をしのいでいるだけだ。

しかし、寝々の顔には焦りの色が濃い。一方のピスキスは、息をこそ乱しているものの、まだまだ余裕のある表情をしている。

これだけ攻めておきながら、寝々は決定打を出せていないのだ。その手に握る大剣も、ピスキスの光の剣と打ち合うたびに刃が欠けていく。

「どうしたんですかお義姉さん？顔色が悪いですが？」

「貴女に心配されるほど拙者様も落ちてはいないのだわ。自分の心配をしたほうがよろしくてよ？これから拙者様に正殺されるのだから」

「口が減りませんね。勝てないのが分かっているくせに」

「正義の味方はどんな絶望にも決して諦めないものよ。イオを貴女のような劣悪極まる淫売に渡すなんて、許せるものですか」

「どうあってもわたし達のことを認めないというのなら、馬に代わって蹴り殺させてもらいますよ？」

「やれるものなら………やってみるのだわ！……！」

ビュン、と再度飛び掛る寝々。

その斬撃は、またしても光の剣に阻まれる。

寝々は太刀から手を離し、ピスキスの首筋目掛けて手刀を繰り出す。それを上体を傾けてかわしたピスキスは、その姿勢のまま寝々に蹴りを繰り出す。

寝々は左腕を盾にして防ぐも、後方へ飛ばされてしまう。

そして寝々は驚くべきものを目にする。

ピスキスの周りに光の槍が6本、浮いているのだ！

下級墮天使には出来ないこの技で、ピスキスは決着をつけようとしていた。

「イオくんのこととはわたしに任せてください、お義姉さん」

弾丸のように迫る6本の槍を、寝々は、最後の力を振り絞って密度と体積を増移させたテーブルナイフで受け止めた！

「く、うっ……」

しかし、ビシリと無情な音が鳴り響き、

光の槍は大剣を砕き、寝々へと殺到する。串刺しの寝々という未来を両者ともに確信した。

しかしその未来は、

ゴウ、という音とともに燃え尽きた。

呆気に取られる二人の間には、6本の光の槍を焼き尽くした紅い炎。とても鮮烈でどこか不吉な、ストロンチウムの炎色反応のような、
紅色。

その炎をたどっていくと、枷も、十字架も、儀式を執り行っていた
墮天使たちも焼き尽くした、
蘭乱爛崎 伊緒へと繋がっていた。

発動編（後書き）

後半に続く。

凍える影が夢見るもの（前書き）

後半です。

のサブタイは「百鬼夜行抄」という漫画（名作）から拝借。

凍える影が夢見るもの

「そう…そういうこと」

鮮やかな紅蓮の炎に照らされて、呟く。

「下位の『神器』の形態をとって潜伏する……ないことじゃないけど、相当に強力なものにしか起こらない現象のはず」

「なら、その正体は何？わたしはそんなの見たことがないけど？」

そう言つて墮天使ピスキスは僕の変わり果てた右腕を見る。

僕の右腕は、より厳めしく獰悪なかたちが変わっていた。色も明るい赤だったのが、今では表現が難しい色へと変わっている。部分ごとに色が変遷していき、水面に浮かんだ油膜のような毒々しい色をしていて、直視し続けると目が悪くなりそうだ。

「『プライマル・マリクス蛇王の復活』というらしい。本人に聞いたんだけど」

その炎は、“全てを燃やす”。光も水も土も炎も魔力も。それゆえ際限なく延焼し続ける。

そして、使用者はその炎を身体の一部のように操ることが出来る。その力を利用して、この地下室は紅の炎に包まれている。儀式を行っていた墮天使たちは、みな燃え尽きて消え失せた。

と、そこに

「イ…オ……？」

僕を呼ぶ、苦しげな声が聞こえた。

「ごめんなさい、姉さん。目覚めさせるのに時間がかかってしまっ
て」

「ここまでありがとう。でも、ここからは僕がやるから安心して」
まだ何か言いたげな姉さんを無視して、ピスキスのほうを向く。

「イオくん、わたしのこと騙してたんだー。彼女なのに」

「だから彼女違う。それに僕だって、詳しく能力を知ったのはたっ
た今だよ」

昨日の時点では、“まだ何か隠れている気がする”という程度だ
ったし。

僕を過小評価させる、くらいの考えしかなかった。

「それで」

彼女は言う。

「…どうするの？」

「わたしと戦うの？それともわたしと来てくれる？それだけ希少な

『神器』なら洗脳も摘出もしなくてすむよ。イオくんの意志で仲間になってくれれば」

「だが断る」

「まあ、そうだよな。わたしのこと嫌いだもんね」

「勘違いするな。僕が君と戦う いや、君を殺すのは、君が嫌いだからでも僕を拉致したからでもなく、」

「君が姉さんを殺したからだ」

「『勘違いするな』頂きましたー！でも全然ツンデレじゃねー、むしろデレツンー！」

楽しそうにはしゃぐピスキス。釣られて僕も薄っすらと微笑んでしまふ。

これから殺し合いをするという雰囲気ではなかった。でも

無言で光の槍を作り出し、ありったけの力をこめる彼女。

無言で地下室中に延焼した炎を引き寄せる僕。

弛緩した空気はそのままに、殺意をより具体的にする作業を続ける僕たち。

見る人によっては異常な光景だろう。

だけど、このブレなさが、僕と彼女らしいのだ。

目と目が合う。

互いに準備は完了したらしい。
一体何を通じ合っているんだか。

彼女は、特大の光を僕に向かって投擲する。
僕は、全力の炎を彼女に向かって展開する。

勝負はこの一撃で決まる。

僕の全てを燃やす炎を消すには、僕自身が消すか、僕の意識から炎が消えるか　手っ取り早く言えば、僕を殺すか　しかない。つまり、一度体に火がつけば僕を殺さないと助からない。そしてこの狭い地下室は僕の炎で満ちている。逃れる場所もないほどに。だからピスキスは賭けるしかない。光さえも取り込んで燃やしてしまう炎の壁を、彼女の最高の一撃が突破して僕を絶命させることに。

音を超えた速度で、光の槍が飛来する。それを炎の壁で受ける。込められた魔力も光も運動エネルギーも、燃烧されていく。それでも、彼女の渾身の光は止まらない。

「……くそっ」

遠からず炎の壁を貫き、僕の心臓を抉るだろう槍を前に、たまらず悪態をつく。

諦めてしまえ、と僕の弱い心がささやく。
しかし、

「イオ………!」

息も絶え絶えな家族の声。

「イオ、死んではいや！イオに死なれたら、“私” どうしていいかわからない！！」

その声が僕に新たな命を吹き込む。

そうだ、ここで僕が倒れば姉さんはどうなる？

誰も助けてはくれない。

誓ったのだ、僕は。

だから僕は、ここで勝つ！！

「がアアアアアアアアアアアアアアアアアアあああああああああああ
あ！！！！」

今までを遥かに超えた力を『神器』に注ぎ込む。

瞬間、肘までだった右腕の装甲が肩まで這い上がり、炎が爆発した。

「やられちゃったか」

さして悔しそうでも無く、ピスキスが呟く。

その羽と手足は、紅い炎に包まれている。もう身動きできまい。じきに全身が燃え尽きるだろう。

一方僕は、消耗しているものそれなりに息災だった。

「あーあ、結局わたしの愛はシスコンパワーに負けたのか……がっかりだよお」

「家族愛と言え。……最後にいくつか聞きたいことがあるんだけど、いい？」

「モロチン」

ささ、スルースルー。

「結局君、どこまで本気だったの？」

懐かしむような、自嘲するような、そんな顔で彼女は答えた。

「最初から全部ってのはうそ。初めはただの獲物としか見てなかった。」

「だけど、いつの間にかイオくんとお話するのが楽しくなって、殺しちゃうのがもったいなくなってる……」

「気づいたら、墮天使としての使命より大事なものになってた」

「だから、この感情は本物。間違いなく間違いじゃない。」

「私は本気」

その言葉には、何らかの決意のような、彼女にしては珍しく真摯なものが盛り込まれていて、だから僕も、本心で向き合わなくてはなるまい。

「僕は、君のことそこまで好きじゃない」

「だけど、好きになりそうだった。危うく」

「違う出会い方をすれば、もっと建設的な、それこそ恋人関係とか、築けたかもしれない」

「でもこの僕は、単なる敵として君を殺した」

「悪いけど、君と共に歩めない」

それは、紛う事なき僕の本心。彼女への明確な拒絶。

「そこは嘘でもすきって言ってよ……」

苦笑する彼女。でもきつと僕たちはこれでいいのだ。

「じゃあ最後の質問」

「おし!どんと来い!!!」

「さっきの槍、本当の本当に全力だった？」

「手加減したって?どうしてそう思うの?」

「いや、ただの勘」

僕の答えにやや呆れたように、

「……本気だったよ。これは本当。でも」

「イオくんは、自分が殺した相手のこととか一生忘れないだろうな
って思ったのも本当」

そう言って、悪ガキのような笑みを浮かべた。

「あっそう」

「うん、そう」

これで僕たちの問答もお終いだ。

真正正銘、関係が終わった僕たちは、曖昧に微笑んで

「「ばいばい」」

と、場違いに気軽な別れの儀式を済ませた。

「姉さん、無事？」

「ええ、助かったのだわ」

ピスキスが完全に消えてなくなるのを見届けてから、僕たちは互いの無事を確認しあった。
どちらも命に別状は無いようだ。

「姉さん、僕、姉さんに謝らなきゃいけない」

「何のことかしら？」

「僕は、彼女のこと好きだったわけじゃない。だから、あの夜のことは全部演技で……」

「いいのかわ、そんなこと」

「でも……」

「拙者様を弟離れさせようと考えたのでしょうか？むしろ悪いのは拙者様のほうだわ」

「……………」

「それより、今回はイオに逆に助けられてしまったわ。拙者様が守らなければいけないというのに」

あの時いえなかった言葉を、今ここで言うしかない。
そう思った。

「姉さん、聞いて」

「何かしら」

「姉さんは、小さいとき体が弱かった僕を守るって決めただよね？」

「そうだけど？」

「実はそのとき、僕も決めただ。僕のことを精一杯守ろうとしてくれる、この子を守るうって」

「イオ、あのね、お姉ちゃんがイオを守ろうとしたのは、結局……」

「いいんだよ、そんなことは。どちらにしても、姉さんが僕の姉さんであることに違いはない」

「……………」

「姉さんは強くて、僕を守ってくれる。でも、それじゃ駄目なんだ。僕は姉さんが死ぬのも傷つくのも耐えられない。だから、姉さんは僕が守る」

そこまで言って、

「だから僕を悪魔にしてください。黒瀬先生」

と、背後に語りかけた。すると

「うっそー、何で分かったの？」

と水を撒き散らして姿を現す黒瀬先生。どうやら水を纏って光を屈折させて迷彩としていたらしい。姉さんも驚きの表情を隠せない。

「いや、テキトーに言ってみただけなんですけど……」

まさか本当にいるとは。

「あちゃーカマかけだったか。まあ、どのみち出て行くつもりだったけど」

「そんで？悪魔にして欲しいんだって？」

本当にいいのか、と姉さんの目が問いかけてくる。僕はそれに、覚悟してます、と短く返し

「はい。僕を貴女の眷属悪魔にしてください」

そういうわけで、僕は人間をやめた。

凍える影が夢見るもの（後書き）

書いてるうちにピスキスが好きになってて殺すのが辛かった。
まあ、殺すけど。

文章力が欲しい。切実に。

くちづけでは長く、愛には短すぎて（前書き）

今回は後日談。

原作キャラがちよびっと登場。

くちづけでは長く、愛には短すぎて

あの事件が無事解決し、僕の悪魔転生もつつがなく終わった（因みに兵士2個。ビミョー）次の日曜日、僕と姉さんは駒王学園まで来ていた。

どうやら黒瀬先生がここで教鞭をとっている関係で、僕たちはここに編入することになったらしい。

その下見というわけだ。

しかし、いま1月半ばで、姉さんは3年生だぞ……もう少し待てよ。

勿論、編入に当たっては家族の理解が不可欠。よって僕たちは、この際全部話してしまおうという結論に至った。

以下、家族それぞれのリアクション。

父「こうしてこの目で見た以上、認めなければならんか……………」
遠い目をしていた。まあ、一般的な反応。ちなみに、羽根を生やして火を出して見せた。

母「へえ、すごいじゃない」

何故だか全く驚いた様子なし。それでいいのか。

兄「辛いこともあるだろうが、二人で頑張れよ？俺はいつでもお前たちの味方だ」

あっさりと受け入れた上で前向きに優しい。この人は聖人。

家族が受け入れてくれたことは嬉しいものだ。

それだけで未来に明るい展望をもてるくらいに。

問題があるとすれば、今の学校の友人とは離れてしまうことくらいか。

姉さんは多くの人に慕われていたから。言動は奇妙だけど、能力や人格は大変優れていたこともあってか、男女問わず信奉者がいたのだ。

僕？僕はまあ、普通だろう。よく一緒にいた色情狂のバカ二人に關しては全く別れを惜しむ気にはならないが、クラスメイトには僕に良くしてくれていた人たちも少なからず存在していた。クソビッチさんことクラス委員の逸賀谷さんとか。何らかの形で恩に報いるべきだと思う。

まあ、それはそれとして、僕と姉さんは駒王学園の校門前にいるわけだが、

「随分人が多いのだわ……」

「日曜日だつてのにねえ……」

ここの生徒はクラブ活動に凄く熱心なのか、或いは休日に学校以外いくところがないほど暇なのか。

こうまで人が多いと僕と姉さんが悪目立ちしてしまいそうだ。当然ながら、まだここの制服もジャージも持ってないし。

「とにかく中を探查してみるのだわ。何も後ろめたいところなどないのだから堂々としていればよろし」

といつてずんずん進む。確か中等部はこっちだったか。ん、あの人影は……

「どうかしたの?」

「いや、なんでもないよ」

僕が見たのは、小柄で銀髪の僕と同じくらいの年頃の少女だった。ていうか、塔城 子猫だった。

こんなところで原作キャラと接触（正確にはニアミス）を果たすとは……

まあ、ここはスルーしておくのが正解だろう。というわけで、校内に進入。

「玄関よ」

「見れば分かるよ」

「廊下よ」

「それも見れば分かる」

何で姉さんに案内されてるんだ?二人とも今日が初めてのはずなのじゃ。

「職員室よ」

「挨拶とかしていくべき?」

「編入するときでいいのではなくて？アポも取らずに来てしまった
し」

「1年生の教室よ」

「これらのどれかを使うことになるわけだね。短期間だけど」

「3年生の教室よ」

「姉さんがお世話になる区域だね。姉さんは高校からでいいと思う
……」

「図書室よ」

「おおー、今の学校とは規模が違う」

「イオは本が好きだものね」

「ちょっと寄っていい？」

僕と姉さんは図書室の机に着いている。何故だか人が全くいない。もしかしたらこの時刻は閉館しているのを僕たちが知らないだけかもしれない。

「何を讀んでるのかしら？」

「適当に資料の類を引き抜いてきただけ。ここで読みきるつもりもないし」

姉さんは何も読んでいない。ただ頬杖を突いて、机の木目とにらめっこしている。それに負けたら、思い出したように僕を見て、微かに口元を緩める。時計の秒針や、呼吸音さえはつきりと聞こえてしまうほどに静謐な空間。目になっている資料は退屈極まりないが、逆に優しい眠気を誘って、こんな雰囲気にも飲まれてしまうのも悪くない、と思ってしまう。なんだか上半身が重い。顔面と机の距離が縮まって行って

「わしわし」

と、姉さんの手が伸びて僕の顔をつかむ。

「こんなところで眠っては駄目よ？疲れが取れないし、風邪を引く恐れまでもあり」

全く力は加えられていないので、痛くも苦しくも無いのだが、なんだか子ども扱いされてるみたいで少し恥ずかしい。

「分かった、分かったから手を離して欲しい」

照れてぞんざいな抗議をする僕を、くすくすと笑って手を離す。

そして僕をじっと見つめる。

「……………」

じー。

「……………」

じー……………。

「……………」

じい……………。

「……………何ですか？」

ついに根負けした僕に、笑顔の姉さんが言う。

「イオ、拙者様が死んだときのこと覚えてる？」

何を言うかと思えば

「忘れられるはずがないでしょう」

思い出したくはないが、決して忘れてたり思い出にしたりしてはいけないトラウマだ。

「いえ、そうではなくって……………死ぬ直前の拙者様の言葉を覚えてるかしら？」

あいしているから

「ええ、覚えてますよ」

あれ、なんかヤナヨカン。

「で？」

「でって……何が？」

分かっているくせに逃避に挑戦。

「で、お返事いかに？」

まあ、当然まわりこまれてしまったけど。

「……返事、ですか……」

さて、どうしたものか。

と悩む振りをしてみても、答えは決まっているけれど。

理由は純粹なものではないが。

「ああ、因みに気づいていないようだけでも、世間体とかを気にす

「ることはないのだわ」

答えようとした瞬間に、僕の言い分を否定される。

「……どういうこと？」

変人ぶっているが、姉さんは狂人ではない。
理性的な思考を手放していないはずだ。

「まず、これから拙者様とイオが生きる悪魔社会では、アリらしいわ」

「アリって……金と秦の相関みたいなあれのこと？」

「そう、謹慎を司る総監みたいなあれ」

うーん……まあ、驚くほどのことでもないか？

人間社会でも時代や地域によっては許容されていることだし、むしろ悪魔なら奨励してしかるべきか？

いや、この世界での悪魔は随分とマイルドなようだけど……

「あと、周りに与えるであろう迷惑のことなのだけでも……」

うん、それは大事だ。むしろさっきのことよりも。

家族が白い目で見られるのは耐え難いし、友人たちから異常者扱いされるのも辛い。

「悪魔の寿命はどれくらいか、知ってるかしら？」

ああ、なるほど。

どの道人間の知り合いは、たかだか100年程で死に絶える。その後でなら気兼ねする相手はいないということか。

「まあ、うちの家族なら話せば分かってくれると思うけども」

とって苦笑する姉さん。

というか、もう気づいていると思う。その上で、受け入れているのだ。

そもそも僕たちが悪魔になったことのほうがよっぽどショックだったと思う……

「ね？問題ないでしょう？」

「うん……驚くほどないね……」

ならば僕は、どう答えればいいのか？

僕の感情をありのままに伝えればいいのか。

僕は、どう思っている？

蘭乱爛崎 寝々と蘭乱爛崎 伊緒は姉弟だ。

だけど、寝々は僕にとって八タチ前に出来た姉。

家族として見ているが、それだけか？

僕は、姉さんを……

「つぶふ……」

突然笑みをこぼした姉さんに、僕の思考は断ち切られる。姉さんは微笑んだまま、机を乗り越え僕へと手を伸ばし、

柔らかく、僕の頭を抱きしめる。

「ねえ、イオ……」

「あの時、“私”を守るって言ってくれたわよね？」

その姿勢のまま姉さんの発する言葉に、僕は答えられない。
理由？僕は童貞だ。後は察しろ。
むしろ悟れ。

「あれは、ずっと側にいてくれると解釈していいのかしら？」

僕の思考が迷走しているうちにも姉さんの言葉は続く。

僕は答えない。

いや、姉のふくよかな胸部の感触にウツトリしていたわけではない。
断じて違う！！

ただ……照れくさかったのだ。

しかしその無言を、姉さんは正確に読み取り、

「うん、嬉しい」

更に力を込める。

これはちよつと……ヤバいかも……

「だから今日は」

唇に触感。えっ？

「これで勘弁してあげるのだわ」

ほんの少し頬を朱に染めて、図書室から出て行く姉さん。

混乱から立ち返り、その後を追いかけるまで10分かかった。

翌日までまともに顔が見られなかったけど。

くちづけでは長く、愛には短すぎて（後書き）

これで一章は終了。

ちよっと間の話を挟んで二章に入る予定。

新キャラも出します。

浴槽大公の薫陶（前書き）

新キャラ出てます。やはり微マイナーです。

分かる人が少ないネタばかり使うくせに理解して欲しい、そんな作者はきつとどうしようもない。

それでも感想や評価をくれる慈悲深い人たちのおかげで

10^-24は今日も生きてます。

浴槽大公の薫陶

で、再び日付は変わり、今日は1月22日。

なんでも、たまたま出張していた黒瀬先生の眷属二人が帰ってきたらしい。

というわけで、顔合わせとご挨拶のため、僕と姉さんは再び駒王学園へとやってきたのである。

……以前ここへ来たときのことを思い出した。

あの時は大変だったな……。姉さんの顔が見られなくなるし、そのことで姉さんに散々いじめられたし、特に姉さんは至って平然としていたのが無性に悔しい。

結局、告白の返事はしていない。僕の答えも決まっていないし、姉さんのほうも、あれから一度もそのことについては触れていない。というか、例のアレを境に姉さんの僕に対する暴走が落ち着いている。

驚くべきことに、夜這いも朝這いも着替え中や入浴中の乱入もしなくなっただ。あの姉さんが!!

あるいはあの一件で、姉さんの中で何らかの決着がついてしまったのかもしれない。

閑話休題。

今、僕たちは校庭を二人テクテク歩いている（今日は駒王の制服）

のだが、あれだな。

昼間ってすつごくだるいな。

悪魔になった影響なのだろうが、日差しが辛くて辛くて仕方がない。

毒の沼地を歩いている気になる。ラナルータを使いたい。

逆に夜は不必要に血が騒いでしまうのだが、誰も彼も寝静まっている時間帯に活発な行動をとっても近所迷惑なだけだ。家はそういうのに厳しいのだ。事情は伝えてあっても。

眠ろうと努力しているが、12時に布団に入って眠りに落ちるのは3時だ。そして6時起床。いくらなんでも睡眠不足だ。悪魔になって身体も強くなっているとはいえ。

中学校程度の学習内容ならば授業を受けなかったところでさしたる問題はないのだが、堂々と授業中に寝るのはマナー違反だ。人として問題がある。悪事というのはせめてこそこそと行われるべきだ。で、同じ問題を共有している姉さんに、相談してみた。

「悪魔になってから、僕ら夜型になりつつあるよね。どうしよう？」

「うーん、とりあえず、これから行くところには同じ境遇の先輩がいるはずだから、その人に訊けばいいんじゃないかしら？」

なるほど、他力本願っていいよね。

えーと、第二カウンセリング室……ここか。
ノックしてみ

「お待ちしておりました。蘭乱爛崎様」ガチャ

うおお早い！未来視か？

僕のノックより早く僕たちを出迎えたのは、メイド服に身を包んだ少女、フロレット・ハーベンハイトだった。

「どうぞ、お入りください」

先制を取られた僕は言われるがままに室内へと歩を進める。姉さんも僕に続く。

第二カウンセリング室の内装は、以前来たとおり大きなテーブルを囲んでソファ、壁には本棚や薄型テレビ、本棚には小難しそうな厚い本が並んでいる。ただ、テーブルの上に漫画雑誌が置いてあるのは真面目な空気を甚だ殺いでいるが。

そしてソファには二人の男女が腰掛けている。どちらもはじめて見る顔だ。おそらくは彼らが、出張していた眷属なのだろう。

こちらを客観的な目つきで見る女性。

こちらを見ようともしない少年。

先輩となる彼らにこちらから挨拶をしておく。

「はじめまして。先日、クローセル様の兵士になりました蘭乱爛崎伊緒です。お世話になります」

「戦車になりました姉の蘭乱爛崎 寝々です。よろしく願いします」

略式自己紹介。それに対して、

「俺は馳尾ハセオ 勇路ユウジ 僧侶だ」

先に答えたのは、少年のほうだった。

駒王中等部の制服を着ていることから、僕に近い年だと分かる。無愛想で不機嫌そうな態度、高めの背丈もあって不良っぽさMAXだ。しかし僕たちの自己紹介に普通に答えたあたり、見た目ほど怖い人間ではないのかも知れない。

なぜだか制服の襟や袖に安全ピンをいくつも留めている。彼なりのファッションなのだろうか？

だとしたら新手のスタンド使いみたいなセンスだ。

煙草の煙でカマ掛けしてみようか。

「拙者はキュラソー。クローセル様の騎士をさせて頂いています。以後お見知りおきを」

次に女性が立ち上がって答える。新入りの僕たちに丁寧な応対。しかしこちらもお堅い。

その女性は黒いフォーマルなスーツに身を包み、長くも短くも無い黒髪がつんつんと逆立っていた。

服装や態度は大人っぽいのだが、身長は中1の僕より低い。150cmあるかないか。

一人称がしっくりくる、抜き身の刀のような鋭い空気を発している。その分横文字な名前がしっくりこないが。

姉さんと被っているようで全く被っていない。

「僕たちを呼ぶときは苗字が同じなので、下の名前で呼んでください。お二人はなんと呼べばいいでしょうか？」

「好きにしる。あと、俺はお前と同学年だから敬語もはずせ」

「じゃあ遠慮なく、馳尾って呼ばせてもらうよ。僕のことイオでいいから」

「だったら拙者様は馳尾くんって呼ばせてもらおうかしら」

思ったとおりの実はいい人な馳尾。

「拙者のこともキュラソーで結構ですよ、イオ殿もネネ殿も」

「では、キュラソーさん、と」

「拙者様もそれでいいのだわ」

やはり時代劇なキュラソーさん。この人もいい人そうだ。

「それで、少し気になったんですが、」

割と打ち解けた空気なので、思い切って訊いてみる。

「黒瀬先生はどこに？さつきから聞こえている鼻歌（懐かしのアニソン）や水音は一体なんですか？」

「「「……………」」」

とたんに黙り込む三人。いかにも答えづらいこと訊かれたって感じだ。悪いことしたか？

「実は…………」

と気まずそうに口を開いたのはフロレットさんことフィーさん（みんなそう呼んでいるらしい）だった。いや、無理に言わなくてもいいですよ？大体分かってるし。

「クローセル様は今……」ガラガラ

「あれ、二人とも、もう来てたんだ？」

僕たちが入ってきたのとは違う扉から、明らかに湯上りな黒瀬 誅

歌先生が出てきた。

部屋のそこから中から深い、深いため息が聞こえてきた。

「いやー気づかなくてごめんね？」

「いいですよ、もう」

「ええ、入浴中だったなら仕方がないのだわ」

いや、学校で入浴はおかしいと思う……。

「ていうか、何で学校施設に浴場があるんですか!？」

中を見てみたが、結構広いし設備も整っている。商売が出来るようなほどにだ。

「え？温泉が好きだからだけど？」

当たり前前のことを聞くなとでも言いたげな言葉ですね。

「個人の嗜好で校舎を改築って貴女は何者ですか……。しかも温泉だったんだ、あれ……」

「学校に温泉があるなんて素敵なことなのだわ」

「ネネちゃんさすが！分かってるじゃない！！」

謎な意気投合を見せる二人。姉さんって本当にあちら側の人なんだなって痛感した。

「温泉なんて一体どこから……」

「ああ、それは私の超能力。クローセルってのは、温泉とか水脈とか秘めた才能とかを見つけるのが得意な悪魔なの。スゴイでしょう？」

「超能力の無駄遣いだと思いますけど……」

「日本って素敵よね。探せばほとんどの場所で温泉が見つかるんだもの。来て良かった」

「聞いちゃいねえ。そうしていると、」

「あの、そろそろ本題に……」

困り顔のフィーさんが言う。

「ああそう、そうだったそうだった」

思い出したように言う黒瀬先生。でも、

「? 一体何が始まるんです?」

と尋ねる僕。姉さんも困惑顔だ。そこに

「先ほど話されたとおり、クローセル様は人の才能を見抜く力をお持ちです。お二人が我々の中でどのような役割を担っていくのか、またその為に必要な訓練の方針などを決定するために、適正を試すわけですね」

と答えるキュラソーさん。へえ、そりゃすごい。

「ネネちゃんのほうは前に見たから、どう変化したかを確かめるね?」

じつと姉さんを見つめる黒瀬先生。いまだに頭にタオル巻いてる。

「うん、運動能力にかけては相変わらず天才的。で『神器』は……
つと……あ!」

どうしたんだ? 随分驚いた様子だけど。

「……………バランス・ブレイク 禁手化してる……………」

は？

はあアアあああああああああああああああああ？

「ど、どういことですか!?!?」

「覚醒して間もないのでしょうか!?!?」

「間違いないんですか!?!?」

先輩3人も慌てているようだ。ていうか馳尾、目上の人にはちゃんと敬語使うんだね、君。

「あの……………?」

置いてけぼりを食っている姉さん。そういえば僕たちは禁手について知らされてなかったな。それに気づいたのか、

「ああ、バランス・プレイヤー禁手っていうのは、スタンド幽波紋でいうところの鎮魂歌、斬魄刀でいうところの卍解、キヤスト虚軸でいうところの虚界渦開放みたいなもので、つまるところ超必殺技です」

と分かりやすい？解説をする馳尾。
というか、君の意外な一面を知ってしまったんだが……
君とはいい友達になれそうだ。

「で、禁手に至るには、精神面での大きな改革みたいな、なにかの契機が必要なんですけど、心当たりはありませんか？」

新入りでも年上には敬語を使う馳尾。最早ヤンキーっぽい第一印象は完全に払拭された。

「そうだね……先日的一件で拙者様は少し変わった……と思うけれど？」

という姉さんの答えに、

「察するに、あのときの戦いですでに達してはいたけど、悪魔として基礎が未熟すぎたから発動できなかったんじゃないかな？それにして面白いね。時間の長さはあまり関係がないとはいえ、目覚めてから3日で至るなんて流石に聞いたことがない」

と愉快気に自説を述べる黒瀬先生。

「ネネちゃんにはバリバリの前衛だから、前と同じ訓練とこれからは禁手を使いこなす訓練もしてもらおうかな」

「仰せのままに」

これで姉さんの方針は決まった。

「さて次はお待ちかね、イオくんの番だね」

そう言って今度は僕をじいじと見つめる先生。そして、

「うーーーーん……………」

なんだか凄く悩んでらっしゃる。

これは…………つまり…………

「…………家事スキルは要領よくB+までいけるね。舌先三寸スキルも鍛えればAA。空気を読むスキルがこの年でAランクなのは驚き。あとタラシスキルが先天的に」

「何の話をしてるんですか、何の！！！！そんな所帯じみたものはい

いですから、もっと悪魔っぽく戦闘で役に立ちそうな才能はないんですか!？」

すると黒瀬先生は、すすすーと視線をそらし、

「……無い」

と答えた。

「無いつて……」

「いや、本当。冗談なんかじゃなく。魔力も全然無いし、鍛えてるみただけで身体能力も今以上には伸びないし、とてもじゃないけど前線には立てないね。兵士だけだ」

がくーん、と肩を落とす僕。

ぽんぽん、と落とされた肩を叩いてくれる馳尾。

僕の中で馳尾株が鰻登り。

「……まあ、全く無いつてわけじゃないんだけどねえ」

「本当ですか!？教えてください、どんなものでも!」

すげー食いつく僕。

「どつしても聞く?」

「どんな地味なものでも無いよりましです!」

後悔するなよ?と、前置いて、黒瀬先生は語りだす。僕の可能性を

「えー、君には……『鼻さわり』と『お尻濡らし』の才能があります。それも十兆人に一人の天才」

?

??

????????????????

コノヒトイマナンツッタ?

はなさわり??

おしりぬらし??...

僕の辞書にそんな言葉は無い。

「あの一……………なんですか、それ？」

やっこの思いでそれだけの文句をひねり出すと、

「説明しよう！一『鼻さわり』とは、突然相手の鼻を指で触って、
相手を驚いたような、恥ずかしいような微妙な気持ちにする技術な
のである！一！」

「……………」

ずいぶんとまーたのしそーじゃねーかおい
僕のテンションはそのマイナスに比例してるけどな

「そして『お尻濡らし』とは、自らのお尻を……」

「もういいですよ!!」

たまらず中断させる僕。

「……………ここで『鼻さわり』スキルを鍛えることで習得できる必殺技を紹介しよう!!」

まずレベル1 『鼻さわり』

全ての基本となる技だ。突然相手の鼻を触ることとで、微妙な気持ちにさせるぞ!!

次にレベル2 『2連続鼻さわり……』

「だからもういつつつつてんだろ!!!!!!!!死んでも鍛えねえよ、そんなスキル!!!!」

僕の魂の叫びだった。この場にいる皆の心に響いたことだろう。

「ええー、ここから強いのに、『鼻さわり』」
うそこけ。

「たとえ強くてもそんなスキル嫌ですよ」

「人類発生以来の天才なのに……」

「やめてくださいよ。侮辱にしか聞こえませんか」

殺人さえも許されるんだぞ。神がだけど。

「僕は『神器』ひとつに絞ります。それでいいですね？」

「うん。というか私もそれが言いたかったんだよ」

はあー……

見ると、先輩たちも一様に僕と同じ顔をしている。

なんだか、僕、この人たちとなら上手くやっていけそうだ。

僕たちと先輩悪魔の第一種接近遭遇は、こんな感じで割りとは友好的だったのである。

「ね、ねえ？拙者様は使えないのかしら？その、『鼻さわり』って
……」

姉さん……

浴槽大公の薫陶（後書き）

元ネタ解説

キュラソー 原作名『されど罪人は竜と踊る』

新進気鋭の萌え小説家・ラボ先生の全作品中最高の萌えキャラ。
ウフクス殿（ノーブラ）とか

金澤 銀子（ドラゴンスクリュー）とか

ふくろおんな（ヨダレ臭い）とかもいいけど
やっぱりキュラソー君（さらし）こそ至高
これから死ぬほど活躍する予定。

馳尾 勇路 原作名『断章のグリム』

全然グロくないメルヘンラノベ作品なのですが、『赤頭巾』編を読
んで、

こいつと瑞姫のキャツキャウフフがどうしても見たくなくなった。
というか、誰でもそうなると思う。

探したけど見つからなかったなので、自分で書こうと思った。

虚軸のくだりは『レジンキャストミルク』ネタ。

本当はこの作品からもキャラ引っ張ってこようかなーと思ったが、
どいつもこいつもチート揃いなので自粛。

敵の虚軸だけでも神器として出すかも。

とつてももしももしかして（前書き）

壊れていない正しさのある世界なら

うまい棒を齧りながら書きました。

まどかマギカ視て、箱マリを思い出したのは俺だけではないはず

注意

今回、魔女カリ知らないと本当に分からないと思われます。

思い切って飛ばしちゃってもいいかも

とつてももしももしかして

「蘭乱爛崎 伊緒です。よろしくお願いします」

転校生はわずかに微笑を浮かべて言った。

こんな風に言うと『空ろの箱と零のマリア』みたいだな。

当然僕は、暇つぶしに宣戦布告したりトラックに轢かれたりしないけど。

そつえば、僕を転生させてくれやがった“神”はもしかしたら“O”だったりするのかも。

まあ、そんな戯言はさておいて、

今日は2月1日。僕の駒王学園中等部への転校初日である。

中途半端な時期に転校してきてしまったが、無事に友達は作れるだろうか。

……前の学校の友人とは、喧嘩別れのような形になってしまったしねえ。

バカ二人は「なんで姉ちゃんまで転校するんだよ！お前だけ消えるよおおお！！！」

とか、相も変らぬ最低ぶりだったけど、逸賀谷さんを含む一部の友好的な女子の中には泣いている人もいたっけ……

罪悪感もあるが、少し嬉しくもある。まさかそこまで友人として深い仲になれていたとは、僕自身予想外だったからだ。うまくすればお付き合いしたりも出来たかもしれない。

ちよつと、惜しいことしたかな。

「……短い間になるかもしれんが、仲良くするように」

担任教師の個性の無い声が僕を現実へ引き戻す。

「ん？このクラスは宵本で最後だから出席簿直すのが楽でいいな。感心感心」

そんな誰も意図して無い業績を褒めてどうする。あれ、ていうか

ヨイモト？

「調度いい。宵本、お前転校生の面倒見てあげなさい。席もお前の隣空いてるし」

「調度いいって何がですか先生！普通クラス委員に任せることですよー！」

担任教師の単なる思いつきとしか思えない意見に、後ろの席の男子生徒が立ち上がって抗議する。

おそらくは、彼が宵本君なのだろう。

細身でやや中性的な顔立ち（親近感）、イケメンと呼んで差し支えない。

黒髪……の真面目……そうな、普通……の少年である。

「ごちゃごちゃぬかすな。とにかく蘭乱爛崎の席はあいつの隣だ」

そういつて彼の抗議を断ち切り、僕に席に着くよう促す。僕はそのとおりに行動する。

僕としても、彼とは話をしてみたいから。

「宵本^{ヨイモト} 澪^{レイ}だ。何でも聞いてくれていい。よろしくな」

いやな顔ひとつせず、親切に接してくれる宵本君。

「こちらこそ、よろしくお願いするよ。宵本君」

予期せぬ『魔女カリ』主人公との邂逅だった。

昼休み、

「二等辺三角形とか太^{ファット}つちよ^{トマン}か？せ^{スキ}つ^{ニー}ほちのど^{ボー}つちか^イだろ？正三角
形のほうが断然」

「正三角形って、必ずといっていいほど面積が汚い数字になるじゃないか。二等辺三角形こそ至高」

早速友人となつた宵本君と僕は、

「ミルクなんか加えたら味も香りも濁ってしまうよ？ストレートテ

イーが一番」

「知らないのか？本はといえばミルクがメインだったと言うぞ？よってミルクティーのほうが優れていることは自明の理だ」

なんというか、真実何の益体も無い雑談をしていた。

議題はここからモンティ・ホールのジレンマ、さらに栗饅頭問題、あの鮫島事件の真相などに移り、ついにどのスタンドが一番強いか（黄金体験鎮魂歌を除く）という深遠な討究に決着が付きかけたその時、

「零一、ご飯食べよう？」

と言う女子の声。あ、そういえば今はお昼休みでしたねと声の主を確認すべく教室の入り口に目を遣る。

そこにいたのは、女性の容姿や体型について文字に起こすのは紳士的ではないため簡潔に述べるにとどめるが、かなり理想的な美少女で、

明るい青色でわずかにウェーブした髪を、手を加えずに腰のあたりまで伸ばしていた。

宵本君に向けられていた彼女の視線は、その隣に座る僕へと注がれ、

「誰？」

と僕らは言葉をかぶせてしまう。

本当に誰だろう？

僕はこんな人は知らない。

男口調でもなく、触手でもないこんな女性は。

「ええと、こっちは天堂テンドウ 巳沙希ミサキ。俺の……知り合いだな。ちなみに隣のクラスの住人だ。そして巳沙希、こっちは蘭乱爛崎 伊緒。今日俺の隣（の席）に越してきた転校生だ」

うわっやっぱりそうだったのか。
疑問は尽きないけどそれより今は、

「蘭乱爛崎 伊緒です。よろしく、天堂さん」

挨拶のほう的大事だ。

「あ、はい。こちらこそよろしく、蘭乱爛崎さん」

常識的に応答する天堂さん。ますますアレと同一人物とは思えない。しかし、まだ彼女の視線がなくならない。
僕の顔に何か付着しているのだろうか？

「巳沙希、蘭乱爛崎の頭は地毛らしいからお前たち生徒会の出番は無いぞ」

「ああ、やっぱりそうだったの？ごめんね、じろじろ見て」

ああ、そういうことか。目の前の彼女含めてこの学校は、というかこの世界観は、カラフルな傾向にあるから失念していたが、学生が髪を染めるのは褒められた行為ではないのだった。

「いや、いいよ。母方に西洋出身のご先祖がいるらしくてね。その遺伝形質なんだ」

「そうだったのか。でも、そういうの……特別って感じで羨ましいな」

何気ない宵本君の一言。だけどそれを、僕は見過ごせない。

「宵本君」

「ん？」

「特別と普通、どっちがいいと思う？」

先ほどまでの取るに足らないディベートではなく、彼の本音を確認なくてはならない。

必然、僕はいつになく真剣な雰囲気を漂わせ（ようと努力し）ている。

天堂さんは理由が分からず、戸惑っている様子だ。

「ああ、別に君の言葉が気に障ったというんじゃないんだ。最近、少し思うところがあってね。心の底から忌憚の無い意見を聞かせて欲しい」

折角転校初日に出来た友人たちなのだし、不安がらせるのは望ましくない。

だから、そう付け加えておく。

「特別と普通、か」

宵本君が答える。こちらの意を汲んでくれたようで、その声はやや真剣みを帯びている。

「そつだな……良い悪いを抜きにして、特別という言葉には惹かれるものがある」

「……………」

「だけど、俺は普通の人間だ。だからこそ特別であることに惹かれるのかもしれないが、どれだけ望んだところで、俺は普通からは抜け出せないだろう」

「……………」

「それは少し悔しいが、仕方の無いことだ。それに、俺が普通だから手にしているものがあって、そしてそれは、普通なものだけど、全然つまらないものなんかじゃないんだ。いや、」

「とても、大切なものなんだ」

そう言いきった宵本君の表情には、迷いや照れが一切無く、とてもまっすぐな眼をしていた。

「…………… / / x / / /」

その横で天堂さんがなんかすっごく紅潮してもじもじしていた。それにきづいた宵本君が、今更のように照れて顔をそらす。

畜生！なんだこいつら！

ういづいあまあまいちゃいちゃらぶらぶなリアリテイマーブル固有結界展開しおって！
まるで僕がKYじゃないか！

と、そこで

はっ

と気づく。

どうして宵本君が中二病でなく、天堂さんが普通の美少女なのか。

つまり、どうして宵本君が普通の良さに目覚めていて、

天堂さんが男みたいな態度ではなく、髪を触手にもしていないのか。
唯一つの条件だけでそれらは説明可能だ。

この宵本君は、約束を覚えている宵本君なのだろう。

そして、おそらく、天堂 巳沙希と

「ま、まあ、そういうわけだ。普通が一番！納得してくれたか？」

「ん？ああ、そうだね」

無理やり仕切りなおそうとする宵本君。

ああ、いいだろう。ただ、これだけは言わせて欲しい。

「二人とも」

「なんだ？」「何、かな？」

「式には呼んでよ？」

「「なっ！！！！」」

そして動作不良を起こす二人。おそらくラジエーターに問題あり、だな。

二人とも顔真っ赤だし。

さて、ドグサレリア充どもがバグってるうちに、と
教室内を見回す。

お、こちらと眼が合った瞬間顔を伏せるターゲットを発見。

さりげなく僕らを、正確にはリア充二人を、窺ってたのがバレバレであります、サー。

そして顔を伏せつつも、ちらちらと二人に視線を寄越す黒髪眼鏡少女。

その視線には、好奇や嫉妬、焦燥といった、実に恋する乙女な成分が確認できて、

逆に、悲愴や自虐、諦観といった、マイナスチックな含有物質は観測されなかった。

すくなくとも、自殺なんかはしなさそうだ、と僕は判断する。

まあ、つまり、あれだ。

この世界で、今のところここだけは、円満な形で成立している、というわけだ。

勿論、彼らが高2になるまで安心は出来ない。だけど、大丈夫だ。きっと大丈夫だ。

目の前にいる彼らなら、きつと。

悲劇を迎えるはずだった彼らが、平穩に幸福を享受している
ただそれだけで、救われた気持ちになる。

なぜなら、証明されたからだ。

この世界は希望を抱いて生きるに足るものだ、と。

まあ、なにはともあれ

こゝ愁傷様です、砧川さん

追記

宵本君の昼ごはんは、天堂さんの手作り弁当でした。

爆っ発しろマジで！！

イオ程度の威力では、僕の憤怒を表すのに全く不十分だった。改名してナズンつけようかな……

とつてももしももしかして（後書き）

知らない人には本当に申し訳ないものを書いてしまったと思う。けど、こういうのが書きたくて始めたんです、この作文。

あと、今更なんですけど、

作者は魔女カリ2巻までしか持ってません・・・
BOOKOFF 8軒回ったけど見つからず・・・
チャイナ双子みてえ・・・

朗らかに囃ソングをうたう（前書き）

「この駄文を読んで僕も魔女カリ、され竜、断章を読み始めました」という読者様が現れるまで頑張ります。

「……後悔しなければいいが……」

そんな感じの17話です。

テスト直前までこんな書いている自分をぶっ殺したい。

よろしくお願いします。

朗らかに囁ソングをうたう

「【拡縮設定：外力の槌】イクエイション【支配式設定：D^{D値} || M/V^{V値}】【体積：増移】D値【密度：減移】V値」

瞬時に巨大化したバス停が、キュラソーの胴体に音速の60パーセントで迫る。

「《晩夏空蝉》」

彼女を輪切りにするはずだった刃は、代わりに黒いスーツの上着だけを引き裂いた。
衣服を利用した変わり身の術である。

武器を振りきって出来た隙に一気に距離をつめ、短刀・夜鴉が差し込まれる。

「ツツ！！」

咄嗟にボールペンを拡大し、盾として急場をしのごく。

ボールペンにめり込んだ夜鴉を、ボールペンを縮小することでいなし、鋏を逆風に振り上げて反撃とする。

キュラソーは側転のように鋏をかわし、再び距離を開け、

「《雷霆鞭》」

夜鴉の先端から100万ボルトの雷撃が放たれ、寝々に襲い掛かる。それを予期していたのか、定規を拡大して盾にしつつ射線から身を

退ける。

しかしそれは、

「《曝轟蹂躪舞》」

キュラソーの罨だった。

雷撃で追い込まれた寝々の足元で、大爆発。

耳をつんざく轟音と共に秒速8750mの爆風が寝々を吹き飛ばす。

「あれ、死んだんじゃ……」

「アレくらいなら大丈夫だろ。ちゃんと手加減してたみたいだし」

と、僕の隣で二人の模擬戦を見物していた馳尾が言う。

事実、姉さんは100mほど飛ばされていたが、五体満足で意識もあるようだ。

全身傷だらけで戦闘続行は難しいだろうが。

『内力の槌』で強化された姉さんを大怪我をさせず戦闘力だけを削ぐとは、やはりあの黒スーツ、凄い人だ。

「さて、じゃあ次は俺たちの番だな」

「ええー、本当にやるの……?」

こんな感じで僕たちはいま、模擬戦と言う名の殺し合いをしている。どこでそんなことしてるかって？僕も知らん。

少し、ここに至るまでのことを振り返ってみよう。

そう、あれは大体1時間前のこと

いつものように宵本君と適当にくっちゃべって、心の中で呪詛を吐いて、またいつものように第二カウンセリング室に向かった。ここまでではいつも通りだったのだが、

「基礎訓練もいい加減飽きたし、そろそろ実践（戦）よね」

と、例の銀髪人外口りな僕らのご主人様が仰いまして、

「おっぱい」

自分の耳を疑うようなハレンチックスペルを唱え（声がでかい）、浴場の扉の向こうに消えた。

消えた、なんて表現をするのは、扉の向こうの、絶対に浴場ではありえない緑あふるる自然や赤茶色の大地を見たからだ。

なに、驚くことは無い。ここはファンタジーの世界なのだ。どこでもドアくらい当然である。

ただ、僕が気がかりなのは、直前に黒瀬先生が口にした禁断の名詞

……

……もしかしなくても、僕も言わなければいけないのだろうか。

黒瀬先生は変人だが、流石に脈絡も無く猥語を叫ぶほどイカレてはいない、と思いたい。

しかし、だとすると、アレが合言葉と言うことに

「あー一応言っとくと、合言葉は人によって違うぞ」

「人によって違う？」

僕の心を読んだかのような馳尾の指摘に、僕は酷く間抜けな疑問を返してしまふ。

「あの扉には空間転移の魔法がかけられておりまして」

「合言葉で登録されたものか否かを認識するわけですな」

フィーさんとキュラソーさんがそれに答えてくれる。

「でも合言葉って？そんなもの知らないのだわ」

姉さんが僕の気持ちを代弁してくれた。
それに馳尾が

「あー、それがな……」

言うのを躊躇っている様子。

「何？」

答えを急かす僕。なんか前にもこんなことが

？

「それが………洗う順番なんだよ………」

？

「だから、……風呂でどこから身体を洗うか、が合言葉なんだ……」

……やっぱこんなノリか。考えうる限り最低の発想だ。

理由は「お風呂が好きだから」「なんだろうなあ、どうせ。つていうか」

「そんなこと教えた覚えが無いけど!？」

「顔を見れば分かる、だそうだ」

なんて無駄なスキルだ!

と言うかあの人胸から洗うの?

無いも同然のくせに!

「聞こえてるよ」「ガラッ

声に出して無いよ!

……うん、まあ、そういうことなんだ。なにが?って聞かれる

と困る。

とにかく、次は僕と馳尾の模擬戦だ。
馳尾がどれくらい強くてどんな戦い方をするのか、僕は全く知らないけれど。

「んじゃ、いつちよ始めるか」

「お手柔らかに頼むよ」

周りにいたギャラリーたちが僕たちから距離を取る。
そんななか、フィーさんが

「ではこの試合、私が合図と審判をさせてもらいます」

とって、姉さんとキュラソーさんのときと同様に、審判の位置に着く。

そして数秒後、彼女が開始を宣言する。

「始めっ!!」

同時に しききん と言う音

敷金？

僕がその音の正体に気づいたとき、僕はもう動けなかった。

いや、正しくは動けるけど動けば死ぬ、か。

僕の周囲半径1mほど。

その地面から無数の金属の針が伸びて、僕の身動きを封じていた。
長さも太さもまちまち。

共通点と言えば、鏡のように滑らかな表面と、容易く人体を貫くで

あろう鋭利な先端くらいか。
その先端の全てが僕に向いていて、3cmも動けば肉に埋まるだろ
う位置で静止している。

「続けるか？」

「当然（降参する）！！」

「……では、それまで」

こうして僕の始めての実践訓練はあまりにもあっけなくその幕を閉
じた。

「いゝのゝりゝはゝあゝなゝたゝのゝ おゝもゝかゝげゝ やゝど
ゝしゝゝ」 「ちやほちやほ

僕と馳尾の模擬戦のあと、つまり今は、勝者同士が戦っている。
どうやらトーナメント形式だったようだ。

こうして見ると、僕や姉さんと戦ったときは二人とも手加減してた
んだなあ。

まあ僕との戦いは、そういうレベルにすら達していなかったけどね
……

「た〜ま〜し〜い〜い〜ろ〜ど〜る〜 お〜も〜い〜を〜 は〜こ
〜ぶ〜」「ち〜ぶ〜ぞ〜ぶ〜

で、僕と姉さんは見学、フィーさんはやはり審判をしているのだが、

「つ〜ば〜さ〜を〜は〜や〜し〜 あ〜い〜か〜ら〜 に〜げ〜て

〜」「ち〜や〜ぶ〜ち〜や〜ぶ〜

「……………」

「拙者様も入っていいかしら？」

「もちろんいいよお」

そろそろ突っ込んでいいか？

いや、やっぱ止めとこう。なんていうか、疲れた。

「あのじ……………」

「なに？イオ君も入る？」

「イオ？お姉ちゃんは許しませんよ？というかこっち見たら愛の鞭。
ジュネーヴ条約に違反するようなことをするわ」

拷問！？正義の味方的にそれってアリなの？

「そうではなくてですね、そろそろ教えてもらえませんか？」

「何を？」

「先輩たちについてです。何なんですか、アレは？」

あのような人外バトルは一体全体どれくらい宇宙の法則が乱れれば発生するのでしょうか？

「あ、それは拙者様も気になってたのだけ。教えて欲しいと希望するところ」

「ああ、あの二人はね

」

「 《自由を奪うものは檻に》 ！！ 」

その言霊と共に、自らの手の甲に安全ピンを突き立てる馳尾。悪魔
と言えど、痛みとは無縁ではない。ならば何故？その答えは、

しきわきわきわいん……

と、先ほどより遙かに速く鋭く多く長く太く美しい針の山の出現が表している。

『刀山剣樹』

それが、彼の宿した『神器』であった。その能力は、使用者が直接的に、或いは間接的に触れている地面や壁、天井から金属の針を無数にはやす、という残虐極まりないもの。

しかし、馳尾はその破壊力に満足しなかった。そんな彼に黒瀬先生が助言して始めたのが、強い思いを乗せて威力を倍増させる、というものだった。

馳尾は言葉と痛みで過去を意図的に思い起こし、その限らない憎悪を『神器』にそそいでいる。

事実、この儀式を行った際と行わなかった際とではその全てにおいて大きな開きがある。

そして襲い来る彼の渾身の針の山を、対峙する彼女は、ひらり、とまるで重さなど無いように跳び上がったかわし、そのうえ針の山の先端を足場に馳尾の許へと駆ける。

しきん！しきん！と更に伸びる針。それらを彼女は

「《雷電長槍》」

と言って、忍術で発生させた高熱のプラズマを短刀・夜鴉に纏わせて難なく焼き切り捨てる。

そう、忍術。

彼女・キュラソーは何を隠そう（本当に隠していなかったが）現代

に生きる忍者なのだ。しかも、今は抜け忍とはいえ、そもそもは日本人なら誰もが知っているような名高い里の出なのだそうだ。彼らは忍術と言う、魔法や神の奇跡とも違う超常現象を起こす技術を身に着けている。

黒瀬先生が雷遁の才能を見出し、それからと言うもの重点的に鍛錬しているらしい。

針の山を音も無く駆け抜け抜け馳尾に迫ろうとするキュラソーに、

ばきいん！

折れた針の先端が四方八方から飛来する。

針に針をぶつけて弾くことで、弓弩のごとく刃を放ったのだ。針の弾道に寸分の狂いも無い。

馳尾の訓練の激しさが自然と窺える精密動作性だ。

それをキュラソーは

「《微塵維畳壁》」

忍術による極細の繊維で壁を編み上げ、全ての針を受け止めた。そして馳尾に人差し指を向ける。

「ッ！！」

馳尾は緊急に太い針の壁を作り、盾とした。雷撃からも爆発からも彼を守るのに、それは十分な堅牢さを持っているように見えた。だが、

「ぐうう……」

馳尾はうめき声を上げて倒れ、針は全て大地へ沈み消えてゆく。

何が起こった？

僕には、キュラソーさんが馳尾に指を向けただけに見えた。目に見えない何かをしたのか？

「《微塵極針》」

僕の内心を見透かしたように、黒瀬先生が語る。

「なんです、それ？忍術ですか？」

「そう。イオ君、ネネちゃん、君たちにはどう見えた？」

どうって……

「全く何も見えませんでした」

僕は正直者。しかし正直が美德なのは小学校低学年までだ。

「拙者様も見えなかった。だけど馳尾君の倒れ方から、指先から何かを放ったのは推測できる」

と姉さん。さすが戦闘の天才。

「うん、“見えない”で正解。キュリーが使った《微塵極針》は、単分子の針を億単位で発射する忍術だから、肉眼で見えたら悪魔じニンゲンやないよ」

「は？単分子？億？ついていけません……
っていうかキュリーって？」

「つまり世界一小さくて鋭い針を無数に放ったから、馳尾君の針の壁をすり抜けて攻撃できた、ということね？」

「そ。ハセオ君を針で攻撃して倒すんだからキュリーも皮肉好きだよねえ。わざわざ無音発動までしてさ」

口に出さなくても、忍術は使えるのか。考えてみれば当然かな。忍者と言えは隠密行動だし。

「いつも口に出してるのは、フェイントでもあるけど、そのほうがイメージしやすいからだよ」

また心読まれた。

「しかしそうなると大層厄介なのだよ。目に見えず、予兆すらない。そのくせ当たれば致命的で、数億と言う数を考えれば効果範囲も…」

…」

「ネネちゃんなら勘で避けられるんじゃない？まあ、キュリーもまだまだ隠し玉持ってるけどね」

朗らかに鬱ソングをうたう（後書き）

元ネタとか

忍術はされ竜の呪式から

キュラソー君はいつから雷轟士になったんでしょうねw

原作で使っていないものでも、作者が忍者っぽいと思ったものは使わせる予定。

馳尾君については、ほとんど原作どおりなので言うことなす。

クローセルが歌ってるのは、Dragoon Dragonとい
うゲームの

「尽きる」と言う曲。

鬱くしい癒し系ソング。空を埋め尽くす妹エンドで有名。

疾走する思春期のパラノイア（前書き）

申し訳ありません、間が空いてしまいました。
テスト期間だったもので……

今回、いつもより長めです。

後今更ですけど、時期設定は原作の2年前です。

つまり、主人公は子猫やギヤスパーと同年、寝々はリアスや朱乃と同年という設定

イッセーは高校から入った組

中等部とかいう設定がそもそも捏造ですが、お気になさらず。

疾走する思春期のパラノイア

「そういえば、この学校に他の悪魔っていないんですか？」

「いるよ。しかも結構な数」

「僕の先輩にあたる悪魔たちですよ？挨拶しなくていいんですか？」

「いーのいーの。だって……」

「そのほうが面白いから、ですよね？」

「お！イオ君もわかってきたじゃない！」

「わかった、というよりかわった、というほうが正しいかな。
普通のままではやってられないから。」

「なにせ、私の事さえ秘密にしてるくらいだからね！イオ君もバラ
しちゃダメだよ？」

「いいのかなあ……そんなんで。」

本日は4月13日木曜日。ついでに言うると曇天。

これといって何もなく、新学期が始まった。

僕と馳尾、宵本君たちは中二、姉さんは高1になったわけである。また宵本君と一緒にクラスになれたのは僥倖だった。

しかも名簿順の座席のため、前後に座っている。

同じクラスになれなかった天堂さんに嫉妬された。

男の僕に嫉妬してどうするのだ……

砧川さんは別のクラスになってしまった。スツゴイカワイソ。

そして……

「草太くん名言集その15 “不細工は表通りを歩くな”だ」

「相変わらずだな、お前は。10代逃したら、もう成長するのは難しいと言つぞ？」

「いや、前は“不細工は死ぬ”じゃなかった？少しは改善されてるかも」

「それは草太くん名言集その8だ。撤回したわけじゃないぞ。俺の視界に入らないならどうでもいいってだけ」

「お前は女が好きなのか嫌いなのか、どっちなんだ？」

「可愛くてやらせてくれる女が好きで、それ以外は空気と同じ。で、同じ空気なら二酸化炭素は少ないほうがいいだろ？」

「この年で機波くらいある意味しつかりした拘りを持つてるのも珍しいかもね」

機波きなみ 草太そうた。新しいクラスメイト。

御覽の通りの貞操観念の持ち主で、童顔低身長の美少年。

普段は一人称『俺』の下品な男子中学生だが、女の前では一人称『ボク』の純朴な少年になる。

正直、なんでこいつと仲が良いのかわからない。

これだけ最低な要素がそろっているのに嫌いになれない辺りが、こいつがこいつたる由縁なのだろう。
得な奴だ。

「現時点で何股かけてるんだ？数えられる脳みそがあったら、でいいんだが」

こんな口ぶりだが宵本君も機波を嫌っているわけではない。むしろ、どこか尊敬している節さえある。それがどこか、僕にはさっぱり思いつかないのだが。

「遊んだ相手のことなんかいちいち覚えねーし、そもそも“遊んだこと”はあっても“付き合ったこと”はない」

「また出たよ、最低発言。本性ばれたら君、刺されるんじゃない？」

「最低発言ではなく草太くん名言集その19だ。そして俺が刺されそうになったら別の女が庇ってくれるからもうまんたい」

まだ見ぬ原作主人公がこの言葉を聞いたら、きっと血の涙を浮かべてこいつを殺そうとするだろう。

そして実際に庇う女を見て、より一層の憎悪を募らせながらも手を引くのだろう。

アレはそういう男だ。

なんてよしなしごとを考えていると、宵本君も思案顔をしている。今の機波の発言に感じ入るところがあったのだろうか。そんな馬鹿な。

「機波くん？ちよつと、いいかな？」

そこに別クラスの見知らぬ女子が割って入った。

「え、ボクに何か用？」

一瞬で小動物系美少年の皮をかぶる機波。あまりに堂の入った豹変ぶりに僕は舌を巻くばかりだ。

ぶるrrrrるうああ。実際にやってみた。この場の全員から変なものを見る目をされた。死にたい。

「ここではちよつと……だから、ついてきてくれる？」

言葉通りに見知らぬ女子の後についていく機波。

ぐつ、と

去り際に僕たちに向けて握りこぶしの人差し指と中指の間から親指を突き出すあのジェスチャを残す。

皮に隠れきらない邪悪な笑みもセットで。

あの女生徒、結構僕の好みのタイプだったのになあ……。

イッサーでなくとも、軽く殺意を覚えてしまうようだ。

そして機波が女生徒とともに消えた後、

「ストイックで羨ましいな。アイツは」

と、気になる独り言を漏らす宵本君。

「ストイックって機波が？どうして？」

下半身からせり上げる欲望だけで生きているような男だぞ？
節穴なのか、君の眼は？

「ストイックっていうより、達観していると表現すべきか？」

達観？どこが？あそこまで煩惱にまみれた俗物もそうはいないと思
うけど。

「つまりな、俺も今解ったことなんだが、草太には性欲はあっても
所有欲はないんだ。いや、その二つを分けて考えられている、とい
うべきかもな。多分、自然と知っているんだろう。人間を所有する
ことなんか、出来はしないって」

そう言つて、視線を虚空へと移す宵本君。

その表情を見て、何か……目の前の僕の親友に何か、言わなければ
ならないと思つた。

「……所有欲が働かないから誰とも付き合わない。純粹に性欲だけ
で動いているから誰とでもことに至る。確かに辻褄は合うけど、や
っぱりそれは違うよ」

「……論拠は？」

「だってアイツだぜ？」

したり顔で返答する僕。

僕の表情と言葉、どちらがおかしかったのかは解らないが、ハハハと破顔する宵本君。

うん、これでいい。

「それにさ、そういうのは達観とは違うと思う」

「それはどうして？」

宵本君は、呼吸を整えながら問う。

「まず前提として、支配・被支配関係以外でもカップルは成立すると思う」

たまにしかシリアスな脳細胞は使わないから、正しく稼働してるか不安だ。

「そりゃあ上下のない人間関係なんて難しいけどさ、決して理解できない相手の心情を、それでも理解しようとするプロセスには、きっと真摯な誠意があると思う。もし、相手のことをそんな風に思えるなら、その感情は所有欲や性欲の一言で片づけられるものではない。身勝手な願望が入っているかもしれないけど、僕はそう考える」

一息でここまでまくしたてる。

ヤッベ僕もしかして今ものっすごい恥ずかしいこと言ってるんじゃないか！？

……ここまで来たからには最後まで言おう。皿で以って毒を制す、

だ。

「それに、所有欲もそう捨てたものじゃないよ？互いに相手に所有されたがってる人間関係もある。依存なのかもしれないけど、当の本人たちがそれで多幸福感を覚えてるなら、それでいいんじゃない？人間、そうそう強くも正しくも美しくも成れないんだからさ」

夜に布団の中で思い出して悶える級の黒歴史を原罪侵攻形で膿み墮してるなあ、僕。

もうどうにでもなぐれ

「よって、それは“達観”などという高尚なものではなく、思春期にありがちな自己嫌悪とナルシズムに満ちたまがい物の“諦観”であると僕は以下に結論するのである、まる」

照れ隠しをふんだんに取り入れて（そのせいで余計に恥ずかしくなってる）早口で論を閉じる。

宵本君のほうを見つめながら。

その視線の意味を正確に読み取った彼は、くくく、と喉の奥から笑声を漏らし、

「はあ……やってられんな。自分の青臭さを見透かされるってのは」

「そうゆうものだろ？僕ら、今まさに中二なんだし」

賢いつもりで取るに足らないことを考え込んで、ペシミズムやニヒリズムに傾倒し、アイロニーを気取って見せる。足りない脳みそで安っぽい自尊心を満たそうとする。自虐や自己嫌悪なんてのはその最たる例と言えるだろう。

つまり、自分を少しでも上等なものに見せるのに最も手っ取り早いものは何かを批判することであり、批判する相手が自分自身ならば、なおさら賢く正しい自分になった気になれるというわけだ。

まあ、宵本君が上記のようなただの痛いガキだったら、どうぞお好きなだけ黒歴史を量産なさいまし、と放って置く所なのだが、生憎といや喜ばしいことに僕の親友はこの年では考えられないほどの大人である。

そんな彼が何故こうもらしくない行動をするのか？

答えは簡単、春機発動期の雄性生命体の思考を攪乱するものなど、femaleの一択だろうが。

つまり我らがリア充宵本濤君は、幼馴染にして正妻候補有力株の美少女・天堂巳沙希とのことをあれやこれやと思い煩ってその際、『自分が彼女に抱く感情は、結局人間をモノ扱いするような醜悪なものなのだろうか？果たして自分に彼女の笑顔を受け取る資格があるのか……』とかいう実にウザい疑問に行き着き、拳句の果てに女を性欲処理の道具程度にとらえている友人を見て『アレが本来正しい姿なのかもしれない……』なんて血迷った妄念に捕われていたわけだ。

ああもう、ほんっつっつとうにウザい！！！！

いい加減にしるバカ、と脇腹を肘で小突いてやりたい。

何がうつおとしって、このイケメン変なところで真面目だから単なる中二病の『悩んでる俺ってカッコイイ！』ではなく、割と真剣に悩んでしまうところだ。そしてそれが原因で嫁との関係がギクシヤクして、でもなんやかんやで今まで以上に強固な絆で結びつく、

僕の苦し紛れの反撃も、微笑みで返された。

やはり、僕は何をどうしたところでイケメンには勝てないらしい。わかってたことだが。

「なんて言うかお前は、時々同い年に見えないな。年齢詐称してないか？」

ははは、鋭いな君。という言葉は飲み込んだ。

僕がイケメンに対する感情をさらに屈折させたこの日の放課後、黒瀬先生が一人草津へと出張してしまつたがために急遽空いた時間を有効活用するべく、僕は校門へと急いでいた。

最近プライベートな時間がなかなか取れなかつたから今日は古本屋めぐりでもしようか、と比較的軽い足取りで1階への階段を目指していると、向こうからなんか……変なものが歩いてきた。

人間の下半身、積み重なつた段ボールの四角い上半身。スカートを着用していることから察するに女性。

まあ、端的に言えば箱を抱えすぎな女子生徒なのだが。前が見えないだろうに、結構しつかりした足取りでこっちに来る。

(このままでとすれ違つ……なんか、やだな……)
根拠のない不吉を感じていると、やはりというべきなのか、僕の少し前を歩いていた男子が(彼にも悪気はなかつたのだろう)彼女の抱える段ボール箱の角にかすかにぶつかり、目の前の段ボール少女は不可避的にバランスを崩す。ぶつかった男子は気づいたそぶりもなくそのまま行ってしまう。
ぐらり、と段ボールの山がたわみ、そして

間一髪で僕が雪崩を防いでいた。

(ふう……)
いまだ去っていない不吉な予感にもかかわらず軽率な行動をとつた自分への呆れと、惨事を免れたことへの安堵に心の中でため息を漏らす。7:3の割合だ。

「あの……ありがとうございます」

お、段ボールがしゃべった。

「お礼を言われるほどのことじゃ……」

段ボール少女の中（？）の人を確かめて固まる僕。
嫌な予感の正体はこれか。

「……あの？」

矮躯に銀髪、無表情気味な少女・塔城子猫がそこにいた。
原作キャラとのコンタクトだった。

……どうしよう。

原作の内容を変えたくないから、なるべく本編の登場人物とは無関係でいたかったんだが。

ここは速やかにこの場を離れるべきか？

「あの、どうかしました？」

「へあえ!？」

謎な声を上げてしまった!

「さつきから、様子が変わですけど……?」

不審そうな顔の塔城さん。ここで怪しまれるとなおさら不要な関わりが増えていく。

ならばなるべく自然な対処を……自然……。

「な、なんでもない!それよりその荷物ちょっと多すぎるんじゃない

い？半分持つよ」

僕のバカ！ゴミクズ！自然に立ち去れよ！手伝ってどうする！！

「え？私なら大丈夫ですよ？これくらい」

うん知ってる。僕の200倍は力強いよね。でも、

「大丈夫じゃない。こんな量、男でも一人じゃ厳しいよ？」

僕がそれを知っているのは不自然。

それに……こういう場合、大きなお世話と分かっているても手を貸すべきだろうか？

なんていうか、常識的に考えて。

僕は絶対に善良な人間ではないけど、常識ある人間を自称している。だから

「ほら、半分寄越しなよ」

とかお節介なことを口走って。

「……それじゃあ、お願いします」

説得するのは難しいと判断したのか、僕の言葉に従う塔城さん。

自身を過小評価されたことによる不機嫌さを露わに、なんてことはなく、いつも通りの無表情。

そして

「お名前、聞いていいですか？」

無表情のまま、そんなことを言った。

「名前？なんで？」

すこしパニックになりかかる僕。

「名前を知っておかないと、お礼ができないので」

「いやっ、いいよお礼なんて！全然大したことしてないし、寧ろこの程度のことでお礼なんかされたら僕のほうが困る！」

「でも……」

「やめてください！お願いします！！」

最敬礼の姿勢で懇願する僕。どういう立場だ？

しかし、おかげでこちらの思いが伝わったようだ。

「そうですか。わかりました。お礼はしません」

「ありがとうございます。そうしてくれると本当に助かるよ」

何故だか僕がお礼していた。

「ではそれとは別に、お名前を教えてくださいませんか？」

「……なんでさ」

「なんとなくです」

……。
名前を知られるのはまずい。かといってただか名前を教えないのも不自然。理由がなんとなく、ではどう説得していいやらわからないし……偽名使うか？

学校という閉鎖的なコミュニティでは偽名など役に立たないどころか逆効果になりかねないが、塔城さんの性格なら向こうからの接触はほばないと断定できるだろう。それにこう言うてはなんだが、あまり社交的な人格とは言えないし、目立たない僕の情報が勝手に向こうに伝わることもないだろう。あとは僕が彼女との接触到に気を付けさえすれば……よし、いける！！

「僕の名前は『かないみか』っていうんだ」

……。
今まで気づかなかったけど、僕ってひょっとして馬鹿なんじゃないだろうか……。
なんで咄嗟の事とはいえ女性、しかもベテラン声優の名前なんか出てくるんだ？
おわった……。

「年下のお姉さんがいそくなお名前ですね」

な！何故それを！？

つて、ああ、メロンパンナちゃんか……。確かにロールパンナのほうが後に生まれたよな。

目の前の少女はこういふ話もできる人だったのか。意外だ。

「そ、そうなんだよ。僕の親が酔狂でね、姓が同じだったばかりにこんな名前付けてさ。いや、困ったものだよね？男なのに『みか』なんて！」

とにかく誤魔化すぞ。演技なんざしたことないが、ここが勝負の分水嶺だ。

覚醒^{めざ}める！僕の中のなにか！！

「ここだけの話、小さいころは色々といじめられてね……。あだ名なんて『メロンパンナ』以外に『フローレン』『はれぶた』『メカ沢』とかだったし……。僕があんまり他人に名前教えたがらないの、解つただらう？」

全身全霊で辛い過去を背負った少年を演じる。疑うのに罪悪感を覚えるぐらいに。

これでどうだ……！？

「そうだったんですか……。ごめんなさい、無神経なことを聞いてしまつて」

よしーうまくいったようだ。

まあ、あんな経歴を持つ人間に一切の同情も憐憫もない、なんてやつは人間じゃないしな。
しかも相手は原作キャラである。本格的に性格の悪いヒロインなんて誰得ってやつだ。

「大変だったんですね……ヴァニラさん（笑）」

悪魔だこの娘。ああ、今更か。

「あの……普通に呼んで頂けないでしょうか？」

「わかりました、かないみかさん」

「……………」

まあ、そうなるよな。諦めよう。どうやら追及してこない程度には信じてくれたみたいだし。

「それで、塔城さん」

「何故私のことを知っているのですか？かないみかさん」

「そりゃあ君は有名人だからねえ。それで、質問していいかな？」

「何でしょう、かないみかさん」

その語尾気に入ったの？ 唱えられるたびに聖書の一説のごとく僕のHPをガスガス削っていくんだが。

「この荷物、どこへ運ぶの？」

「ああ、言ってますでしたね。オカルト研究部の部室です。部員なので」

＼(^O^)/

コンコンコン

「失礼します」ガチャリ

「お疲れ様、子猫。それで、隣の彼はいったい誰？」

サツ（逃げようとする僕）

ガシツ（眉一つ動かさず捕える塔城さん）

「この人には運ぶのを手伝ってもらったんです。それで名前は

」

イヤイヤ、と首を振る僕を見て、

クスリ、とわずかに、しかし確かに彼女は微笑む。

（神よ……！このドSロリ悪魔に裁きを……ウツ……！頭痛い……）

とかバカやってる僕を尻目に

「『かないみか』さんだそうです」

ああ、言っちゃった……

微妙な空気が漂う。

その何とも言えない沈黙を最初に破ったのは、
リアス・グレモリー眷属の騎士にしてエース、木場 祐斗だった。

「なんだか画伯なお兄さんがいそうな名前だね」

し、知っているのか!!??

何気ない僕の過失がこうまで原作キャラの知らない側面を引き出すとは……。

いや、パラレルワールドだからか？

だとしてもどうしてこんな微妙な部分が……。

なんて、くだらないことを考えて現実逃避する僕を、

「え？蘭乱爛崎伊緒くんでしょ？去年転校してきた」

というリアス・グレモリーの言葉が引き戻した。

「どういうことですか？メロンパン娘さん？」

ジト目で睨む塔城さん。その言い方だとフレームヘイズみたいじゃない？

「な、なんのことやら……人違いでは？」

「いえ、確かに貴方だったわ。知り合いが去年生徒会長してたのよ」

くっ……言い逃れできず……。

「あらあら、どうして偽名なんか使ったのかしら？」

そういつてにつこりと微笑むのは、女王・姫島 朱乃さん。

「悪意があるにはお粗末すぎると思っけど？」

木場先輩のイケメンスマイル。

最早……これまで……。

洗いざらい白状しました。当然原作が云々というところは隠して。いや、その気になれば他の理由をでっちあげることでもできたのだが、その気にならなかった。だってここまで来れば僕が原作と完全に無関係であるのは難しいし、カミングアウトしたうえで行動したほうが原作に与える影響も小さくできると判断したのだ。

あと、黒瀬先生の遊びに付き合うのもいい加減アホ臭いし。
ただ、黒瀬先生のことを暴露した時、

「クローセル!?」「」

「部長、クローセルってあのクローセル様でしょうか!？」

「……他にいないでしょう?名を騙るバカかもしれないけど」

「聞いていた通りのお人柄なら、私たちに秘密にしていたのも頷けますわね……」

「……どうでしょう」

「」

という会話があったのさ。どのセリフを誰が言ったのかは各自適当に補充しておいてくれ。

うちのご主人様はそんな有名だったのだろうか?悪名か高名なのかは知らないが。

いや、彼女たちの言葉からはいちいち『敬遠したい』という雰囲気
が漏れ出していた。

お関わりになりたくない部類の悪魔なのだろう。僕もそれには同意するが。

結果として、僕らの事はグレモリー勢やシトリー勢の知るところとなつた。

これで僕らも行動しやすくなつたし、後ろ暗いところが無くなつてスツキリした。

黒瀬先生には『私の遊びを奪うとは……』とか言われたが。知らん仲間の皆からはよくぞバラしてくれた、という感じのことを言われた。

みんな不条理を感じつつも、主君の命令には背けなかつたようだ。

そして、時々なのだが所属の垣根を越えて模擬戦を行うようになってた。というのも、うちのご主人様は人の才能を見抜く力があるとかで冥界では名伯楽として有名ならしい。それを見込んで弟子入りしようとする方々が多くいたのだが（木場先輩を筆頭に）当の黒瀬先生にその気がなく、ならばと眷属である僕らを試金石にしているというわけだ。

あー、僕らという言葉では語弊があるな。正確には僕を除いたクローセル軍団だ。

いや、ホント皆強すぎるんだ。接近戦ではまともに戦いになるのは木場先輩くらいだし、それでもキュラソーさんやフィーさんは本気出してないし、相性もあるのだろうが上級悪魔であるグレモリー先輩や支取先輩に勝つちやうし……もしかして黒瀬先生って本当に教師としては優秀なのかもしれない。

これが原作にどれほど影響するかはわからない。だけど、悪い影響ではないといいな、と思う。

いや、あるいは、よい影響にしていかなければいけないのかもしれない。

僕の手で。

疾走する思春期のパラノイア（後書き）

中の人ネタが多いな。

原作キャラの性格とか違和感あったらごめんなさい。

口調とか各キャラに対する呼称とか、よくわかってないところも多いので。

Silly Go Round (前書き)

3か月ぶりですね。

マジすいませんでした。人間的に死んでました。

Silly Go Round

イヤホンから注がれる音が鼓膜を揺らし、聴覚神経が脳に音声情報を伝える。

嘶家という人々は偉大だな、とつくづく思う。

オチまですでに知っている筋書きでも、こうして語って聞かされると面白く感じてしまう。

これに飽きることなどあるのだろうか。

黄金週間、なんて表記すると大仰に聞こえるが率直に言えば5月の頭の大連休、僕はジャンボジェット機に乗って空の上だ。しかも行先は海外。だが僕の胸は期待に膨らむことなどなかった。

それはなぜか？

日本語の慣用表現なんだから当たり前というか男の胸が膨らんだらキモいわとかいうことではなく、

これが物見遊山のさいとしーいんぐではなく、はじめての命がけの出張任務おつかいだからであった。

僕が中学2年となって早1か月、新しい生活にもそろそろ慣れて肩の力も抜けてきたころだ。

これといった問題はなく、気兼ねせずに知性の欠けた会話ができる友人もいる。よって

・彼女がいない

・ダメな上司

・アレな家族

・日常的な命の危機

・深夜、わけもなく襲いかかる将来の不安

などといった要素を除けば、僕はいわゆる一つのリア充と言っても過言ではなかった。

まあ、上記の要素を繰り返し口に出してもらえばわかるように、現実と仮想には大きな隔たりがあるが。

それはともかくとして、必然ぼくの黄金週間には、級友たちとの力ラオケ、機波とナンパ、宵本君のデート尾行、突撃！馳尾の晩御飯、姉さんとデートなどなどの予定が入るはずだったのだが、

「私の暇つぶしを奪った罰！とにかく酷い目あって私を楽しませなさい！」

とかクソみたいなことを宣いやがりましたですね。

そういうわけで、僕は今、心臓ドキドキ冷や汗ワクワクの大冒険の真っ最中なのだ。

「イオ殿。召し上がらないのでしたら、そのチェリー拙者が頂いてもよろしいか？」

何故か忍者が隣にいるけど。

てゆーか花京院？

「それでは、今回の任務内容を確認しますぞ」

「yes」

ツェベルン龍皇国とラプトデス七都市同盟の境界に位置する街、エリダナの安ホテルの一室で、僕とキュラソーさんが密かに話す。実は今この瞬間まで任務については教えられていなかったりする。

「依頼は要人警護。対象はこちら」

そう言っただけで彼女は一枚の写真を取り出す。

写真に写っていたのは、白髪の混じった中年の男だった。どこにでも居そうな顔立ちで、重要人物をイメージさせるような風格はあまり感じられない。しかし、間違いなく見たことのある顔だ。

さて誰だったか 答えを出す前に忍びが続く言葉を紡ぐ。

「モルディーン・オージェス・ギユネイ殿下。大国ツェベルンでも5本の指に入る最重要人物です」

正直驚いた。

モルディーン・オージェス・ギユネイ。

ツェベルンの最高権力者である龍皇、その候補をだし、また選出する五つの選皇王家のひとつ、旗のオージェス家の次男として生まれ、今ではオージェス選皇王の後見人であり選皇王軍最高司令官代理。

現龍皇ツエリアルノス？世の意思を委任された全権大使であり、ツエベルンの最高意思決定機関である円卓評議会の一員。

啓示派教会枢機卿会議議長にして啓示派教会独立異端監査官。公爵位と伯爵位を持ち、大司教でもある。

叙勲された勲章は数知れず、皇位継承権第七位の嘘偽りない皇族。実質、この国は彼の人物が動かしているといっても過言ではない。

つまり、VIP中のVIP、セレブリティ中のセレブリティ。

テレビや新聞がある国ならば誰もが知る、世界規模の大人物。

その護衛を僕が任される？冗談にしても笑えない。でも

「冗談じゃ、ないんですよね？」

「当然です」

まあ、クローセル様に担がれている可能性も否認ませぬが。

そう付け加える女忍者。

然うだったらどんなにいいか。だけど、あの人はただの遊び好きではなく、筋金入りの遊び好きなのだ。

あの人外口りはどうせやるならより面白いほうを選ぶ。つまり、冗談のようなことが冗談でないことを。

「護衛期間は明日の午前10時から午後6時まで、そして明後日の正午から午後6時まで。それ以外の時間はあちらで警護するそうです。日のある時間だけなのは幸いですな」

「日中も配下の人たちに頼むべきだと思っるのは僕だけですか？」

当然の疑問にウルフヘアの先輩が答える。

「それなのですが……どうやら猯下は観光目的でこの街を訪れたらしく、外部の者を雇ったのも肩の力を抜くためと仰っています」

「……………どう考えても嘘でしょ、それ」

最近忘れがちではあるが、僕たちは悪魔なのだ。一応。教会のお偉いさんである枢機卿長さまが気軽に頼みごとをしていい相手ではないはずだ。

「というか、今更ながら大丈夫なんですか？この任務」

拙いところしか見つからないのだが。

「当然非公式な来訪ですし、私たちも身分を偽ることになるでしょうな。猯下が私たちをどうこうするということは有り得ない、とクローセル様から伺っています。曰く、あの男は大義のために戦争するほど愚かではない、と」

まあ、いかな枢機卿長といえどその程度の現実が見えていない者に大国の運営は務まるまい。

同時に、利益がらみなら戦争も厭わないとも解釈できるが。

「それに、護衛任務でまだ良かった。もし暗殺であったなら

」

途中で切れた言葉の意味は、僕でもわかる。そしてそれこそが本分である彼女にここまで言わせる理由も。

十二翼将。

枢機卿長お抱えの戦闘集団。世界最高の兵隊。超常の存在と比較しても何ら遜色のない怪物たち。

翼将の低位4名と中位4名までは英雄や超人の内部領域だろう。

しかし、上位4名　　これらは果たして人間と呼んでいいのか？

車椅子の傀儡士、現代の聖者、世界の果てを識る大賢者、そして大陸最強の剣士。

噂に聞く通りならこの一人一人が魔王に匹敵する実力者だ。

信じられないことだが全員人間らしい。

もし枢機卿長猯下を暗殺するのなら四大魔王のすべてを打倒するつもりで取りかからなければならぬ。

人はそれを不可能という。

いや、でも、待てよ　　？

「あの、僕らの護衛中って猯下のそばには翼将はいらっしゃらないわけですよね？」

観光を楽しむためという言を信じるのならそのはずだ。ならば

「すつごく厳しくないですか、この任務？」

わずかな期間とはいえ護衛が怪物からただの悪魔に替わる、敵対勢力が見逃すはずもない。

すさまじく苛烈な攻撃が予想されるが、僕たちにそれをしのぎ切れるのか？

「……そうですね。今回はかりは拙者も完遂する自信が……いや、あるいは」

キュラソーさんは言っている途中で何かに気付いた様子だ。その何かに気付かない僕に、彼女はこう続ける。

「我々が失敗することまでが、クローセル様と枢機卿長猊下の目論見の内なのかもしれない」

僕には意味がよくつかめない。

「それは……どういうことですか？」

「さあ……そこまでは拙者にも量りかねますな。なにせ、あのお一方の謀ですから」

それには大いに同意する。

かたや大国の政治を担う稀代の切れ者。

かたや僕らの道楽主人。

その思考を追跡することなど僕たちごとときには到底不可能だ。

前者と後者でまるで意味合いは違ってくるけど。

などと考えていると、

「ただ、主君の命とあらばこの命、投げ打つことに依存ありませんが」

決意の様なものを口にする彼女。

頼りになるな。

「生き残れたらラッキーくらいに思っておこう……」

反して僕はすでにお通夜会場だったが。

冷静に考えれば、いくらあの享楽上司でも簡単に僕たちを殺すとは思えない。僕たちのことを良く出来た玩具くらいにしか思っていない節があるが、ガムは味が無くなるまで噛む人だ。おそらくまだ僕たちを弄び足りないだろう。よってこの任務で命を落とす確率はそう高くないと思うのだが……

彼奴は限界ギリギリの見極めがうまいのだ。だから絶対に手は抜けない。最悪を想定し、それすら超えた地獄を切り抜ける。それくらいのこと覚悟せねばなるまい。

はぁ……………

「ん、もうこんな時間か」

あの後、様々な状況に対しての打ち合わせを行った。
腕時計を確認すると時針は11を指していた。

夕食は済ませたが、シャワーがまだだ。明日に備えて今夜は早めに
休む予定なので、そろそろ浴びておくべきだろう。

「あの、キュラソー先輩？もうこんな時間ですし、そろそろお開き
に……」

「む。そうですね。予め打ち合わせておくべきことはもう済ませま
したし、それがいいでしょう。イオ殿、先にシャワーを浴びてもら
って構いませんぞ」

???

なんか違和感が……

「あー、どうして時間をずらす必要が……」

そんな必要はないはずだ。はず、だよな？

「えっと、イオ殿？さすがに一緒に入るのは、拙者としても……そ
の……困りますぞ？」

そういつて彼女が見せる少し恥ずかしそうな表情は、新鮮でたいそ
う魅力的なのだが……

「い、一緒！？どうしてそうなるんですか！」

「いや、時間をずらさないとそうなるのは当然で……」

待て。待て待て待て。おかしいぞ？
僕と彼女の間には大きな齟齬が……？
ハッ！

「……もしかして、ですけど」

「は、はい？」

まだ恥ずかしさが抜けきっていないのか、いつもより少し柔らかい対応のキュラソーさん。
しかし僕はそれどころではない。
まさか、まさかだが

「部屋、一つしか借りてなかったり？」

「ええ、そうですが？」

何を当たり前のことを、とでも言いたげな彼女。

そういえばどうしてベッドが二つあるのかと思っていたが、この可能性は考慮していなかった。

「それって、同衾というのでは……？？」

「そうなりますな。しかし任務ですから」

女性の方がここまであっさりしていると、僕の方がおかしいように思えてくる。

いや、確かにこの面子で間違ひなんて起こりようがないんだけど。
それでも……うーん……。

「とりあえず、キュラソーさんが先に入ってください」

「よろしいのですか？では、有り難く」

無事に帰ることができても命の危機かもしれないな。
姉さん、そついつの厳しいから。

ちゅんちゅん、という鳥の声。

どうやらこの国でも朝チユンという言葉は通用するようだ。

まあ、意味は違っているだろうが。

「おはようございます、キュラソーさん」

「おはようございます、イオ殿」

寝起きの僕と、一足先に起きてた彼女。

おそらく彼女の寝巻なのだろう襦袢を着ていて、常より防御力は下がっている。

とんがっていた髪先も、今は垂れてなんだか萎れている。わざわざセットして攻撃的な髪型にしていたようだ。

僕の視線の意味に気付いたのか、彼女は

「……あまりジロジロ見ないでいただきたい」

と照れ臭そうに言っつて髪をセットしだした。

……実は結構かわいい人なのかもしれない。

さてと、僕は今のうちに着替えておくか。上を脱いで、下を脱いで、と。

……なんだか視線を感じるな。この部屋には僕とキュラソーさんしかないけど……。

キュラソーさんは髪をセットしてるし。鏡に向かって。

……まさか、な。

気のせいと結論し着替えを続行。護衛のために必要な装備もチエツクする。うん、完璧。

僕が着替えを終えると、キュラソーさんも髪を整え終わったようだ。目が合う。

すると彼女は顔をやや赤く染めて明後日の方向を見る。

「……………」

なんだその反応……。

アーデーン建築様式で揃えられた閑静な住宅街。その一角にそれはあった。高い壁と麗々しい蔦模様の鉄扉で囲まれた上品な建築物。いかにも貴族が避暑地にでも使いそうな瀟洒な風体。無言で進入する僕たち。示し合わせたように無言で、僕たちを護衛対象のもとに案内する警備員たち。彼らは教会の人間のはずだが、僕たちが悪魔だということを知っているのだろうか。信仰心を押し殺してでも主君に従っているのなら大したプロ意識だ、と思う。敬虔な信者としては失格かもしれないが。そんな風に歩いて行った先、櫛の扉の向こうにその男はいた。

「キュラソー君、そして蘭乱爛崎伊緒君だね？遠路はるばるご苦労様だ。はじめまして、モルディーン・オージエス・ギユネイだよ」

出会って早々にまるで堅苦しさを感ぜさせない挨拶に機先を制され、僕たちは大急ぎで第一種最敬礼を行おうとするが

「やめたまえ。私は無意味を好まない人間だ。よって君たちの事もイオ君、キュラソー君と呼ばせてもらうよ？家名で呼び合うというのは実に無意味な年寄りの習慣だからね」

という枢機卿長様の言葉に止められてしまう。王族に対して敬意を表すことさえ無意味と言つてのけてしまうのは、目の前の中年男が完全に実力だけで今の地位にいることを示唆していた。一見これといった特徴のない中年男のように見えるが、実際に相對してみると解る。今この空間で最も力を持っているのはこの男だと。熟練の警備員たちでも百戦錬磨の忍びの者でもなく。僕にはまるで分らない。こいつは本当にただの人間なのだろうか。千年を超えて生きた竜種と言われた方がまだ納得できる。一体この男の正体は

「さて、それじゃあ早速、愉快的観光旅行と洒落込もうじゃないか。護衛はこの二人だけでいいから他の者は待機していたまえ。勝手についてきたら二度とこの国で職に就けなくなるよ？」

頭を抱えつつそれでも言うことを聞かない部下の人たち………

ただの遊び人のおっさんかもしれない、という疑惑が僕の中で急速に膨れ上がっていた。

色鮮やかな紙吹雪が町中を気流に乗って舞い踊る、陽気で賑やかなエリダナの大通り。今日から数日間、祝祭でこの街はこんな感じなのだろう。で、そんな人混みの中僕ら3人はこのエリダナ祭を見て回っているのだが、

「こう人が多くては警戒のしようがありません！特殊装甲車の中からご覧になることを進言します！！」

「私は護送犯になるためにここに来たのではなく、観光をしに来たのだよ」

さすがのキュラソーさんも参っているようだ。それもそうか。わざわざ人の多そうな所に行きたがるんだもんなあ、猥下。

で、一方の僕は何をしているかというと、

「エリダナ祭は、皇都の建国祭や聖誕祭には及ばないものの皇国八大祝祭の一つに数えられています」

祭の解説役をしているというわけだ。護衛として周囲への警戒も怠ってはいないが、あくまでこれは観光。ただ守るだけではなく楽しませなければならぬというわけで。本来外国人である僕が演じる役割ではないと思うが。

「この祭りの由来はこうです。680年前に騎馬民族にこの街が占拠されたとき、エリダナという一人の女性歌手が立ち上がりました。彼女は歌いながら民衆を扇動し、占拠された砦の中へ楽隊を装って

行進。侵入に成功した民衆たちは隠していた剣を抜き、騎馬民族へと襲い掛かりました。無事に街をとり戻した人々はこの街に“歌乙女の街・エリダナ”と名付けたそうです」

昨晚暗記してきた内容をそのまま語る僕。気分は一夜漬け。

「今聞こえてくるのが故事の際にエリダナが歌ったとされるものですね」

僕の言葉を聞いて、耳を澄ませる枢機卿長猊下。僕とキュラソーさんは勿論それどころではない。

私が壊れても、あなたが壊れても

運命の糸車は皮肉に笑っている

約束は海の底で待っていて

空を懐かしむ芋虫のように

世界を夢見て孵化しない雛鳥のように

あなたとなら煉獄も天上の褥

「なんだか、ヴァーレンハイトを思い出す陳腐な詩だね」

「詩はあまり嗜みませんが、一説によると元の唄はほとんど失われており、ジグムント・ヴァーレンハイトが大幅に改作したとかいう話ですから、猊下の仰ることはもっともかと」

そういえば父さんの書齋に『遺稿詩生前葬』とかいう詩集があつて読んでみたけど、よくわからなかったな。深遠なような無味乾燥なような、僕のような俗人には口を出せない世界であることだけはよ

くわかったが。

「しかし騙し討ちが由来の街、ね。私にお似合いじゃないか」

自嘲気味な独り言を愛想笑いで受け流す。こんな時、僕なんか言えることは何もないのだ。

モルデインには双子の兄がいた。その兄との権力闘争を恐れて僧職についたのだろう。

しかし、その兄は今、もういない。事故死した。

そして目の前の男はこの国で最高の権力を持っている。

政治というのはそういうものなのだろう。だが、枢機卿長は果たして

と、その時、僕たちの目の前を娘だろう少女を肩車した男が通り過ぎた。少女はアイスクリームを食べながら父親の肩の上で大道芸に無邪気な歓声を上げていた。

「子供が幸せそうにお菓子を食べて、無邪気に笑える限り、私はこの世界を肯定する」

彼も同じものを見ていたのだろう、枢機卿長の独白が僕たちを貫く。

「そのために、私は騙し裏切り血を流し、殺してきた。そしてこれからもそうしていくだろう。それで足りないならば、上の合理性へ。まだ足りないならば、さらに上の合理性へ」

その眼は真っ直ぐだった。

その言葉は、そのまま信じていいものではないだろう。彼自身が言っていた通り、騙し裏切りの権謀術数こそが枢機卿長の領分なのだから。

しかし、だ。この男は強力な信念を持っている、それだけは僕にもわかった。苦しみを、弱さを踏み越えた先に何かを為そうとしている。

もしそこに、先ほどの言葉がほんの一部でも真実として存在するならば、たとえ敵対したとしても僕はこの男を憎むことはできない。

「……狛下は、僕たち悪魔や墮天使のことをどうお考えなのですか？このような護衛に僕たちの様な悪魔を用いることと言い、神の使徒としては破格の振る舞いですよね？」

敵であつて欲しくないという願望が、口をついて出た。

枢機卿長は何でもない事のように答える。

「墮天使や悪魔は人間の敵だ、というものが多数であるが、それはおおむね正しい。人間は異種族とついぞ手を取り合つたことはないし、真の融和や理解など人間同士でもあり得ない。みんな仲良く、なんていうのは理想論ですらない夢物語だ」

身構える僕。しかし

「だが、たとえ絶対的な断絶があろうとも、知性があるのなら棲み分けて共存することは可能だ。君なら良くわかつているように、天使も墮天使も悪魔も、ただ個体の力が優れているだけで人間と本質的には変わらない。傲慢さでも卑屈さでも小賢しさでも浅はかさでもね。その処がまだ解っていないものが多いが」

ふう、と僅かながら力を抜いてしまう。それだけ恐れていたのか。

「一線を引いて互いに利用しあい、時には卓を囲んで茶杯を交わす。実現できるのならそういった関係性の方が遥かに有意義で利益につ

ながる。君たちを滅ぼす必要なんて、今のところどこにもない」

滅ぼす、ね。

実際、悪魔と人類が全面戦争すれば、まず間違いなく勝つのは人類だろう。

聖書に登場する3勢力は先の大戦で大きく弱体化しているし、その反面、人類はこの200年ほどで飛躍的に勢力を拡大した。地球を滅ぼせる威力の兵器をいくらでも量産できてしまうくらいには。

しかし、かりにも“神の敵対者”に対してこの余裕だ。

まさかとは思うが、この男

「まあ、人類の繁栄なんて長く見積もってもあと200年も続かないだろうけどね。種の寿命だよ。だからみんな仲良く、なんてお題目が各勢力の首脳陣ではやっているのさ。たかだか数百年沈黙を保てば再び大地の覇権を巡って争うことができるのだからね」

朝目を覚まして初めて会った相手に挨拶するような感じでモルディーンが言う。

人類が滅ぶことをまるで当たり前のことのように。

その言葉に何か返事をしようとした瞬間、

音が消えた。

祭を賑やかす笛の音色も道行く大人たちの雑踏も子供たちの歓声も何もかもが、いつの間にか消えていた。

そんな中、ザリ、という足音が静寂を壊す。

「このようなものが護衛とは、嘗められたものだ」

瞬間、キュラソーさんが神速で反応し飛来した短剣を叩き落とす。僕は辺りを見回す。いつの間にか周囲の観光客たちが一人もいなくなつて、その代わりに白い外套を羽織つた何者かが僕たちを取り囲んでいる。

ただものではない。全員が死線を潜り抜けた修羅たち。僕に圧倒的に不足している経験値を持つもの。

「我等、法王庁の誇る聖堂騎士。神の領地に土足で踏み入った悪魔共と逆徒モルディーンを即座に誅戮する」

連中はそう言つて、僕らに攻撃を仕掛けてきた。

僕とキュラソーさんは目も合わせずに連携する。経験豊富で突然の事態に反応できるキュラソーさんは枢機卿長のそばでディフェンス。僕はキュラソーさんと枢機卿長を炎で囲んで壁にしつつ、敵勢力を焼き尽くす。

「消し炭になるといいんじゃないかな!？」

僕は右手から、敵に向かって高出力高密度の炎を噴射。

ゴウ、と音を立てて迫る炎に敵の一人が

「セイクリッド・ギディストーン・フィールド神器、『守りの天蓋』!!!」

と叫び、彼らの周りに球体上の透明な壁が出現。僕の炎をいったん堰き止めるが、

「なにいつ!?!」

炎はたやすく障壁を燃やして内部へ侵入。ブライマル・マリス『蛇王の復活』の炎はすべてを燃やす。どんなものであれただの燃料ではない。よって、敵の防御障壁持ちはかませ犬丸出しの最期を遂げた。その他の敵も何とか脱出には成功したが、すでに体の一部に火が回っているため余命は20秒といったところだろう。

「あああああつ!?!」

炎を飛び越えていくらかの敵が、銃や剣で僕たちに攻撃を試みんとするが、

バチバチバチツ

と音を立ててキュラソーさんから放たれた数条の《雷霆鞭》に撃ち落される。予備動作なし、見てからでは回避不能の100万ボルトの雷撃の鞭。びっくりするほどの初見殺しだ。

全身の血液が沸騰し、プスプスと煙を上げる死骸が地面に転がる。

そしてそろそろ、はじめに負った種火が十分に広がるころだ。大した魔力も神力も持たないただの達人では僕の炎にいささかの抵抗もできない。すでに殆どの者が手足の一部を焼き尽くされて戦闘不能

に陥っている。

「キュラソー君、イオ君、誰の命令か吐かせるから一人生かしておいてくれないか」

という枢機卿長の有り難いお言葉に、リーダーシップをとっていた一人から炎を消す。

その他はキュラソーさんが《曝轟蹂躪舞》の秒速8750mの爆風で人体部品にバラしていたが。

信仰というものは凄まじいもので、これだけの戦力の違いを見せつけられてもなおこの聖堂騎士は戦意を失っていないかった。

「このようなものたちが暗殺者とは、嘗められたものだ？」

だからつい嫌味をきいてしまう。錬度が低いのは事実だ。

何かうるさく叫びそうだった彼を、キュラソーさんが忍術《安痺眠》で作り出した麻醉針を首に突き刺し、気絶させる。

「なんだか、やけに呆気ないですね？」

教会の兵隊というからイスカリオテ機関みたいなのを想像していたのだが、嬉しい誤算だ。

そこまで考えて気づく。あ、このセリフフラグだ、と。そしてやはり

ボムッ

僕の思考に相槌を打つようリーダーの男の頭が風船のように爆裂する。枢機卿長を庇うキュラソーさん。まともに血肉を全身に浴びる僕。汚っ。

というか口の中に何か入った。吐き出す。ぺっ。舌だった。

「……男とフレンチキス……だと……？しかも死体……」

おえ。

眼球や脳細胞とかの方がまだましだ。

なんて、くだらないことを考えていると、

「使えぬ連中だ」

またも見知らぬ声。見ると黒づくめの男女が立っていた。といても、高校生探偵を小学生探偵に変えてしまいそんな風貌ではなく、和風趣味な黒装束。というか、忍者？

「貴様ら、甲賀の者達か!？」

キュラソーさんが反応しているということは、やはりなのか。じゃばにーずNINJAは諸外国でも大人気なようだ。

「そういう貴様は何者だ？先ほどの術は《雷霆鞭》に《曝轟蹂躪舞》だな？」

質問に質問を返す男。僕が手首愛好家やルックスもイケメンなカウボーイだったら説教しているところだ。

しかし、どうやらキュラソーさんは甲賀忍だったらしい。有名な里の出だと聞いてはいたが、心躍るな。

「久しいな、常久と熔の娘よ」

敵の中から一人の男が前に出る。

熟練、という言葉の例として辞書で挙げられそうな壮年の忍者。さっきの男と違いキュラソーさんのことを知っているようだ。

「十一代目、甲賀真伝ッ！」

あふれる敵意を隠そうともせず、キュラソーさんが叫ぶ。その姿は全く僕の知る彼女らしくなかった。

しかし敵の忍びたちは彼女の敵意など歯牙にもかけない。

「常久というと、8年前に肅清された男ですか？妻ともども娘も殺されているはずですが」

「死んだはずの者が生きているなど、我らの世界ではまことによくあることよ。それよりも今この場で重要となるのは、任務の達成が困難である、ということだ」

「そんな！相手はたかだか二人、しかも一人は里を抜けた落伍者ですよ？」

「その落伍者がおぬしより強いと言っておるのだ。この8年で如何様に化けたか知らぬが、儂でも簡単には勝てぬ力を身につけおった」
落伍者、という言葉に反応し、きつく歯を噛み締めるキュラソーさん。

それより、何故だか敵の会話の中で僕のことは一切触れられてないんだけど……

存在が謙虚過ぎないか、僕？

「しかもあ奴はこちらのやり方を熟知しておるだろう。勝てるは勝てるに違いないが、時間切れで標的には逃げられてしまう。ここは退いて、明日再度攻める」

「しかし！この場を逃せば……」

「その心配は無用だ」

議論に決着がついたらしい忍者たちは去ろうとするが、

「逃すと思うか？」

バチバチバチツと敵意をスパークとして具体的に表現するキュラソーさん。

それに対して、首領に楯突いていた男が何の合図もなしに飛び込んできた。

キュラソーさんと刃を交わした瞬間、鼓膜がはじけ飛ぶほどの轟音を立てて男の体が爆発した。

《曝轟蹂躪舞》を自身の肉体に作用させた自爆技。かろうじてキュラソーさんは難を逃れたが、すでに連中は影も形もなく、周囲には祭りの雑踏が戻っていた。

「……………」

僕は恐ろしくなった。つい先ほどまで作戦に抗議しながらも、決定すれば躊躇なくその命を捨てられる精神性。恐れだとか、迷いだとか

か、そういった人間からは切り離せないはずの弱点が存在しない相手。

そんな奴らに命を狙われて、僕は生き残れるのだろうか？

答えは出ない。出したくない。

そんな時

「とりあえず、熱々のウルク料理でも食べに行かないか？」

今回の護衛対象たごいが空気読まないにも程がある発言を繰り返した。

c a n t a p e r m e (後書き)

ナデシコだったり幻想水滸伝だったり

てか原作名され竜にすべきじゃねー?とか思った。

t h e b a t t l e o f y o u r s o u l

護衛任務初日、なんとか敵勢力の襲撃をやり過ごした夜。ホテルに戻ってきた僕たちの間にはどこか緊張感のある空気が流れていた。明日、再び現れるだろう甲賀の刺客たちに関する情報を、キュラソーさんが僕に伝える。その作業が終わり、本当なら翌日に備えて休憩を取らなければいけない時間だが、この空気がそれを僕たちにさせない。

「……………」

この重い空気の原因は、やはりあれか。甲賀忍が敵に回ったことか。特に甲賀真伝と呼ばれていた男、なんだか因縁がありそうな相手だったし。

「イ才殿」

そんな思案を彼女が突然声を発してさえぎった。

「は、はいっ！なんででしょう？」

みっともない僕。

「イ才殿は……訊かないのですか？」

訊く。目的語はおそらくこの場合……

「昼間の連中との関係、ですか？」

無言で首肯する彼女。

重苦しい動作。思いつめたような表情。

訊かれたがっているのだろうか？

詳しくは知らないが、彼女が抱えているものは、きっと苦痛を伴う大変な重さを持つものなのだろう。

一人で抱え込んで歩くには、度が過ぎるほどに。
だけど

「訊きません」

僕にしては珍しく、きっぱりとそう答えた。

彼女の顔には、安堵とも悲嘆ともつかない色が浮かんでいる。

やはり訊いて欲しかったのか。そうだろう。辛いものな、一人で抱え込むのは。

それでも、僕は彼女を支えない。助けない。

「だって、大事なことなんでしょう？」

瞬間。

彼女の瞳に、意志の、あるいは諦念の光が宿る。

やはり、一時の気の迷いだったようだ。普段通りの鋭利な力が彼女の表情に戻る。

唇の端に、自嘲気な笑みを僅かに残して。

重荷を一人で背負い込むのは、とても苦しい。そしてそれに耐え続けるのは、さらに苦しい。

おまけにその苦しみには、多くの場合大した意味も生産性もない。折れて、曲がって、誰かに押し付けて、そうしたほうが誰にとつてもプラスになるのだ。善悪は無く、美醜もなく、ただ強弱と彼我、生死があるだけの世の中で、誠実であろうとすればするだけ馬鹿を見ることは科学的に確実なのだから。

だけど、耐えがたきを耐える、そこに意味はなくとも、価値はある。今までずっと、その苦しみに耐え続けてきたのだから、相当に強い意志を要しただろう。

その意志を裏切ることに、僕は強い抵抗を感じてしまう。それが人の愚かさゆえだとしても、だ。

今ここで僕に彼らとの因縁を吐露してしまえば、それは戦う自己を正当化し、他人に理解と助力を求めると言いつくとなってしまう。今まで孤独に戦ってきた意志を、本人の手で汚すような真似だけは看過できない。

「イオ殿」

「はい、なんでしょう?」

「お見苦しいところをお見せしました」

「いえ、先輩相手に知ったような口をきいて、こちらこそすみませ
ん」

すっかりいつも通りなやり取りだが、決意を秘めた彼女の横顔を見た僕は一抹の不安を覚えた。

そして昼間の戦いを思い出す。躊躇なく逡巡なく、命を捨てて見せた男の姿を。

「……時に、先輩？」

「む、何ですかな」

「明日、勝てると思いますか？」

あまりに率直すぎる問い。それに彼女はこう答える。

「……苦しい戦いとなるでしょうな。しかし、拙者は勤めを全うするだけです。身命を賭しても」

僕の危惧が現実となった言葉。

自分の命を軽く扱う行動、それこそ僕が世界で二番目に忌み嫌う事物だ。

ちなみに一番目は自分が死ぬこと。

だから僕は、思ってもいないことを言う。

「……死ぬのは、駄目ですよ……何があるつと、絶対」

「しかし、忍びにとって任務は絶対……」

「貴女はもう忍びじゃない」

僕の言葉に、彼女は傷ついたようだ。事情は知らないが、抜け忍だが忍者にプライドを持っているらしい。複雑なことだ。なんにせよ、彼女の動揺をこちらに都合の良いものとするために、反論する前に口撃を畳み掛ける。

目標は彼女の中の自己犠牲を叩きのめすことだ。

「貴女は騎士です。それもクローセル様の騎士。あの人が、あの人の人生にちよっかいかけてその結果を見物するのが趣味の正真正銘の悪魔が、命を落としながらも任務を果たした、なんて美談を求めてると思いますか？ 違うでしょう。むしろ、これ乗り越えてより一層面白い成長をすることこそがあの人の企みに決まっています。主君に忠義を尽くすなら、任務を果たしたうえで生き残らなきゃいけないんですよ」

「しかし、そうでもしなければ奴らには
「
解っている。まともになりあって勝てる相手じゃない。だったら

「キュラソーさんは敵の首魁だけを相手してください。他はすべて僕が潰します」

狂気の沙汰で裏を搔くしかないじゃないか。

「
ツ！！そんな、それこそ自殺行為だ！！」

「いいえ、僕は自分のためなら家族だって恋人だって殺しますが、自殺だけはしません。勝算があるんですよ」

半分真実で半分虚偽だ。どちらがどちらかは黙秘させてもらうが。

余りにシャクシャクな僕の態度に、半信半疑ながらひとまず落ち着くキュラソーさん。

「突き放したかと思えば手を差し伸べ、否定しておきながら今度は自分が自己犠牲。本当に、言動と行動がまるで一致しないのですな、貴方は」

そう言って冷めた目を投げかけてくる。

僕が間違いだらけなのは釈明のしようもないが、一応一貫した意見は持っている、と思う。

「死ぬ気はありませんし、手を差し伸べたつもりもありません。志半ばで誰かに理解してもらいたがるのは弱さですが、成就のために誰かを利用するのは強かさですから。それに、後輩というのは、露払い・雑用・貧乏くじを先輩に押し付けられるものでしょうか？今回のこれも、ただそれだけのことですよ」

明日には忘れて、全然違うことを言っているであろうテキトーな言葉。

中身なんてあるはずがない。

でも、信条なんてどうでもいい。重要なのは人を動かせるかどうかだ。

「だから、全部終わったら話してください。先輩の自慢話なら、後輩も聞きたいですし」

訊かない、とか言ったそばからこれである。

キュラソーさんの言うとおり、言行不一致こそが僕だ。
他人のプライバシーを侵害するのは最高に魅力的な娯楽だから。
そんな覗き魔がごとき言葉を、一体どう好意的に解釈したのか、彼
女はうっすらと微笑んで

「そう……ですね。そのときは、私の本名も教えましょうか」

！？なんか口調が柔らかくなってる！
というか、

「キュラソーって偽名だったんですか!？」

「本名なわけがないでしょう。配下になった時にクローセル様から
頂いた名前です」

ちゃんと呼んでくれたことは有りませんけど……
と、彼女はひとりごちた。

今日は遠くからのお客とお茶会をすることになった。

猊下は僕らに会うなりそう言って、祭りの喧騒から離れた場所へと僕らを案内した。

着いた先は、ラフォレス教会。

随分前に打ち捨てられ、人の寄り付かない廃教会であるはずなのに、内装は荘厳で手入れが行き届いている。

悪魔である僕たちは本来教会に近づくことなどできないのだが、枢機卿長直々にパスを頂いたため、特に痛みも披露もなく建物の中に進入できた。

金を積みれば免罪符も買える宗教だからねえ。今はそんなこととしてないけど。

貴賓用の礼拝堂、その大銀十字のもとで枢機卿長は立ち止まる。

「お客はまだ到着しないようだ」

お客、とは誰の事だろう。

まさか、本当にただのお茶会ということはないだろうから、どこかの国の要人か？

この非公式な観光旅行のそもそもの狙いが秘密の会談にあり、暗殺者たちはそれを阻止するためにモルディーンの命を狙う、と考えるのが自然か。

この小奇麗な廃教会の存在も、要人の密談のため？

いや、猊下の昨日の行動を見る限り、本当に単なる遊び、という線も捨てられないが。

「そうそう、一度悪魔に逢ったら訊いてみたかったのだけど」

客人が来るまでの暇つぶしだろうか、枢機卿長が僕に話しかけてくる。

「神について、君はどう考えている？」

悪魔にそれを聞くのか。

「ああ、今更だけど私の立場など考えなくていい。思っさま流神の言葉を吐いてくれたまえ」

つくづく、破格の聖職者だ。

まあ、依頼人の意向には沿うべきだろう。

「……神が完全な存在であるのなら、不完全な人間の論理でその是非を量ることがそもそも間違いなんでしょうが……」

「……全知全能で無限の慈愛を持つ絶対者、なんてのが創ったにしては、この世界は理不尽なことが多すぎる、と思います。ああ、勿論、神自体は実在するのでしょうか。悪魔がいるのですから」

前世の記憶から神の死を知っている僕が言つと、非常に胡散臭いセリフだ。

ああ、ある意味では僕はこの目で神の奇跡を体験した人間なわけか。本当の神にも直接面識があるし。

まあ、あんなものが衆生を救ってくれるだなんて思わないけど。本人も自分のことを神だ、とは言わなかったしね。

「ふむ、予想していたより随分とおとなしい考えなのだね？それでは最近の若者の一般論だ」

ご期待に沿えなかったようだ。

「悪魔、とはいっても数か月前まではまさしく最近の若者でしたので」

「なるほど、道理だ。しかしまあ、その通りだよ。

神は不完全であるか、慈悲を持たない存在だろう」

余りにあっさりとして、啓示派教会の頭首は、神を否定した。

流石の僕も驚きを隠せない。

やはり、知っているのか。

聖書の神ヤハウェの死を。

絶対者の不在を。

枢機卿長は言葉を続ける。

「だが、欺瞞なくして人は生きられない。人の視界はこの宇宙を識るにはあまりに小さく、真実には到底手が届かない。答えの出ない問いを、それでも自分自身に問い続けることは、人には過酷すぎる闘いだ」

「なればこそ、より大きな集団を幸福に導きやすい行動を奨励し、

そこに疑いを差し挟むことをよしとしない。“教え”とは、そういうものだ」

それは僕に向けた言葉だったかもしれないし、キュラソーさんに向けた言葉だったかもしれないし、

あるいはモルデューン自身に向けた言葉だったかもしれないかった。

なんにせよ、その言葉はもったもな内容で、よく理解できる。

自分の行動には責任を持たなければいけない、というが、そもそも自分の行動が及ぼす効果について正しく把握できる人間がいるだろうか？

善くあるう、正しくあるうとしても、それは人が判断できることを超えている。

ならば、統計的に多くを幸せにしやすい姿勢を美德として刷り込むほうが合理的だ。

その正しさを保証する概念が“神”というわけだ。

思考停止を促し人の自律を妨げるものと言えど、これがなければ社会自体が成立しない。

そんなことは解っている。だけど

「それだけ、でしょうか」

分をわきまえず、反論めいたものを口にする。

「疑いを棄てないことには……本当に、不毛な苦しみしかないのでしょうか？」

枢機卿長は少し驚いたようだが、すぐに穏やかな笑みを浮かべ、神

託を告げる竜のように言った。

「それは人の営みの中で、最も意味がなく、同時に最も尊い愚行だ」
報われた、わけはないけれど。救われた、はずもないけれど。
その言葉に僕は、何かを感じた。

「小賢しく合理的に生きるだけの凡俗ならば掃いて捨てるほどいるけれど、そんな者には何かを為すことは出来ない。君たちの国の言葉にあるように、“正気にては大業ならず”ということさ」

「満ち足りた人生を擲ってでも君が何かに手を伸ばす、というのなら……」

「どうだい？私と一緒に来る気はないかな？」

「……予想外すぎる。」

「そんな、僕なんかを？だって、僕は弱くて頭も回らなくて……」

「かもしれないね。この先君が成長したとしても、今の翼将を一人でも超えられるとは思わない。しかし、その必要はない」

枢機卿長が僕に向ける視線はこれまでにないほど楽しげだ。

「どづいづ………ことですか？」

「君には君にしかない特異性がある、ということだよ。案外、自分では気づかないかもしれないけどね」

そう言われても、僕には何のことやらわからない。

僕の『プライマル・マリス蛇王の復活』は、黒瀬先生曰く“正体不明の新種神器”らしいが（本当はどうだか……）、それに破壊や戦闘以外の意味を見つめることは難しい。

そもそも、セイクリッド・ギア神器を他人に移す技術が存在する以上、持っているだけで使いこなせていない僕に価値はない。

他に、特異性、というと

「まあ、今すぐ返事をくれなくていい。いつでも気が向いたときに声をかけてほしい。君に見合った待遇で歓迎しよう」

だからその僕に見合う待遇がどの程度か分からないんですが……。

と、その時廃教会の門がギイと音を立てて開いた。

「どうやら、お客人が到着なされたようですな」

ここに来て初めてキュラソーさんが口を開く。

迷いのない彼女には僕と枢機卿長のような会話は必要ないのだ。

現れた来訪者の顔は、やはり僕の見覚えがある人間だった。

「アズ・ビータ下院議員、ですな」

この大陸の覇権を二分する経済大国のうちのひとつ、ラプトデス都市同盟。

もう一方の経済大国である、ツェベルン龍皇国の唯一の友好国にして歴史的仇敵である。

その七都市最高議会議長カイ・クヨウ議員の腹心のひとりが、アズ・

ピータ議員であるとされる。

いよいよもって、ただのお茶会ではありえなくなってきた……。

「お客は無事に到着した。君たちは外の警備をしなさい」

と、枢機卿長が言う。

聞けば、何でもこの廃教会は翼将次席の大賢者が施した結界に守られているらしく、正攻法でも搦め手でもそう易々とは突破できないのだそうだ。

そして正門以外に入口もない。

護衛が二人しかいない、という状況でも一応何とかするには何となる拠点、というわけだ。

そして、二人して門番をして、暇つぶしのためにしりとりをしながら（僕は“り”攻めを敢行。しかしキュラソーさんの“む”攻めの抵抗にあい、決着はつかず。）周囲を警戒していた、そんなとき

ピ、キ

と俄かに空気が硬度を増し、僕たちの目の前におよそ二十時間ぶりに彼らが姿を現した。

そのうちの一人、壮年の男を睨みつけ、キュラソーさんは墨染めの短刀・夜鴉よがしすを握る右の五指に力を入れる。

「征いってください」

隣の彼女に僕はただ一言、つぶやく。

彼女はただ無言で、僕に背を向けて走り出す。あの男に向かって。

「この小娘は儂が相手をする。お前たちは今すぐに務めを果たせ！」

甲賀真伝がそう指示し、配下の忍びたちが追従する。

まあ、当然か。明らかに戦闘力で劣る僕が最も重要なポジションを守っているのだし。

速攻で突き崩そうとするのが正解。

こちらの狙いを疑いこそすれ、明白な愚を犯したこの機を逃すはずもない。

「ここを通りたければ、僕を殺してからにするんだな！」

久しぶりの暴力描写だ。
バトルパート

s a l v a n o s (前書き)

捏造、妄想だらけです。

作者はアホなのでいろいろあり得ねー、と思われませんが
ご容赦を

敵の首魁とその他を見事分断できた。

ボスキャラはキュラソーさんに任せるとして、雑魚軍団は僕が死ぬ気でつぶさなければ。

「いつちよここいらで、今まで」と言っても2、3か月だがの修行の成果でもお披露目してみるか。

「少しばかりの解説が必要になるが、なるべく簡潔に済ませよう。なぜならそれを要約すると、僕は無能である、の悲しきSVCの一文で済んでしまうからだ。」

「僕自身、あまり語りたい事柄ではない。だからなるべく、読み飛ばしてほしい。」

「まず、人外の化け物の戦いというものがどういうものか、そこから始めよう。」

黒瀬先生曰く、勝敗を決する最も明快な要素とは迅さである、と。破壊力は武装や結束によっていくらでも上昇させられ、逆に防御力は常に破壊力に劣ってしまう。

つまり相手より先にこちらの一撃必殺をお見舞いして試合終了、という戦術が究極なのだ。

そして、これも黒瀬先生の談だが、悪魔も天使も墮天使も、体の構造や組成は人間と同じ、なのだそうだ。

超合金でできてるわけでも、呪いでできてるわけでもなく。ただ、魔力や神力で身体を強化しているから地力に大きな差がある

だけらしい。

つまり、魔力で人体を超スピードで動かすことが基礎にして奥義というわけなのだが、

ではそのためには、魔力で一体何を強化すればいいのか？

答えは

everything^{なにかも}

例えば速く走るためには最低でも足の筋肉を強化しなければいけないし、足の筋肉に十分なエネルギーを与えるためには酸素と栄養を高速で伝えるために血流を強化しなければいけない。化学反応を起こしてエネルギーを取り出す速度も強化しなければいけないだろう。魔力はエネルギーになりうるが、何もかもを魔力に依存するのは非効率的で、それでは遅い。そもそも、人間の神経系の情報伝達はナトリウムイオンとカリウムイオンの反応で進行するのだが、その速度は精々秒速30から120メートルだ。思った以上に人間というのはとろくさい生物だということ。必然、高速で運動するためには身体のあるゆるものを魔力で加速させなければならず、言ってみれば体内の時間を加速させるようなものだ。

さらに物体の運動速度を2倍にするとそのエネルギーは4倍になる。つまり均等に加速させるだけではあつという間に肉体が崩壊してしまふ、というわけだ。これを補うためには恒常性維持機能や全身の耐久性を特別に強化してやる必要がある。人間の脳なんかは急加速や急減速するだけで慣性でぶっ潰れるからな。

ええとつまり、初歩の初歩の割には難易度が高い、ということを知ってほしい。

もつとも、才能があるものなら無意識にこなすらしいが（クローゼ

ル配下では僕以外はみんなそう)。

で、ぼくなんだが。

当然のように

出来ない。

.....。

そもそも、魔力が中の下くらいしかなく、その上魔力の精密操作が暴力的にへたくそなのだそう。才能ないから、だってさ。どうしろと。

「いや、でも努力次第では、というのがセオリーでは？」

と訊いてみたさ。するとあの悪魔はこう答えた。

「努力が結実するのが才能でなくてなんなの？」

で、ですよー.....。

反論の余地が1ピコグラムも見つからない正論.....。

努力すればだれでも報われるんだったら、誰も努力を惜しまない。

一見非才だけど尋常ならざる努力と根性で成功した、という人は、要はそういうタイプの天才だったというだけのことなのだろう。

イッセーやサイラオーグなんか、なんだかんだで才能の塊だったということか。

あ、こんなことしている間に忍者たちが襲い掛かってきた。空気嫁。

続きはバトリながら話すとしよう。

まずは

「『ステロイド』発動。5倍に設定」

僕のスピードが魔力で強化され5倍になる。

影のように飛び跳ねまわる忍者たちについていけるくらいの速度だ。

ん？

出来ないんじゃないのか？

こんな僕にも取り柄の一つくらいはあった、というわけだ。

どうも、僕の生命力・回復力は悪魔としてみても常軌を逸しているほど、らしい。

しかもそれに僕の魔力が消費されている様子もない。

この不思議現象の原因は、僕の神器『蛇王ブライマル・マリスの復活』にある、と黒瀬先生は考えを述べた。

なんでも、蛇は生命や不死の象徴として扱われることが多いらしく、正体は不明だが（本当はどうだか）『蛇王』の名を冠する神器ならそのような特性を持っていても不思議ではない、とかなんとか。

その数少ない僕の（というか神器の）長所を活かす方法を黒瀬先生は教えてくれた。

僕の弱点、魔力不足と運用下手を克服する手段。

ひとつは、生命力を魔力の代用とする術式。まあ、これは退魔士スレイヤーや気功師など、魔力を持たずに人外と渡り合う力を持つ人間なんかがよくやることで、方法としてはすでに確立されたものらしい。

ここでも僕はその非才さをいかに発揮し、生命力の扱いは酷い

の一言に尽きたが。

もうひとつは単純なことで、魔力や生命力を運用するのが下手ならしなければいいじゃない、ということだ。

どういうことかというところ、自身の耐久力、恒常性維持機能、迅さの全てを強化することは僕には無理だが、迅さだけなら何とか可能らしいので、体がぼろぼろになることにかまわず迅さだけを強化するのだ。

幸いにして肉体の再生能力が異常に高いので、耐久力と恒常性維持機能については強化する必要はないらしい。あくまで、ある程度の速度までなら、だが。

その結果生まれた魔術が『ステロイド』。

生命力をどこまでも酷使するこの術式は、5倍の速度が限界で、さらに持続時間も30秒以上は再生速度が追い付かなくなる。

才ある者なら当たり前にこなすことを、粗悪な素材で無理やり組み立てた欠陥だらけの術で代用しているのだから、偉そうに名前なんてつけてる場合じゃないのだが。

まあ、僕は100メートルを12秒で走るから、5倍すれば時速150キロ。剛速球くらいの速度は出せるわけだ。

姉さんなら余裕で音速を超えるけどね。

ただのパンチなのに衝撃波で命中しなくても人を殺せるってどういうこと……。

そんな僕めがけて忍者が赤い炎を放ち、また、僕の目の前で大爆発が起こる。

《緋竜七咆》と《爆炸吼》の忍術だな。以前キュラソーさんが使っているところを見たことがある。

《緋竜七咆》は1200度の猛火で骨まで焼き尽くし、《爆炸吼》

は秒速2000から6000メートルの爆風と爆熱を発生させると
いう恐ろしいものだが、

「シェイクスピア曰く、“火を消すには火を以て為せ”ってな！」

感覚が、思考が、動作が5倍に引き上げられている僕は、右手の炎
で悠々とそれらを飲み込む。

それだけでなく炎は彼らの身体にまで飛び移り、数十秒後の死の宣
告を与える。

これまでの修行で分かったことだが、この、全てを燃やす炎にも燃
やしやすきものと燃やしにくいものがあるらしい。

端的に言えば、小さく実体のないものの方がよく燃える。

逆に、剛性や体積が大きいものは燃え尽きるまでに時間がかかる。
墮天使たちなんかがよく使う光の槍なら簡単に取り込めるが、姉さ
んが投擲した巨大な釘はおそらく燃え残って炎を貫通してしまう。
盾として使うにはこの炎は万能ではない。

だけど、この戦いに限ればほとんど盤石だ。

忍者というのは、結局は人間だからか、一つ一つの攻撃がそれほど
重くない。

巨大な質量や運動量を発生させるのに向いていない、というべきか。
《雷霆鞭》も《曝轟蹂躪舞》も《微塵極針》も《緋竜七咆》も、恐
ろしい威力であることに間違いはないが、雷撃・爆風・無数の針・
高熱のどれをとっても僕の炎との相性は最悪だ。

また、これも修行（やむを得ず馳尾を実験台にすることになったが）
の内に解ったことだが、僕の炎を防御する手段はないが、時間を稼
ぐ術はあるらしい。

根源的に先ほど述べたことと同じことなのだが、僕の炎には量によって処理限界（あるいは消化速度限界か？）の様なものがあり、別の何かを敢えて燃やさせることによって自身の肉体にまで火が及ぶことを遅らせられるのだとか。別の何か、というのは要するに魔力や神力などのエネルギーだ。つまり高い魔力を持つものなら僕の炎に対して最低限の抵抗^{レジスト}をすることは可能、というわけだ。

この点でも、単なる人間である忍者たちではどうにも出来ない。

これがキュラソーさんに語った勝算の内訳である。
ふふふ、見直したか？

……本当のところ、これはあくまで“勝因”であって、それをうまく活用して現実の勝利へと繋げるのが僕（才能レス）である以上、“勝算”なんて言葉を使うのは誇大広告どころの話ではないのだけど……。

駄目な人間ってのは、優れたところを何も持たないから駄目なんじゃない。

どんなに有利なモノを持っていても、それを台無しにしてしまうから駄目なんだ！

まあ、なんとというか、僕が優勢に戦いを進められていたのも最初の十秒くらいだった。

予定調和すぎてあくびが出るな。

敵の一人が短刀を構えたかと思うと、一直線に僕に迫ってきた。

（少々の犠牲にかまわず、接近戦に切り替えたか！）

しかし驚くことではない。質量のあるものは燃えにくい、という程度特性を見抜かれることは予測していたし、それに対しての対応策も打っていたからだ。

この十秒間の攻防の間に放たれた僕の炎は、すでにこの戦場をほぼ完全に覆っており、僕に接近戦を挑むということは全身が火だるまになることを意味する。

限界がある、と言ったばかりだが、僕の炎の延焼速度は恐ろしいもので、僅かな火の粉からでも数十秒で一人が完全に燃え尽きる。まして全身火だるまなんて状態からなら、十秒で消滅、3秒で死亡、戦闘不能までなら一秒もかからない。

ステロイドをキメた僕なら本職の暗殺者とやりあえるほどではないが、一秒程度やりすごすことは簡単だ。

その筈、だったんだが……

ずどおおおん！

と、火だるまになった男が僕の目前で自分自身を爆裂させやがったのだ。

男が装備していた、一般人からすれば重い、金属製の装備が秒速2000から6000メートルの爆風に乗って僕に殺到する！！

それだけではない。

見れば、あとからあとから忍者たちが、自身の命を使った質量攻撃を繰り返している。

(ここまで、やるのか!?)

昨日の接敵で任務達成のためなら多少の犠牲はやむなし、という狂
気じみたストイシズムは感じ取れた。

しかし、まさか任務達成のためなら部隊の全滅もいとわれないなどと
は、僕の予想の範疇を超えていた。

ただ一人(枢機卿長たちを暗殺するための戦力だろう)を除いてす
べての忍者が僕一人をつぶすためにその命を文字通りに散らす。

ディフェンス
守る側であるため門の前から動けない僕に、刃の突風が、鋼の波濤
が迫る。

その多くは炎にのまれて消えていったが、炎の限界を超えた幾部分
かが僕の守りを貫き、

そして

全身がズタズタにされた僕は、仰向けに倒れる。
受け身もとれず。

辺りを覆い隠していた朱い炎がふっと消失。

残された忍者が、短刀を手に静かに近づいてくる。とどめを刺す気
だ。

僕の身体から、不気味に赤い血液が流れ落ち、広がってゆく。
全身の損傷度は深刻だ。

『ステロイド』は欠陥品で、耐久力を強化することができない。つまり僕は生身の人間と同じ打たれ弱さ、と言うわけだ。頼みの再生力もついさつきまで酷使していたため、大きく減退している。ドーピングの副作用が出た、と言うわけだ。誰の眼から見ても勝敗など明らか。ぼくのぼうけんはここでおわってしまった！

しかし、

ガリツと地面をひっかいて、よろよろと僕は立ち上がる。

そのよるめき具合、殺虫剤を食らってしばらく経過したG・キブリに酷似。

異変を察知した忍者が再び僕と距離をとる。事態の原因を探る眼が、僕の左手に留まる。

僕の左手、その肩口までがぬらりと黒い流線型の異形へと変質している。

手の甲には3つの小さな縦の亀裂と、横向きの比較的大きな1つの亀裂。

それぞれ目と口に当たる位置に配置されていて、横向きの亀裂だけがぱくり、とその深淵をのぞかせている。

才能も素質もない僕の唯一の強み、それが神器『セイクリッド・オブ・スネーク・キング』だ。当然、僕が最も心血を注いだのがそれを使いこなすこと。

そのために何度か自分の中へと潜ったのだが、そこで僕は逢った。神器に封じられた本体に。

見た目も声も闇に包まれて解らないソイツ（コナンの犯人ではないだろうが）は、そのおぞましい左手で僕の左手をつかんだ。

目覚めた時僕の左手はこうなっていた。

左手を感染されたのだと直感的に理解した。

「切り札は先に見せるな、って小学校で習わなかったか？」

戸惑う忍者に余裕ぶってそう言葉を投げかける。

小5の時の担任教師が幽白のファンだったんだ。

ふふふ、伏線もなしに新たな力が登場するわけがない、とでも思ったか？

甘いんだよ！！

小説のような整合性を求めるな、これは現実なんだからな！

……なんか構成力のない素人作家モドキの言い訳の様なものが聞かえた気がする。

しばし迷ったようだが、結局忍者は短刀を構えて突っ込んできた。

まあ、普通ならそれが正解だろう。

先ほどまでとは違い、一面の炎と言っわけではなく、さらに僕は満身創痍でろくに動けないとなれば。

だけど、この場合は　　この左手相手にだけは、それは失敗だった。

僕の右腕は、正確には『蛇王の復活』の一部、

『序の口・貪食の舌』ワースト・ファーストと言っらしい。

そして左腕、その名前は

『破の口・衰退の唄』イグジウスト・ネクスト。

その力は……

忍者が走る。目にもとまらぬ駿足で。

短刀をふるう。機械のような正確さで。

そうなるはずだった。

だが実際は、油が切れたようなぎこちない動きで、歯車がかみ合っていないような見当違いの攻撃を繰り返している。

そしてそれに最も困惑しているのは、他でもない忍者自身だった。

僕はそれを、傷だらけで加速魔術も解けた肉体でのらりくらりとかわす。

『衰退の唄』の力は、局所空間の物理法則に干渉してあらゆるエネルギー変換効率を著しく低下させること。

解りやすく言えば、敵の全ての力を弱くすること。

先ほどの自爆テロも、破片が僕に到達するまでにその威力のほとんどは減殺されていた、と言っこと。

そして、今僕の目の前で無様な動きをしている忍者だが、これも相性が最悪だったとしか言えない。

身体能力でどうしても劣る人間がバケモノなんかを相手にしていくには、“速さ”ではなく“早さ”を極めるしかない。つまりどうするのか、と言うと動きに無駄をなくすのだ。そして相手の速さを封じる戦術を組み立てる。

そのためには、自分がどんな動きが可能なのか、と言う精密なデータが必要なのは言うまでもないが、『衰退の唄』はそれを狂わせる。経験豊富な手練れであればあるほどペースをかき乱されれば弱い。しかも『衰退の唄』は変換効率の下げ具合を自由に操作できるため、新たな条件に適応する暇は与えない。

このようにして熟練の忍者は僕みたいな満身創痍の素人に手玉に取られ、隠し持っていたナイフ（木場先輩に作ってもらったもの）で喉笛を割られる、という運びになったわけだ。

「ふ、ふふふ」

敵 殲滅完了

僕 ギリギリ生存

「勝った！」

いろいろ準備しておいてよかった！
約束も守れて無事生き残ることができた。
僕にしては怖いくらいの戦果だ。

「やったぞ！これで」

と僕は快哉を上げ、

「それフラグ」

と頭上から突っ込みを入れられた。

ええー………？

s a l v a n o s (後書き)

理解っぽいとるは適当ぶっりにてるので、あしからず

f a t a l f i g h t (前書き)

自分の中二ぶりに鬱になる。

f a t a l f i g h t

剣戟が、交差する。剣閃が流れ、剣風が殺される。

黒い黒い二つの影が、音も置き去りにして

屋根の上を、水の上を、壁の上を、

大地の上を、空の上を、死の上を、

跳ねて踊って駆けて奔って揺れて狂う。

ひとつの影は、まだ若く、それゆえに力強く、

ひとつの影は、歳を重ね、それだけに力強い。

剣と剣が、剣に剣を、打ち合わせ打ち合わされ、その隙間を雷撃や闘炎が彩る。

寒々しいほどに洗練された、熾烈な殺し合い。

一方の視界には他方しかおらず、

他方の光彩も一方だけを捉える。

それぞれの心は相手を容赦なく殺害することだけに澄み切っていて、それゆえここには恐怖も苦悩もない。

この美しい戦いは、どちらかが死ぬまで、あるいはどちらとも死んでも終わらない。

それは8年前、まだ私が5歳だったころのこと。

私の両親は重要な任務に失敗し、処刑された。

娘の私はまだ幼かったこともあつてか追放だけで済んだけど、外界との関わりなんて甲賀の里では何もなく、必然的に頼れるものなど何も無い世界に、私はひとり、放り出された。

運よくクローセル様に拾われなければ、到底今日まで生きては来られなかっただろう。

別に、そのことで誰かを恨んだりはしていない。

それは、辛かったし苦しかったけど、私は忍者と言うものに憧れもあつたし、そんな生き方をしていた両親のことを尊敬もしていた。

とても厳しい世界だということは理解していたから、その結末に疑問も抱かなかった。

真相を知るまでは。

知ったのはまさに偶然。

忍者の里の、それも極秘情報を里の外にいた私が入手してしまったのだから、どれ程の幸運かは窺い知れるだろう。いや、この場合は不運と言うべきかもしれない。

それは、どこかで耳にしたことがあるような、陳腐でつまらないものだった。

当時、甲賀忍が仕えていた家は、ある問題を抱えていた。

次期頭首となる長男の恋人。

彼女はまさに解語の花とでもいうべき美しい女性であったが、傾城でもあった。

家の乗っ取りを画策していたのである。

それを知った頭首は長男を説得しようかとも考えたが、彼は既に彼女に魅惑されており、とても話を聞き入れるとは思えなかった。

かといって無理矢理排斥すれば長男の反感を買うのは必至。

ともすれば駆け落ちや心中の恐れさえもあった。

だから頭首が暗殺と言う手段を選んだのは、当然の流れだったのだろう。

より真実味を増すために、無能な忍者の護衛任務失敗による事故死に見せかけたことも。

その忍者を処刑して長男の怒りを宥めるのに利用したことも。

その役割に、甲賀真伝の信頼のおける部下であった父が選ばれたことも。

誰が悪いわけでもない、寧ろ誰もが被害を最小限に留めようとした結果であり、その全てが正しき選択だった。

でも

その正しさのせいで、両親は死に、里の誰もが無能な落伍者と呼んでいる。

そうなる運命だったのだ、なんて言葉では、自分自身を納得させられなかった。

だから私は、自分の運命と決着をつけなければならない。

娘の私が、両親の汚名をすぎ、力を証明しなければならない。

復讐ではなく、私の再出発のために。

弧を描いて接近する超高速の刃を、短刀の峰で受け、逸らす。

返す刀で右手の手首を狙う。

しかし左の手刀を回避するためにやむを得ず中断。

躲しながら《雷霆鞭》を放つ。

《導伝散乱絶壁》の忍術で瞬時に構成された超伝導体の壁に防がれる。

真伝は《微塵極針》の忍術を行使。数億本の不可視の針がキュラソに迫る。

咄嗟に強力な磁場を発生させ、それらを弾く。

再び接敵し、夜鴉を振りかぶる。

魔力で強化された全身の筋力を用い、電磁加速をも載せた最速の一撃。

しかしそれは、真伝からすれば好機でしかない。

そもそも人間と悪魔という差から、迅さでいえば大きく劣るはずの真伝が互角にキュラソと渡り合えた理由は、豊富な経験による動作の予測によるものが大きい。

どれだけ速い一撃であろうと、来るのが解っていればいくらでも対処は可能。

そして今放たれた一撃は後のことを考えない乾坤一擲。これさえ凌げば勝利は確定するのだ。

だが、凌げるはずの一撃は、死に腕でしかないはずの一振りは、

「!!!」

真伝の手元で

ほんの数センチ、ブレた。

鮮血の飛沫が、舞う。

電磁加速。それは甲賀忍術においては《電加》という名で呼ばれており、高度なものではない。

しかし本来の《電加》は武器だけに作用させるもので、ここぞという一瞬に働かせるものだ。

キュラソーの場合、それを全身に、恒常的に使用している。

それは魔力という燃料が十分にある悪魔だからこそ可能な応用だが、それだけではない。

高度な精密性が必要なのだ。

キュラソーはクローセル配下のうち、最大破壊力では蘭乱爛崎姉弟に劣り、拠点制圧戦では馳尾に劣り、対軍攻防ではフロレットに劣るが、対人戦闘や情報収集、何より精密動作性においては間違いなくトップの実力を持つ。

だからこそ彼女の電磁加速は、加速だけでは終わらない。

電磁力を運動と同じ方向に作用させればそれは加速となるが、逆方向ならば減速になり、それ以外なら軌道変化が起こる。

電磁加速、という言葉がそもその偽装。

自分の肉体に念動力テレキネシスを上乗せしていると考えるべきだったのだ。

当然、人体の構造上有り得ない動作をするのだから、掛かる負担も

大きい。
魔力による強力な肉体強化があつてこそ成立する術式である。

(仕留めそこなつたか……)

それでも、甲賀真伝を絶命させるにはあと一歩足りなかった。彼女の刃は、確かに男の左顔面を眼球ごと縦に割り裂いた。しかし、目の前にいる男は既にその修復を完了している。

《胚胎律動癒》

未分化細胞や多能性幹細胞を傷口に発生させ、新陳代謝を超促進することで秒単位で負傷を治癒する忍術。とはいっても、人間で本当に1秒かからず頭蓋の一部や眼球を再生させられるなど、甲賀真伝ほどのものだけだろう。

「惜しかったな。後一寸で修復不可能なほどに脳を破壊できたのだが」

忍者らしくもなく、相手を称賛するような口調だ。

「任務中に敵と言葉を交わすなど、拙者の知らぬうちに甲賀も随分

と腑抜けてしまったようですな」

キュラソーの言葉はどこまでも攻撃的だ。

「余裕の表れだ。今頃は奴らが任務を果たしているからな。貴様を護衛から引きはがした時点で我らの任務は終わっている」

「果たして、そうでしょうか？」

「何？」

くすり、と笑って彼女は反駁する。

「彼の力は未知数なのです。仲間の拙者にとっても」

あるいは、彼自身にとっても。

それを聞いて、彼は鼻で笑い

「だとしても、どの道」

どの道？

疑問符を浮かべたキュラソーに答えず、彼は

「錢別だ。儂の奥義の一つを御覧に入れよう」

と行って忍者等を鞘に収め、構える。

(居合？しかしこの距離でそんな見え透いたものを……)

神経をとがらせ、攻撃に備えるキュラソー。

次の瞬間、唐突な悪寒。

気が付けば彼女は全力で跳躍し、緊急回避していた。
遅れて聞こえてくる爆音。

かろうじて着地するも、視界に異物を捉えた。
それは、白い、見慣れた 自身の左手。

手首の少し上から先がない彼女の左腕からどつと血が噴き出る。
眩暈や頭痛、嘔吐感に襲われる。

一体、何が ？

「《爆炸刀》という」

声のした方には、甲賀真伝が立っていた。
その手が握る忍者刀には、彼女の生き血と、僅かな黒い煤。

(そういうことか)

おそらく《爆炸刀》とは、鞘の中で《爆炸吼》の爆発を起こし、その爆轟圧で放つ居合だ。

鞘の中で起こった秒速2000から6000メートルの爆風は逃げ場を求めて刀を押し出す。

その勢いのまま敵を切り裂くのだろう。

正気ではない。

ほんの少しでも制御に失敗すれば、あらぬ方向に飛んでいくだけでなく自分自身を滅ぼす。

そもそも、どのような訓練をして我が物としたのか。

目の前の男が、甲賀の里始まって以来の天才だと言われていることを思い出す。

齡60を過ぎてなお最前線で戦っている、甲賀真伝の名は伊達ではない。

(しかし)

種が解れば対策は可能だ。

さしあたって問題となるのは……

《灼剣》を発動。

高圧電流を刀身に加え、高熱を発生させる。

刀の攻撃性を高める忍術なら、刃に高熱のプラズマをまとわせる《雷電長槍》の方が上だが、今はこっちで十分。

じゅうじゅうじゅう

聞くだけで熱を感じさせる音とともに左手の傷口が焼けていく。動物を燃やしたときに生ずる胸が悪くなる悪臭。蒸発した脂肪が煙になる。気が狂いそうな痛苦に耐え、強引な止血を終える。

ふらつく肢体を歯を食いしばって御し、右手一本で構える。

甲賀真伝もまた構える。

((これで、決着をつける!!!))

一瞬のうちに隣接し、切り結ぶ。《爆炸刀》もこの距離では使えない。

真伝の猛攻を電磁気力を最適活用しつつ、右の刃で凌ぐ。

深手を負ったキュラソーと年老いた人間の真伝とでは体力は拮抗しており、力押しでは勝負がつかない。

甲賀真伝が自分の身も顧みず《緋竜七咆》の七条の火炎を放つ。

やむを得ず距離を開けるキュラソー。

すかさず《爆炸刀》を抜く。

超高速の斬死がキュラソーに迫る。

甲賀真伝の刃が黒いスーツの上着を切り裂いた。

忍者の基本にして究極、《晩夏空蝉》による身代わりの術である。

しかし甲賀真伝の身体が反転、勢いを殺さぬまま本体に追撃をかけた。

しかし、今度はスーツのパンツを掴にして逃れる。

俗にいう下着ワイシャツ（+ネクタイ）である。

身代わりを使うことを見越していることを見抜いた、二重発動。単品ならばそう難しくない忍術も、同時に使うならば難易度は格段に上がる。

女性として、なんだか少し涙目になりつつも、ついに宿敵の隙を突くことができた。

「《電乖闘葬雷珠》！！」

超高熱に輝くプラズマ球の奔流が、甲賀真伝の胴体を貫き、半分ほどを蒸発させる。

これだけの損傷に再生が追いつくはずもなく、甲賀真伝はそのまま絶命した。

彼女は勝ったのだ。

左腕を失い、下着ワイシャツにネクタイ、黒のハイソックスと革靴はそのままというマニア仕様の屈辱を受けながらも、ついに、ついにやり遂げた。

一対一の戦いだから果たせた勝利だ。

彼が他の敵を引き受けてくれなければこの勝利はなかった。

ああそつだ彼はどうしているだろう、と今の自分の姿も忘れて駆けつけようとした、その時。

「まさか、な」

「一人とはいえ、殺しおおせるとは」

「最後の奥義までも見せることになるうとは」

「この天賦の才、追放してしまったことが悔やまれる」

「まったく、惜しい」

「この場で摘み取らねばならぬのが」

囲まれていた。

6人の男。

6人の忍者。

6人の 甲賀真伝。

《甲賀式七蜂群刺》

それは忍者といえただれもが思い浮かべるものだ。

しかしこれは幻術でも操り人形でもなく、

完全な自分自身の複製を6つ生み出す忍術。

一人の甲賀真伝の死と同時に発動する、彼の究極奥義。

対するは、片腕の抜け忍が一人。

宿命の戦いはまだ終わらない。

f a t a l f i g h t (後書き)

書き駄目したのはここまで。

なんて正鵠を射た誤変換 W W

ウチのワープロソフトは侮れない。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9052s/>

蛇と土精と悪魔とか？

2011年9月17日18時45分発行